
COMBINATION

遙-ombrage

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COMBINATION

【ズームード】

N7327D

【作者名】

遙 - o m b r a g e

【あらすじ】

警察官たちのお話です。主人公は、望月修平、26歳。県警本部捜査一課に人事異動になつた修平とコンビを組むのは、顔はいいが、つねに無表情で何を考えているかわからない田村恭一。まったく頼りにならない上司や女好きで世話好きな同僚など個性あふれるメンバーが登場します。修平と恭一の息の合つた（？）コンビぶりをお楽しみください。

1

いつまでも、ここに突っ立っていても仕方がない。

俺は十度目の深呼吸をし、ドアを開けた。

「失礼します。本日付で捜査一課強行犯捜査係に配属になりました
望月修平です」

「よし、望月。行くぞ」

短く髪を刈り上げた中年の男にいきなり声をかけられたかと思う
と、次々と捜査員らしき人間が俺の横を抜けて廊下へ出ていった。
訳が判らず戸惑う俺に、「ついてこい」と俺と同年ほどの男が声
をかけてきた。

「え、あの、どこく……」

「事件だ。俺はあんたとコンビを組むことになつた田村。一応、よ
ろしく」

田村と名乗つた男が早口で言つた。

「事件？」

「早くしろ」

田村は足を止めることなく進んでいく。俺は慌てて田村の後を追
つた。

階段で地下駐車場まで下りていくと、田村は一度も俺の方を振り
返ることなく黒いデミオに乗り込んだ。

俺はどうすればいいのか。彼の車に乗り込んでいいのだろうか。
それとも、自分の車で彼の後をついて行くべきなのか。わからん。
エンジンがかかつた。慌てて彼の車に走り寄り、運転席の窓を叩
くと、「早く乗れ」と田村が睨みながら窓を開けて言つた。

「え、あ、はい」

急いで助手席に回り込み、車に乗り込んだ途端に田村は車を発進

2

させた。俺はシートベルトをかけながら、事件についての説明を待つた。

事件ってどんな事件だ。強盗、傷害、まさか殺人か。初仕事で殺人事件は遠慮したい。でも本部が動くつてことは、やはり殺人だろうか。

まだかまだかと田村からの説明を待つたが、結局、南警察署に着くまでこの能面男はひと言もしゃべらなかつた。こんなしんどいドライブは初めてだ。

「おい」

さすがに腹が立ち、車から降りようとする田村に声をかけた。だが、田村は俺を無視して車から降りるとスタスタと正面玄関へと歩いていく。

「ちょっと待てよ！」

急いで車から降りると先を歩く田村の肩を掴んだ。すると彼は俺の手を払いのけ、振り向きざまに、「詳細は今から始まる捜査会議で聞けばいいだろ」と言ひ放ち、せつと建物の中へと入つていつた。

俺は呆気にとられながら田村のうしろ姿を見送つた。

「なんだ、アイツ……つーか、ムカつく！」

堪らず地団駄を踏む。

「やほー、新人。荒れてるねー」

背後から軽い口調で声をかけられた。振り返ると、男前と美人が立つてゐる。

「あの……」

「篠原班にようこそ。俺たち、君の先輩ね。俺、若林。彼女は「若林が隣の美人に手を差し向けると、「里見です」と名乗つた。

「あ、よろしくお願ひします。里見と言います」

「よろしく。じゃあ、行こうか」

そう言つと、若林は歩きながら事件の概要を手短に説明し始めた。よかつた、まともな先輩がいて。

予想していた通り、やはり殺人事件だつた。しかも犯人は三人の命を奪つてゐる凶悪犯。交番勤務の時にも何度か殺人事件の初動捜査に加わつたことはあつたが、あの時とは訳が違う。本部の刑事として捜査をするという重責に動搖を隠せないでいる俺に若林は、「力み過ぎるなよ」と背中を軽く叩いた。

「は、はい」

上擦つた声をあげた俺に、里見がくすりと笑つた。

美人に笑われてしまつた。落ち込みかけた時、「誰でも始めは緊張するわよね。私も、若林くんもそうだったから大丈夫よ」と里見が言つた。

「あ、りがとうございます」

緊張の糸が解れ、肩の力がスッと抜けた気がした。強張つていた表情も、いつものしまりのない顔に戻つてゐる。美人の威力はいろいろとすごい。

「じゃあ、行こうか」

若林は奥の講堂を指差し、歩き出した。

講堂の入口には「連續強盗殺人事件」と書かれた看板が掲げられている。若林たちの後について中に入ると、五十人ほどの捜査員たちが険しい顔をしながら捜査資料に目を通してゐた。

ピリピリと張り詰めた空氣に、再び顔が強張る。

「望月つ」

いきなり肩を掴まれてギヨツとする俺に、「班長の篠原だ。初日から大変だろうが、しつかり頑張れよ」と刑事部に入つた時に声をかけてきた男がニヤリと笑いかけてきた。

「は、はいっ」

また声が上擦る。

「じゃあ、席は田村の隣な」

篠原は田村を指すと、俺たち捜査員と向かい合う形で置かれていた席へと戻つていった。俺はうな垂れながら、捜査資料に目を通していた田村の横の席に腰かけた。

案の定、何の反応もない。考えるのも面倒なので俺はすぐに机の上に置かれていた捜査資料を手に取る。緊張で手が震える。

本部の人間として捜査に加わる以上、足手まといにだけはなりたくない。俺は捜査資料を掴む手に力を込めた。

事件は、一ヶ月前から同様の手口で三件起きていた。

犯人は深夜に独り暮らしの老人宅に押し入り、住人を殺害後、現金を奪つて逃走していた。所轄署によつてすぐさま初動捜査が行われたが、犯人の目撃情報はおろか、被害者間の繋がりも見つけることができず、捜査は難航した。そして本日、捜査本部の設置となつたのだ。

被害者の唯一の共通点は、当日、銀行で現金を下ろしているということだった。ただし、金額も利用した銀行もバラバラで、金額は三件合わせても二十万程度。

当初、所轄署は犯人逮捕は時間の問題だと高を括つていた。銀行には防犯カメラがあるからだ。けれど銀行や付近の防犯ビデオを回収したが、三件の銀行の防犯ビデオに共通する人物はおろか、不審な動きを見せる人物も映つてはいなかつた。

焦る捜査員たちの姿が目に浮かぶ。俺は所轄署の捜査員たちの報告を聞きながら、資料に視線を戻した。

犯人について判つているのは、右利きであることだけ。犯人は持参した刃渡り二〇センチほどのサバイバルナイフで被害者を刺殺していた。そして司法解剖の結果、それが判つた。

だが、この世の中に右利きの人間 ちなみに俺も右利きだが どれほどいるか。俺は、周りに気付かれないように小さく溜め息をついた。

俺と田村は地取り捜査　被害者宅の周辺を聞き込む班　をすることになり、田村の車で三番目の被害者宅へと向かう。車中、チラチラと田村の方に視線を送つたが、ヤツはひと言も発することなく車は現場に到着した。

しんどい。まだ捜査もしていないのに、車中にいた十分ほどでかなりの神経をすり減らしてしまった。

俺は先を歩く田村の背中を見つめながら、大きな溜め息をついた。古い民家が立ち並ぶ、閑静な住宅街。この辺りは、ほとんどの家が子供が独立している年配者夫婦の家庭で、就寝時間もかなり早いようだつた。しかも昼の時点でこの人通りの少なさ。深夜なんてほとんど人なんて歩いていないだろう。

俺は、不気味なほど静かに佇んでいる主を失つた家を見つめる。その周囲には黄色い規制線が張られている。部外者の侵入を阻む為にこうより、この家の中で起こつた惨劇を忘れさせない為に張られているよう感じた。

「なんだか遣り切れない事件だな

「何が？」

田村は手帳を見ながら、聞き込みの済んだ家にチェックを入れている。

「だつて五万円で殺されちゃうんだぜ。しかも老人狙つて強盗するのも卑怯だろ？近所の人たちも被害者との交流がほとんどなくてさ独りきりで生活して、誰にも知られず殺されちゃうなんて、悲しいよな」

もしヘルパーの人を見つけていなかつたら、発見ももつと遅れていただろ？。そうなついたら、亡くなつてもなお独りきりでいなければいけなかつたのだ。哀しそうな顔をした。

田村が立ち止まって、俺をじつと見つめた。

「お前、刑事に向いてないな」

そう言つと、スタスター歩いて聞き込み先の家のインター ホンを鳴らした。

呆気に取られた俺は、その場に立ち尽くす。

なんだ今。バカにされたのか。ふつふつと怒りが込み上がる。
初対面のコイツの失礼な態度にも俺は我慢した。一緒に行動することになったにもかかわらず、なんの配慮もなく協調性に欠けるコイツの性格にも俺はなんとか我慢してきた。世の中いろんな人がいるんだな、とそんなに広くない心を薄く広く伸ばして俺は許した。

なのに、なんだその言い草は。

俺は田村は睨みつける。

絶対、コイツに俺を認めさせてやる。

洗面台に手をつき、大きく息を吐く。そして目の前の鏡に映る自分の顔を見つめた。

酷い顔だ。

ここ数日、まともに寝ていられないせいか目の下にくまができていた。顔も数日前に比べると随分とやつれている。

捜査本部が設置されてから一週間。新たに一件、同一犯による事件が発生し、これで被害者は四人となつた。

四人目の被害者も、他の被害者同様、事件当日に銀行で少額の現金を下ろしていた。

俺たちは、犯人の凶行を止めることができなかつたのだ。

「つくそ！」

俺は洗面台に思い切り拳を振り下ろした。蛇口をひねつて乱暴に顔を洗うと、排水溝に吸い込まれていく水を見つめながら、唇を噛み締めた。

悔しい。俺たち警察がもつと早く犯人を捕まえていれば、こんなに犠牲者はでなかつたはずだ。

……それを思うと、悔しい。

「　　おい！」

肩を掴まれ、ハツと我に返ると、無表情の田村が立つている。

「事件のことで心ここにあらずつて感じだな。捜査会議始まるぞ」

田村は捜査本部の方を顎で差した。捜査から戻ってきた捜査員たちが続々と捜査本部へ入つていいくのが見えた。

「　　ああ、そうか」

寄りかかっていた窓枠から離れると、フラリと体がよろけた。俺は慌てて窓枠を掴み、体勢を立て直す。

何か変だ。頭が朦朧とする。ここにところ食事もたいして取らず、連日泊り込みをしていたせいか。うまく力も入らない。

そんな俺の様子を見て、田村は呆れるように息をついた。

「それじゃ、捜査もろくにできないだろ。力み過ぎなんだよ」

その言葉に、何かが切れた音がした。

俺は田村の胸ぐらを掴み、そのまま壁に体を押し付けた。

「力入れて何が悪いんだよ！俺たちのせいで四人も亡くなってるんだぞ！ふざけんな！」

本当のことだ。自分たちの捜査が至らなかつたせいで、何人もの人が犠牲になつているのだから。

ところが、どうしたことかいつも無表情の田村の顔がみるみる凶悪な顔に変貌していった。驚いて胸ぐらを掴んでいた手を緩めると、田村は乱暴に俺の手を払いのけた。

「お前こそふざけるな！警察がなんでもできると思ってるのか？警察の怠慢で殺されたとでも言うのか？じゃあ、お前は今までの捜査で手を抜いていたのか？他の捜査員が手を抜いていたとでも言つのか？殺す人間がいる限り、殺人は起こるんだよ！」

田村は一層鋭い眼差しを俺に向け、

「冷静になれ。俺たちのやるべきことは、犯人を逮捕することだろうが。自己批判や感情移入は、犯人を捕まえてから一人でやつてくれ」

そう言われた瞬間、体から熱が引いていった。

刑事としての熱が冷めた訳ではない。今まで頭の中でぐちゃぐちやに絡み合っていたものが解け、いきなり目の前の視界が広がつた感じがした。

「ひつ」

俺は思わず声を上げる。

俺たちの周りを若林たちや篠原、そして一課長の小林などの面々

が取り囲んでいることに、今気がついた。どれだけ視界不良だったんだ、俺は。

固まる俺を小林はギロリと睨み、「終わったか？馬鹿どもが！時間を使ひ遣いするな！」と廊下中に響き渡る怒声を俺たちに浴びせた。

田村は平然としていたが、一九〇もの上背のある刑事部の中でも一、二を争うほど強面の小林に睨まれ、俺は蛙のよつに身動きひとつできないでいた。怖すぎる。

「すみませんでした」

なんとかそのひと言を絞り出すと、小林は「ふん」と大きく鼻を鳴らし、捜査本部へと戻つていった。

俺はホツと胸を撫で下ろし、ちらりと田村を見る。さつきと同じく、何事もなかつたかのように平然としている田村。俺は呆れを通り越して感心した。

コイツの心臓には、剛毛が生い茂つているに違いない。

何事かと部屋の中にいた所轄署の捜査員たちが顔を出す中、「望月、お前に捜査の基本を教えてやるつ。明日から、お前ら解析班に行け。いいな」と篠原がニヤリと意地の悪い俺にはそう見えた笑みを浮かべた。

銀行の防犯ビデオを解析し始めてもう三日。

白黒の単調な映像を一口中観続ける作業が、これほど辛いとは思わなかつた。よく映画館をはしごしたりするが、それとこれとは全然違う。解析班の仕事を甘く見ていた。

山積みされたビデオを投げ捨てたくなる衝動に駆られるのは、俺だけではないはずだ。俺たちの代わりに地取り班へと向かつた捜査員たちの顔がほころんでいたのを俺は見逃さなかつた。まあ、田村は別なんだろうが。

往来する通行人、ポストの手紙を集めする郵便局員、犬の散歩をする男性、制服姿の女性会社員、慌ててATMに駆け込んでくる主婦、ATMの操作を教える行員、作業服姿の男性。

ATMの機械に吸い込まれるように人が集まり、そして散つていく。そんな様子をただじつと觀ていると、多種多様な人間が機械の前に一様に並んでいる姿がなんだか不思議に思えてくる。

何の為に並んでいるのか、一瞬、判らなくなるのだ。それくらい、繰り返し何度も同じ映像を觀ていた。すべての映像を脳内で鮮明に再生することができてしまう自分が怖い。

椅子の背に深く腰を落とし、俺は溜め息をついた。

テレビで觀る刑事ドラマとは大違ひだ。刑事の仕事は、もつと華やかな仕事だと思っていた。でも実際は、なんていうか、地味。

こういう地味な作業を地道に繰り返して犯人逮捕に漕ぎつけていくのだが、こんな作業をドラマで続けていたら視聴率取れないよな。……まあ、拳銃ばんばんぶっぱなす刑事ドラマもどうかと思うが。

隣の田村を盗み見ると、相変わらず無表情で映像を觀続けている。飄々として何を考えているかさっぱり判らないが、それでも俺よ

り犯人逮捕への執念が強いことは、ここ数日、一緒に捜査をして判つた。悔しいがそれは認める。

なんだろう。篠原たちは、俺にコイツの生態研究でもしろというのだろうか。

堪らず頭を抱える。

……勘弁してくれ。まともな会話すらできず、どう田村と付き合つていけばいいのか判らないのに。

俺は事件のことを考えるべく、逃げるようになにか映像に視線を戻した。映像を見る限り、不審な人物は見当たらない。しいて言うなら、慌ててATMに駆け込んできた主婦が振り込め詐欺の被害者ではないか、と不安になつたことくらいだ。どうやら、振り込め詐欺の被害者ではなかつたようだが。

被害者の利用した銀行も時間もバラバラ。住んでいる地域も近くはない。だから捜査本部は、当初から複数犯の犯行と見ていた。

「複数犯、か」

「いや、単独犯だ」

田村がきつぱりと言い切つた。

おつと、無意識に口に出していたようだ。しかし、単独犯と断定する言葉が返ってくるとは思わなかつた。田村を観ると、相変わらずの無表情のまま画像を観続けている。

俺はまだこの表情以外見たことないが、コイツって笑つたりするのだろうか。想像できない。

俺は気を取り直し、「なんでそう思つんだ?」と田村に尋ねた。

「お前こそ、どう思つてるんだ?」

初めて画面から視線を外した田村は、俺を見据えた。

「どうつて……」

俺は一瞬口ごもり、

「被害者はバラバラの銀行で金を下ろしていることから、複数の人間が銀行で網を張つたと考えるのが妥当じゃないか? それにいくら老人とはいえ、声を出させずに殺すのは難しいだろ」

「そうとも限らない」

すぐさま田村は反論する。

「銀行で下ろされた金額は少額だ。網を張つて見ていたのなら、まずターゲットには選ばないはず。もし銀行で現金を下ろしているのを確認しただけとしても、複数の人間が住宅街をうろついたのなら、いくら閑静な住宅街とは言え目撃情報がでてこないのはおかしい。それに複数犯ならば移動には車が必要になつたはずだが、不審車両の情報もでてきていない。被害者は独り暮らしの老人ばかり。人間は、とつさにすぐ反応して声を出せるものじゃない。老人ならなおさらだ。独りでも声を出させずに殺すのは可能だ」

いきなり多弁になつた田村に俺は驚き、言葉を失う。自分の考えを否定されたことも忘れるほどの衝撃だつた。

「お前……なんだよ、普通に話せるんじやねえか」

俺は隣に座る田村の腕を思い切り叩いた。思わず顔が緩む。腕を

摩りながら俺を睨む田村に、「悪い悪い」と軽い口調で謝りながら俺は画像に視線を戻した。

「確かに単独犯なら目撃情報が出てこないのも頷ける。……被害金額つて四件合わせて一十七万だったよな。数人で分けるには少なすぎるか」

「それに、被害者がすべて独居老人つてのは偶然にしては犯人にとって都合良過ぎるとは思わないか?」

田村が言った。

言われて初めて俺はそのことに気づいた。

「そつか、そだよな……。ここには、犯人は顔見知りってことか?」

「まあ、事前にリサーチしていたのかもしれないけどな」

田村は自分で自分の疑問を打ち消すようなことを言った。納得した俺の立場はどうなる。

「なんだよ……結局、なんも判かつてねーんじやん」

不満げに言うと、「当たり前だ。判かつてたらデスクに上げてると」と氣怠そうに田村はワイシャツのボタンをひとつ外した。ネクタイはどうに外され、机の端に無造作に置かれている。

「だよな」

俺はテーブルに頬杖をついた。

「つづーか、単独犯つてお前の見解も言つた方がいいんじやねーの?」

「そう思うなら、明日お前が言えばいい」

「は?」

思わず田村に顔を向ける。

「明日、お前が言え」

もう一度、今度は命令口調で言つてきた。

「はあ？お前、それは協調性がないとかの問題じゃないだろーが。つつーか、なんでそんなに偉そつなんだよ」

信じられない。

呆れる俺に、「さつき気付いたからな」としひと田村が答えた。「ああ、そういうこと。なんだよ、それを早く言えよ」でもその偉そうな態度はなんだ。

「今、言つただろ」

「遅せえよ」

俺は椅子の背にもたれ掛かり、

「つつーか、明日報告するにしてもなんか説得力のあるものを提示しないとなあ」

すると田村は腕時計を見つめ、「明日の検査会議まであと九時間ある。それまでに映像の中から不審人物を見つければいい」とさらりと言つてのけた。

俺は絶句する。

「……お前、頭大丈夫か？この地獄の三日間を思い出せ。それに、その前から他の検査員たちが探しても見つからなかつたんだぞ？」

お前はどうか判らないが、俺は結構ギリギリの状態なんですけど。片肘をつき、戸惑う俺を見つめる田村。俺を試しているのだろうか。生意気な。俺はネクタイをさらに弛め、映像の中の人間を見据えた。「見つけてやろーじゃねえか」隣から「その言葉、忘れるなよ」と声がした。「お前もな。

疲れた目をこすり、深く溜め息をつく。

……見つけられない。

目がかすんで、映像に集中できない。目頭を押さえ、椅子の背に深く腰を落とす。時計を見ると、午前四時を少し過ぎていた。あれから五時間、ぶつ続けて映像を観続けていたのか。顔をしかめ、隣の田村を見る。

疲れた様子もなく、真剣な眼差しで映像を見つめる田村。
なんて集中力だよ。

身動きひとつしない田村に俺は舌を巻く。

鉄人だ、鉄人。鉄仮面どころの話じやない。心臓に毛が生い茂る、つつーか鉄の心臓を持つた鉄人だ、コイツは。いつたい、俺はどうすりやいいんだ。リモコンとかないのか？取扱説明書は？
だいたい、新人の俺に何故こんな鉄人をあてがうんだ。若林さんとか里見さんとか他にもまだいるじやないか。まともな人間が。
……もしかして、俺歓迎されてないのか？

一瞬、沈みかけるが、思い直すように首を振る。

篠原や小林の性格からして、田村を俺にあてがった深い理由はない気がする。ちょうど俺が配属された時に田村が一人だったからと、いうだけで、合う合わない、コンビを続けるか解消するかは俺たち次第で関心がなさそうだ。

頭を搔きながら立ち上がる俺に、「おい」と田村が声をかけてきた。

「な、別に逃げねーよ。コーヒー淹れてやるつ、と思つて……」

俺はそのまま言葉を失つた。

田村が俺を見てニヤリと笑つたのだ。

「見つけた

「……は？」

間の抜けた返事をする俺に、「コレを観る」と田村はテレビモニターにいくつもの映像を並べて表示した。

モニターに映し出された画像のすべてに、ポストから郵便物を荷する郵便局員の姿が写っていた。

「……まさか、お前この郵便局員が怪しいことでも言つのか？」

そこにポストがあるのでから、郵便局員が集荷にくるのは当然だろい。

だが田村は満足げに映像を見つめながら、「この郵便局員がすべて同一人物だつたらどうする？」と言つた。

「同じ？」

俺はモニター画面に視線を戻す。

「ああ。事件はバラバラの町内で起きてはいるが、すべて同じ区内で起きている。調べてみる価値はあるだろい。被害者の映るすべての映像の中に、郵便局員が映っているんだからな。四件の事件で唯一の共通点と言つてもいい」

俺は田村の言葉を無言で聴いていた。

何度も観ていた映像。この郵便局員のことももちろん覚えている。なのに、俺には気づけなかつた。いや、無意識のうちに除外してたのかもしれない。

そこにポストがあつたから。

「落ち込む前にやることがあるだろ。捜査会議までに見つけてやるつて言つたよな」

田村が俺を現実に引き戻す。

「……お前もだろーが」

悔しげに顔を歪める俺に田村は、「報告するのはお前だ」と言つた。

「お前な……」

俺はチラリと映像に視線を向ける。

「確かに、ヤツの乗ってきた車も映ってたよな。まずは、ナンバーの確認と集荷区域の確認だな」

調べた結果、映像に映る郵便局員はすべて同一人物だということが判明した。

その後、この郵便局員を任意で事情聴取すると彼はすぐに犯行を認めた。

借金の返済に困り、銀行で現金を下ろしていた老人を狙つたのだという。集荷業務をする前は配達業務をしており、被害者とは顔見知りだったらしい。だから殺した、とも彼は言つた。

被害者に繋がりのあつた数少ない人間が犯人だつたことに、ショックを受けた。たかが数十万で、どうしてそんな簡単に人を殺すことができるのか。

罪の意識の薄い男の言動を思い出す。俺は瞳を閉じ、唇を噛んだ。窓枠に置いた手に力を込める。

「お疲れ」

背後から声がした。

振り返ると、田村が缶コーヒーを投げて寄こした。慌てて俺はキヤツチする。

「危ないだろ」

せめて少し間をおけ。

「そんな鈍いのか、お前」

「失礼な」

田村を睨みつけ、俺は缶コーヒーのプルタブに手をかける。

「まあ、これからよろしくな」

「コーヒーを口に含んだと同時に田村が言つた。田村を見ると、ふつと少しだけ口角が上がつた。

笑つた。

俺は一瞬驚き、ゆっくりと頭から辻を離す。

「おう、よろしく」

悔しいが、なんだか少しだけコイツとしゃつていけそうな気がした。
……ほんの少しだけ。

俺はふっと肩の力を抜いた。

もう立ち止まらない。何があると、前に進むと決めたから。

俺の初めての事件は、こうして終わった。

episode1・9（後書き）

episode1完結です。

引き続きepisode2（加筆修正版）を隨時掲載していくつもりです。

また、「囁くもの」（新作長編小説）も掲載していくのでそちらも読んでいただけると嬉しいです。

ランキングの参加しているのでポチッと投票していただけると今後の励みになりますのでよければお願ひします。

ご意見、ご感想もお待ちしています。

つたない文章ですが、ありがとうございました。

episode2 刑事部の人々（前書き）

現在加筆修正を行つてゐるので、episode2の次がepisode5になつてゐますが気にしないでください。
もうしばらく、ご迷惑おかけします。

事件も無事解決し、しばらくは平穏な日々が送れるものと思つていた。

だが、そうさせてくれない人がいた。

「時間がある時は、藤さんに稽古つけてもらえよ」

一課長である小林の言葉は絶対だ。もつとのんびりと報告書を書くべきだつたか。やることもないので、しぶしぶ県警本部内にある道場へ向かつた。

警官になるまで柔道をやつたこともやつたこともなかつた。交番勤務の時でさえ決められた稽古日以外練習をしてこなかつた不良警官の俺が、よく刑事になれたものだ。

道場に入ると、藤堂の他に数十人の警官が稽古をしていた。もうすぐ県警柔道大会がある。その出場選手たちなのだろう、きっと。皆、いかつい体をしている。

尻込みする俺の横を田村が涼しい顔で通り過ぎていった。生意気な奴め。投げまくつてやる。

「大丈夫か？」

藤堂が、横になつたまま動かない俺を心配になつたのか声をかけてきた。

「……吐きそうです」

なんとかそれだけ答えると、「無理しない方がいい。今日の連中は全国大会常連のヤツばかりだから。昼も近いし、今日はこれで終わりにしよう」と藤堂は俺の手を取り、立ち上がるよう促した。

どうりで皆、強いはずだ。俺はよろけながら片膝をつくと藤堂を見上げる。

この穏やかな笑顔を浮かべる藤堂が柔道五段だということを今日初めて知つた。人は見かけによらない。

小学校で道徳を教えていそうなこの藤堂が昨年の県警柔道大会で準優勝していることにも驚いたが、優勝したのが間宮だと聞き、さすがに閉口した。しかも間宮は全国大会でも優勝したらしい。

……あの人を怒らせてはいけないと誓った。

けれど、そういう人間つて普通は機動捜査隊とか全日本の「一チとかになるんじゃないかな？」

猛者たちに投げられまくった俺は、今にも吐きそうなのを堪えながらゆっくりと立ち上がる。

田村をちらりと見ると、俺ほどバテた様子がない。そつなくこなすヤツがいつの世にもいるものである。憎い。

「今日の稽古、終了します。皆、整列。礼つ」

声を張り上げている訳ではないのに、藤堂の声が道場中に響き渡る。

一時間にも及ぶ稽古がやつと終了した。

「望月は筋がいいよ。学生時代に何かやつてたのか？」

隣を歩く藤堂が訊いてきた。

田村はいつもの「」とく、ひとり前を歩いている。強調性のない奴め。

俺はキッと田村の背中を睨み、「中学からずっとテニスをやつてました。大した成績は残してませんが」と興味深げに俺を見ている藤堂に答えた。

「大学まで？」

「はい」

「じゃあ、俺と似てるな。俺も中学から大学まで柔道一筋だったかが言つた。」

懐かしそうに手を細めながら、安定感のあるテノールの声で藤堂が言つた。

「望月は主将とか似合いそうだな」

「一応、高校と大学では部長でした」

「そんな気がした。人をまとめるのが上手そうだ」

褒められてこんなに嬉しくなったのは初めてかもしれない。藤堂

の言葉に思わず顔が緩んだ。

「ちょっと篠さんに似てるかな」

「え……」

さつきまでの嬉しい気持ちが一気に吹き飛び、顔が引きつる。きれいもつぱりとあとかたも残らないほどの威力を藤堂の放たれた言葉は持っていた。

episode 2 刑事部の人々（後書き）

ブログの方でもランキングに参加しているので、よければ投票していただけだと嬉しいです。

「遙—rombrage」からプロフィールのページに移動するので、HPのバナーをクリックしてください。

「悪い意味で言つた訳じゃないよ。アイツはああ見えて、人を統率する力が長けているから」

素直に喜べないのは何故だろ？……ああ、篠原のあの性格のせいか。自問自答する俺の傍らで藤堂が苦笑を浮かべながら少しだけ昔話をしてくれた。

高校、大学と篠原が柔道部の主将を、そして藤堂が副主将を務めていたそうだ。藤堂と篠原、そして間宮は中学から大学までずっと一緒にだったと少し前に若林から聞いていた。きっと藤堂は苦労の絶えない日々を送ってきたことだろう。しかもかけがえのない青春時代に。恐ろしい話だ。

ところで、よくあの間宮が篠原が主将になることに文句を言わなかつたものだ。

「まーさんには未だに勝てたことがないよ。というか、アイツが負けたところを見たことがない」

藤堂が言った。

「そうなんですか？」

驚く俺に、「知らなかつたか？柔道やつてるヤツでアイツを知らないヤツはいないよ」と藤堂が田を細めながら言つた。

「知りませんでした。」 そう言えば今日、間宮警部いませんでしたね」

いつも俺に悪魔のような稽古をつける間宮。稽古中に所在を尋ねて呼ばれるのも嫌だつたので、今まで聞けなかつたのだ。いつもなら、一番奥の自分の席から駆け足で稽古に誘つてくるのに。

「ああ、まーさんなら由美ちゃんの、娘さんの試合を見に行つてるよ

「娘さんがいるんですか？」

意外だつた。

「どうか、どうしてこの藤堂が独身で篠原や間宮が結婚できたのだろうか。謎だ。世の中の女性の目はどうなっているのだろう。」

「可愛くて、いい子だよ」

刑事部のドアを開けながら藤堂が言った。

「試合って、テニスか何かですか？」

俺は藤堂と共に部屋へと入る。と同時に、机にうつ伏せになつて眠る田村の姿が目に入った。今、一応仕事中のはずだが。

「いや、柔道だよ」

藤堂はそんな田村を注意することなく自分の席についた。周りを見渡すと、新聞や雑誌を読んでいる人間や大胆にも机に足を乗せて眠つている人間もいた。

つかの間の休息、か。俺は何も言わずに藤堂の隣 田村の隣でもあるが の席に腰を下ろした。

「娘さんも柔道やってるんですね」

その瞬間、脳裏に女装姿の間宮が浮かんだ。

……想像力豊かな自分が怖い。

「今頃、決勝じゃないかな。県大会の。去年は準優勝だったからま

ーさんも気合が入ってるみたいだ」

「県大会で準優勝ですか？ 強いんですね」

「いや、全国大会だよ。まあ、まだ高校一年生だったからしょうがないけどね」

「全国？え、高校生？！」

小学生の部ではなかつたのか。完全に間宮の遺伝子を受け継いでいるということか。再び、脳裏に女装姿の間宮が過る。

おぞましい想像を振り払うべく頭を勢いよく振ると、藤堂が驚いたように「どうした？」と声をかけてきた。

「あ、いえ、なんか虫が飛んでたんで」

俺は慌てて誤魔化した。藤堂は気にするでもなく「コリと微笑むと、引き出しに手をかけた。

危ない、危ない。おかしな人間だと思われてしまうところだった。

ホツとひと息つく俺に、引き出しから一枚の写真を取り出した藤堂が「これが由美ちゃんだよ」と俺に見せてきた。

episode 2 - 3 (前書き)

episode 2 に episode 5～7 の内容をまとめるとして
したので、掲載していたものを一旦削除させていただきました。
新しい話ができると思うので、お楽しみください。

写真を持っているところが藤堂らしい。俺は微笑ましくなりながら、写真を受け取る。

写真には藤堂と篠原、間宮といつたいつも三人の姿があった。そしてその中央に、肩につくかつかないかくらいの髪を風になびかせながら愛らしく笑うセーラー服姿の女の子が映っていた。くりくりの大きな瞳に少し小さめの鼻が印象的だった。

「……あの」

俺は写真を凝視しながら、

「……この子がユミ、ちゃんとですか？」

「そうだよ」

「……なるほど」

言葉が続かない。この小柄な少女が、柔道の全国大会で準優勝したというのか。しかも可愛いではないか。生命の神秘にしみじみと感心していると、ふと机に積み上げられた書類に目が止まった。

「……増えてる。

目を凝らしてもう一度確認してみたが、やはり今朝よりも報告書の束が増えている。堪らずネクタイを緩め、息をつく。

若林と里見は、ある事件の検察側の証人として出廷することになつていてまだ帰つてきていなければ。藤堂と田村は俺と一緒にいたし、藤堂とコンビを組んでいる陣内は今日は非番だ。

俺は、ペン底を鼻に擦りつけながらパソコン画面をつまらなさそうに見ている篠原に顔を向けた。眉間に皺を寄せ、聞こえるように咳払いをする。

無視する篠原。

もう一度、少し大きめに咳払いをしてみたが、篠原はパソコン画面から顔を上げることはなかった。

こんな上司、嫌すぎる。

「できたあ」

椅子の背もたれに寄りかかり、思い切り伸びをする。

「飯食いに行こーぜ」

言つたあとに後悔した。隣の田村に普通に飯に誘つてしまつた。なんてこつた。集中し過ぎていたせいか、隣が田村なのを忘れていた。

「行くか」

「お？ お、おう」

断られると思っていた俺は、予想外の田村の言葉に一瞬うろたえてしまつた。先に席を立つ田村の後を追つように俺も席を立つた。

「食堂にいます。何かあつたら携帯に連絡下さい」

藤堂にそう伝えると、彼は二コリと微笑んだ。

「いつてらつしやい」

藤堂の声を背に受けながら、俺は中学の時の担任を思い出した。生徒から絶大な人気のあつた長谷川先生。いつも穏やかな彼が、一度だけ本気で怒つたことがあつた。

クラスで数人の生徒がひとりの女子生徒をからかつて遊んでいた。あれは、言葉の暴力だつた。けれど当時の俺は、気にも留めずに他の生徒と他愛のない会話をしていた。

それを知つた彼は、その生徒たちを教室の前に整列させると声を震わせながら彼らを叱つた。いや、彼らだけではない。クラスにいる生徒全員を叱つていた。

からかつた人間はもちろん悪いが、それを見ていながら止めなかつた人間も悪い。薄情な人間になるな。彼は俺たちに懇々と訴えた。その一件以来、俺たち一年三組の結束は固くなり、今も年に一回、長谷川先生を交えてクラス会を行つていた。しかも、からかわれていた女子とからかっていた男子が去年めでたく結婚した。仲人はも

ちろん、長谷川先生だった。

その長谷川先生と藤堂が重なつて見えた。

「あの二人、普通じやないもんなあ」

思わず声に出してしまった。訝しげな顔で振り返る田村に「なんでもね」と答え、肩をすくめた。

どれだけ藤堂が懇々と訴えても、あの篠原たちに聞く耳があつたようには思えない。きっと何度も同じようなことを繰り返して藤堂を困らせたに違いない。

……よく見捨てなかつたものだ。

「お前、明日どうするんだ?」

俺が、一いや一やはながら田村に聞いた。

ここは『オン・ブラーージュ』。仕事帰りに、いつものように田村と一緒に飲んでいるのだ。

田村は、鳥龍ハイを氣怠そうに、頬杖をつきながら一口飲んだ。俺と田村は、明日が非番なのだ。

「お前はどうするんだ?」

「ん、俺? 俺は、映画館で一日過ごすつもり。観たいのが溜まつててさ。好きなんだよね、映画。で、お前は?」

明日が楽しみで、酒がつまむ。今日一杯目のジントニックを頼む。「別に、決めてない」

つまらなさそうにセツナヒトヒト、田村は鳥龍ハイをもう一杯注文した。忙しかったから休みたいのかな。そういうえば、コイツ趣味とかあるのか? テレビはニュースしか見ないし、本読まないし。

清々しい空気の、山の中を歩く仏頂面の田村 を想像したら思わず吹き出してしまった。

「大丈夫か、お前?」

田村が呆れている。

「悪い。ここりでお前何か趣味あるのか? 登山とかサーフィンとか」

俺がそう聞くと、田村はジロリと俺を睨んだ。

「お前さつき失礼な事考えたろ。俺だって趣味くらいあるさ」

おお、バレてしまつた。でも似合わねーじゃん! お前に登山つて。

「悪い悪い。で、何?」

「何が?」

「お前の趣味だよ

俺が興味津津な目で見ていると、呆れた顔をした。

「言わない」

「なんで？笑わねーって」

「さつき笑つただろ」

「根に持つヤツだなー。」

「絶対笑わないからや」

「気になつて仕方ない。」

田村は、グラスを持ったままため息をついた。

「・・・・ピアノ」

「は？」

「ピアノだよ」

ピアノ・・・とは音楽室にあつたあのピアノ か？

「えー！？弾けるの？すげーなー！」

「少しだけな」

田村は照れ隠しなのか、顔を背けた。

「へー以外だな。小さい頃習つてたのか？」

小さな仏頂面の田村が、ピアノを弾く姿が頭に浮かんだ。小さい頃から仏頂面かいつ！

楽しそうな田村つて想像できねえ！ベートーベンとか似合いそうだ。

「母親がピアニストだつたんだ。だから少しだけ・・・な」

田村は、酔つているのか顔が少し赤くなっている。

「へーすじこな、ピアニストなんて。うちなんて小学校の校長だぜ

？」

母親から口酸つぱく公務員になれと言われて、根負けした俺は警察官になつたのだ。こうま

「そうか？普通だろ」

「いやいや、普通じゃないだろつ。じゃあコイツ、お坊ちゃんまだつたのか？似合わないな。」

「あ、じゃあフランス語が読めるのもそのせいいか？」

確か店に初めて来た時、少しだけわかるつていつてたよな。

「・・・覚えてたのか。向こうに少しだけ住んでた事があるんだ」「フランスに？すげー！」

「少しだけだぞ」

今日の田村はよくしゃべるな 酔つてるせいか？それにしても田村の『少し』とはどれくらいなんだ？

「じゃあ母親のコンサートとかには行かないのか？」

田村の母親だから、きっと美人な人だろ？ まさかこの無表情は母親似じゃないよな。

「ないな。十年前に死んでるし」

田村は無表情のままそう言い、残りの烏龍ハイを飲み干した。

「すまん。調子に乗りすぎた」

失礼な事を聞いてしまい落ち込んでいると、田村が俺を見てため息をついた。

「別に何とも思つちやいなこさ。それよりお前のその性格どうにかしろよな」

本当に何ともないのか？ 表情が読めないからわからない。

今日は天気もよく、休日びよりだ。忙しなく行き交うサラリーマンを尻目に、軽い足取りで歩道を歩く。

朝から、映画館で映画を三本梯子はしごし、それがどれも面白かったので大満足だった。

現実から隔絶された、映画の世界が好きだった。子供のころに観た映画に、感銘を受けたのが始まりかもしれない。

高校時代は、テニス部の傍ら、映画研究部にも入っていたくらいだ。将来は、映画を制作する仕事に就きたいと思っていたが、両親に猛反対されて諦めた。

今では、そんな俺が警察官になつているのだから人生とはわからないものである。でも、今の仕事も自分なりに満足しているけれど。陽も沈み、少しは涼しくなつていてが、まだ湿度も高く、風がないので汗がジンワリと出てくる。

こんな充実した休日は、久し振りかもしない。忙しい日々を過ごしていたからか。

田村はどう過ごしたんだろう? 昨日は、あのまますぐ別れてしまつたので、気にはなつていた。母親のこと、触れられたくなかつただろうな。俺つて、進歩ねーな。

そんなことを考えて歩いていたら、いつもの知つている道に出ていた。ああ、癖になつてゐるのか? 気づかずに足が向かつていたことにおかしくなり、そのまま店に行くことにした。

『オンブルージュ』に入ると、いつものカウンターの席に田村がいた。

「なんだ。お前も来てたのか?」

少し驚きながら、田村の隣に座る。

「映画はどうだつた?」

「ん? 最高だね。やつぱり週に四本くらいは、映画観たいな。まあ忙しくて難しいけどな。お前は?」

「マスターとお前の悪口言つてた。くしゃみでなかつたか?」

田村が、マスターと田配せした。マスターは、穏やかに微笑んで頷く。

「なんだよ、それ。マスターまで。気になるだろー」

口を尖らせながら言つ俺に、ジントニックを置きながら「失礼しました。田村さんと、ジャズの話をしていたんですよ」マスターは穏やかな口調で言つた。

「なんだ、びっくりさせんなよ」

俺は田村を横目で睨みつつ、ジントニックを一口飲んだ。この熱気の中、歩いて來たので冷えたジントニックが渴いた喉を潤して気持ち良かつた。

「お前の話なんて、全くしてなかつたさ」

田村が無表情で烏龍ハイを飲みながら、ふてぶてしく言い放つた。それも悲しいじゃねーか。

「わざわざ口にだしていこうな。傷つくだら」

俺が拗ねた口調で言つと、マスターと田村が顔を見合させて笑い出した。

「あー悪い悪い。一言くらいはしたぞ、お前の話を。ビーセ女いな
いから、映画観たらここに来るだらうつてな」

「うつせ、お前もいないだる」

しかし、田村とマスターが予想した通り、俺は店に来ちまつた。

くそ、悔しいぞ。

ジントニックを飲み干し、田村とマスターのジャズ談義に加わつ
た。

やつと休日だ。

早速、携帯を取り出し、何人かの女性に電話をする。

「明日休みなんだ。よければ、新しくできたお店でランチしない？」
この仕事は休日とはいえた直前にならないと、本当に時間が取れるかどうか解らないのが難点だ。

それでも、二人の女性と約束を取り付ける事が出来た。

「よし、と」

携帯を閉じ、冷蔵庫から缶ビールを取り出す。

こここのところ、かなり大きな事件が立て続けに起こりさすがに疲れた。昇任試験受けて、警部になれば日勤のみになるから今よりも楽になるだろうが、それじゃあ物足りない気がして悩んでいる。前に、藤堂にどうして昇任試験を受けないのか聞いてみたら、『現場にいたいから』と返事が返ってきた。確かに現場のほうが、動きやすいし、遣り甲斐があると思う。でも、やはり現場を動かす上の人間がしつかりしていなければ、現場は思うように動けない。

篠原は、普段はいい加減だが一旦指揮官になれば、現場重視で物事を考えてくれて、上からの圧力を撥ねつけてくれる。

藤堂だって、昇級して管理職になれば、信頼できる指揮官になるだろう。でもそれをあの人は拒む。それは、部下にとつては大きな損失な気がするが、言えない。俺が言つことではない。それに他に何か理由があるような気がする。まあ、俺がとやかく言つことじやないか。ソファに腰掛け、ビールを飲みながら雑誌を広げる。

そういうえば、里見と非番が同じなので、修平にからかわれてたな。里見とは同期というのもあって一緒に組んでいるが、ハツキリいつて女としての魅力を感じたことはない。もっと、意志の強い女の方が好きなんだよね。俺。修平、俺と里見が同期つていうのにかなり驚いてたけど、里見に気があるのか？

そんな事を考えながらも、田は新スポットの特集をしつかり追っている。ビールを飲みながら、ダイニングバーの記事に田が留まる。お、ここいいな。総務部の女の子とのコンパを、ここでやってもいいな・・修も、頗いいのになんで女作らないんだか。若いのにもつたいないね。

最近は田村と飲んでるみたいだし 。

男とつるんでないで、もっとコンパに行けばいいものを。ま、いつか。さてと、明日の為に今田は早めに寝るか。

缶ビールを飲み干し、寝室へむかう。

「 どうしよう」

明日、欲しい雑貨を買いに外出するか、家でDVDを観るかどちらにしよう。たまの休みだし外出したいが あまり人込みは好きではない。

でもここのこと、忙しくて大分ストレスが溜まっていたから、好きな雑貨のお店にいって癒されたいし。んー迷う。頭を抱え、目を瞑つむり考え込んだ。

「 決めた！」

明日は外出することにしよう。予報では、晴天って言つてたし、せっかくの休みだから買い物に行こう。どんな服着てこいつ?ワンピースにしようかな。普段女らしい格好ができないから、休みくらい可愛らしい服着ようかな。

そういえば、若林さんとのこと望月さんにからかわれたけれど、全くそんなんじゃないのに 結局何も言えなかつたな。

望月さんが強行犯捜査係に来てもう五ヵ月になるけど、すぐに皆と馴染んでしまつたのが羨ましかつた。

私にも色々声をかけてくれるのに、上手く答えられない自分が嫌になる。あの時は嬉しかつた。私の言葉で爆弾の仕掛けられている場所がわかつたからありがとう、って言われた時、嬉しかつたなあ。

私も、言いたいことをきちんと伝えられたらな。

「あんな性格羨ましい」

ため息をつきながら、ソファに横になつた。

クッションを抱きながら望月のことを考える。

あの田村さんとも仲良くなつたのには、本当に驚いた。田村さん、よく笑うようになったし。彼の人望なのかな。もう少ししたら、うまく話せるようになるかしら。

起き上がり、もう一度深くため息をついた。もう寝よう。

クローゼットから、ラベンダー色の花柄のワンピースと真っ白のバックを取り出し、ソファの上に置いた。

明日は早めに外出して、雑貨を買ってすぐ帰つてこよう。家の模様替えするのもいいな。

明かりを消して、寝室にむかつた。

若林と里見が休みなので、山積みの書類を片付ける事になつた俺。田村は、南東区で逮捕された犯人が、俺たちが担当していた事件も自供したので調書をとりに南東警察署に向かう事になつた。

「頑張れよ　変わつてやろうつか？」

「結構」

田村は部屋から出ていった。くそぅ、ジャンケン三回勝負にすればよかつた。山積みの書類を見て、俺は目眩がした。

愛車のエンジンを、スタートさせる。地下駐車場中に、エンジン音が響き渡る。地上への坂道をゆっくりと登ると、相変わらずたくさんの中年サラリーマンたちが往来していた。

このまま国道一号線に合流していれば無事、南東区まで行けたのだが、渋滞を見越して裏道に入ったのが受難の始まりだ。五分程進むと、道路工事で道が通行止めになつていて。

「参つたな」

引き返そとギアに手をかけた時、近くで女性の悲鳴が聞こえた。どうせ通行止めだしな。工事の責任者に素性を伝え、車をその場に止めると悲鳴の聞こえた方へ急いだ。

資材置き場がある。声がしたのは、確かこのあたりだ。

「誰かいるのか？」

敷地内に入り声をかけると、後ろでガタン、と音がした。振り向くと、フェンスに立て掛けたベニヤ板の後ろから、二十代前半と思える化粧の濃い女が不安そうに出てきた。

「警察だが、どうした？」

警察手帳を見せながら言つと、女は安心したのか駆け寄ってきた。

「た・・・助けて！男に追われているの！」

女は田村にしがみつきながら、声を震わせて言つた。女の手をどけながら、ため息をついた。

「その男はあんた知り合いか？」

「あまりにも冷たい口調だつたからか、女が怯んだ。

「そ、れは 彼氏だけど」

「警察はそういうのには関わらないんだ」

女を残して立ち去るうとしたが、女が必死の形相で腕を掴んだ。

「な・・・なんで！ 警察でしょ？」

「民事不介入で無理だ」

腕を掴んでいる手をどけると、出入口の方へ向き直つた。

出入り口には、一人の男が立つていた。女は悲鳴をあげ、背中に

しがみついてきた。最悪だ。顔をしかめたら、相手の男が叫んだ。

「お前なんだよ！－アリサの新しい男か？」

「警察だよ」

その言葉に、一瞬、男が怯んだが、すぐに薄笑いを浮かべた。

「へつ嘘つくんじゃね－よ！ そんなタイミングよく警官が来るかよ
くそつ！ やつぱり望月と変わつておけばよかつたぜ」

「残念だが、偶然、警官がいたんだよ。お前も嫌がる女を追いかけ
てないで、新しい女つくつたらどうだ。わかつたら、そこをどいて
くれないか」

面倒臭いけれど、一応仲裁をしてみたが、男の顔が見る見る真っ
赤になつていつた。

「ふざけんなよ！－やつぱりお前アリサの男だな！」

女は背中から離れ、ベニヤ板の裏にまた隠れてこちらの様子を伺
つてゐる。南東署での聴取もあるのに、なんでこんな目に合わなき
やいけないんだ。 だんだんとイライラしてきた。

「面倒だから早く来いよ。こつちは忙しいんだ！」

田村が叫ぶと、男はポケットからナイフを取り出し、両手でナイ
フを握り締めながら、突つ込んできた。男の体をかわし、右手首を
掴んで捻りあげた。ナイフは男の手から落ち、男は両膝をついて呻
いている。

「十五時四十分、公務執行妨害で逮捕する」

手錠をかけフェンスに男をつなぎ止め、所轄の中央警察署に電話する。女はベニヤ板の裏から出てこはず、男は声をあげて泣き出した。ふざけんなよ、まったく。望月に奢らせてやる！

五分程でパートカーが来たので、後は任せて車まで戻りつつ歩き出すと、女がベニヤ板の裏から飛び出してきた。

「ま、待つて！」

「所轄の警察官が来たからそっちに言つて」

「ち、違うの！あの、名前教えて！」

女が、熱っぽい目をして見てきた。

「ああ、若林だ」

そのまま、女を残して資材置き場から車まで出て行くと、工事も終わり道路も通れるようになっていた。引き返す必要がなくなり助かった。

車に乗り込み、エンジンをスタートさせた。むつりんな面倒は懲り懲りだ。

「なんでだよ！」

隣に座っている望月が、納得いかない、とでも言つよう口声をあげた。

「南東署から戻るなり、望月に奢れと言い放ったのだ。

「なんで俺が、お前に奢らなきやいけないんだよ！しかも、お前の分の書類も片付けたのによ！逆だろー！」

「つるわい。お前の代わりに、俺が痴話喧嘩に巻き込まれて散々な目に合つたんだ。奢れ」

またあの二人の顔を思い出し、苛つきながら望月を睨んだ。

「な・・・なんだよ！自分で、結構つづつて出てつたんだろー無茶苦茶だつづーの」

篠原が、笑いながら仲裁に入ってきた。

「まあいいじゃねーか！奢つてやれ」

「そんな！篠原さんまで！」

「決まりだな」

恨めしそうに睨む望月を尻目に、淹れたてのコーヒーを一口飲む。

うまい。

「大変だつたなー修平！」

若林が、篠原から昨日、俺が田村に奢られた話を聞いて笑いながら言つてきた。

全然、心がこもつてないですよ。

ほんと、機能は散々だつた。コイツ店で、いつもよりも多く鳥龍ハイ頼むんだからな。給料日前で俺がどれだけひもじい思いをしているか。くそ、田村め。覚えてる。

「若さんまでひでえ。ほんと昨日は、散々でしたよ。俺なんて、若さんたちと田村の書類の他に、どぞくさに紛れて篠原警部が置いてつた書類を片付けたのに奢られたんですよー！」

若林が淹れてくれたコーヒーを飲みながら、隣の田村を睨んでやつた、つもりが机に突つ伏して爆睡していたので効果はなかつた。

毎回思うが、仕事中なのに誰も注意しないのもどうよ。コイツを甘やかしすぎだろ。

「・・・・ごめんなさいね」

俺が呆れながら田村を見ていると、斜め前に座る里見が申し訳なさそうに謝つてきた。

「里見さんは悪くないですよ。俺が休みの時は、俺の分の書類片付けてもらつてるんですから」

謝らなければいけないのは、隣で寝ているこの男だ。

それにも、里見が若林と同期とは驚きだ。年下だとばかり思つていたのに。

「じゃあ俺も悪くないな」

若林がコーヒーカップを片手に、笑いながら言つた。

「若さんは別です。若さんの書類が一番多かつたんですから」

「あらー、バレましたか」

「バレてます」

「じゃあ若林は、望円に何かじ馳走してやらなきゃいかんな」

若林の隣の席の陣内が、楽しそうに笑いながら言った。

「そりですよね、陣内さん、いいこと言いますね。若ちゃん『チになります』

「陣内やーん、修平を甘やかしちゃダメですよ」

若林は口を尖らせながらそういう言つてから、少し考え俺に言つた。
「しかなないな。じゃあ今日、総務部の女の子とのコンパ開いてやるよ」

「ほんとですか？じゃあ、仕事頑張ります」

陣内や藤堂が「調子がいいな」と言つて笑つた。

でも、昨日が厄日だったのだから、今日は良いことあつてもいいではないか。報告書を今日もいくつか抱えていたが、なんとか頑張れば終わらせられる。こぞとなれば、田村に押しつけよう。ヤル気がでてきたぞ。

書類を紛れこまそりする篠原を阻み、昼休みの睡魔と闘いながら頑張つた。俺つて 単純だな、と自分のことながらおかしくなつた。

その後もデスクワークをして平穀無事な一日が終わるとしていたその時、篠原の机の電話が鳴つた。嫌な予感がして、電話が終わるのを俺や若林がじつと見つめていると、受話器を置いた篠原が二二二タ笑いながら俺に言つた。

「残念だつたな、望月！中央署に捜査本部が設置されることになつたぞ」

「何ですつて？！」

固まつたまま動かない俺に若林が「修平君、残念。また今度な」と笑いを堪えながら、肩にポンと手を置いた。若さんす「」く楽しそうですね。

「残念だつたな、行くぞ」

田村がニヤリと笑い、背広を片手に部屋から颯爽と出て行つた。

くそーーーっ！

「行きますよ！行・き・ま・す！」

田村の後を追い、俺は走り出した。

ちきしょー。厄日続きじゃねーか！

中央区のビジネスホテルで殺害されたのは、丁県で喫茶店を経営する山田太郎、四十一歳とわかつた。

乙県には、コーヒー豆の調達に東区にある卸店まで來ていた。

翌日朝一番に、丁県から妻の山田陽菜^{はるな}が駆け付けてきた。長い黒髪をひとつに束ね黒いワンピース姿の彼女は、どこか遠くを見るよう眼を宙に這わせ呆然としていた。

安置室に案内すると、目の前に現れた残酷な現実に全身を震わせ両手で顔を覆つた。冷たくなった亭主にしがみつき泣き崩れるのを見たまれなくなり安置室から出たが部屋からは陽菜の慟哭が哀しく漏れ響いていた。

捜査会議が始まり、中央警察署の刑事が事件の概要を説明する。「死亡推定時刻は昨日の十二時から十六時の間。死因は、鋭利な刃物による刺殺です。凶器はまだ見つかっていません。指紋も、ホテル関係者、被害者以外のものは見つかっていません。唯一、部屋のドアノブの指紋だけが拭き取られていました」

何人かの捜査員が、ホテルの関係者からの話を報告した。ホテルのフロント係の話では、被害者本人は、シングルの部屋を二泊の予定で希望していたらしい。しかし、ホテルは満室状態だったため、唯一空いていたツインの部屋をとったそうだ。チェックイン時一人だった。

このホテルは、フロントに寄らずカードキーをもつたまま外出が出来るので、いつ被害者が外出先から戻ったのかはフロントではわからないそうだ。念のため、妻の陽菜の写真を見せてみたが、フロント係は「わからない」と答えた。

そもそものはずで、この日は乙市名物の「はじけ祭（ ）」があり、多くの祭参加者や観光客で街は賑わっていた。

この祭りは、主要道路を通行止めにして、一般参加のグループが

踊りながら道路を練り歩くという祭りである。年々参加グループの数が増え、地元婦人会や幼稚園児のグループや会社の有志で作ったグループ、サークルなど今では七十のグループが踊りを競っている。観光客も年々数が増え、今年は一日間で八十万人の人が祭りを見るためにC市に来ていた。

ホテルが満室状態だったのもこのためで、被害者がいつホテルに戻つたかわからないのも無理はない。

T県警からの資料では、山田は資産家らしく、いくつかのビルのオーナーをしていた。喫茶店は、趣味でやっているようなもので常連客も五、六人ほどの店らしい。その後も、いくつかの報告があつたが犯人に繋がるものはなく三時間程で会議は終了した。

「望月、お前T県に行つてこい」

篠原が旅費申請書にサインし、俺に手渡した。

「T県にですか、わかりました」

内心、小躍りしながら旅費申請書に目を通した。ん?一人?まさか。

「田村と一緒に。土産は酒以外、受け付けないからな
くそう。なんで俺と田村がセットなんだよ。そりやコンビ組
んでるけどさ。」

「T県いいな!」

若林が色々と名所を教えてくれた。有り難いが、遊びに行くわけじゃないし、観光名所へ野郎二人で行けと?田村は相変わらず無表情で検査資料を読んでいる。まあいいや。

I県からT県までは、新幹線で四時間程で行くことができる。被害者が経営していた喫茶店は、T駅から徒歩十分のところにある。駅前にいくつかビジネスホテルがあるだろうし、大丈夫だろう。田村を見ると、お前に任せたと言わんばかりに無表情でコーヒーを飲んでいるところだつた。俺は添乗員じゃねーよ。

はじけ祭り：「はじけまくり」のダジャレ。C市役所の観光課、課長である斎藤栄一郎が考えたネーミング。「みんなで、歌つて踊つてはじけまつ（く）ろうぜ」観光課職員全員が猛反対の中、斎藤本人がかなり気に入つてしまいこのネーミングで押し切られてしまつた。市役所全職員が一丸となつて阻止してほしかつたと、のちに市民運動にまで発展したが、今では受け入れられ愛着をもたれている。ちなみに斎藤のあだ名は「極寒大王」。毎日のように振りまくダジャレに観光課の職員は寒い思いをしている。

翌日、十時十分発のぞみ319号に乗りT県へ出発する。一人席の窓側に田村が座り、俺が通路側に座る。席に着き、鞄から手帳を取り出すと新幹線が動き出した。最初はゆっくりと、そして次第にスピードを上げ車窓の景色はコマ送りのよつよつと速さで後ろに流れしていく。

「腹へつたな」

乗つてすぐ飯かいつ。呆れながらも、自分もさつきから空腹を我慢していた。買ってきた駅弁を食べることにする。手帳を見ながら、ふと目に付いたことがあった。

「なあ、死亡推定時刻が十三時から十六時までつてあるけどさ、被害者が殺されたのつて、犯人を部屋に通してすぐじゃないのかな?」「指紋のことか?」

驚いて田村を見た。なぜ俺の言いたいことがわかる? ! エスパーか!

「今頃気付いたのか?」

くそう、こうなつたら腹立ち記録をつけてやる。俺は手帳に線を横線を一本引いた。ていうか記録してどうする俺。

そんな俺を無視して、田村は牛肉弁当を食べながら話しだした。「部屋には指紋が残つていなかつた。ある程度部屋に居れば、どこかにその形跡が残るのに拭き取られた場所はドアノブだけ。つまり犯人は、ドアノブしか触つてないということだ」

そう。その事に気付いた。

「でも、手袋をはめた可能性だつてある。結局まだ、断定は出来ないさ」

田村はそういうと、牛肉弁当の最後の一口を口に入れた。
あ、手袋か。この事件は計画殺人という方針で捜査を進めて
いる。ホテルでは、部屋に刃物や凶器になるようなものは置いてい

ない。実際、部屋から持ち出されたものもない。だから凶器は犯人が持ち込んだことによる判断からだ。手袋だつて、用意してきたとしてもおかしくない。俺つてぬけてるな。

俺が事件について考えていると田村のムカつく声が聞こえてきた。

「少しば頭働くようになつてきたな」

「はい、もういっほん…ギリギリ！」と力を込めて手帳に記録をつけていると、携帯の着信を報せるバイブレーションの振動が体に響いた。驚く俺に田村は呆れながらデッキの方を指差した。

「わかつてゐよ！」

電話に出ると、相手は若林だった。何か新たな情報がでたのだろうか。

「何かわかつたんですか？」

「ん? 何もー。あのね、部屋を取らうと思つてホテルに電話したらえー、ツイン一部屋しか空いてないらしいんだよね。どうする?」

氣の抜ける電話だつた。

「わざわざありがとうございます。他のホテル当たつてみますね」
ヤツと同じ部屋なんてくつろげねー。

「いやそれがさー、駅付近にあるホテル全部当たつてみたんだけど、まだ夏休み中だろ? 空いてないんだよね。そのホテルのツインしか

今、最後の方、声が震えて聞こえたのは氣のせいか?

「じゃあ・・・そこで、お願ひします」

頭がクラクラしてきて、振動する壁にもたれかかりながらため息をついた。

「帰つてきたら、また飲みに連れてつてやるよ

若林が笑いながら、ホテル名を教えてくれた。

「お願ひしますよー」

電話を切つて席に戻ると、田村が缶コーヒーを飲んでいた。俺の席にも、同じものが置いてあつたので、まあよしとしよう。

「なんだつて? 何かわかつたのか?」

「ホテルが、ツインしか空いてないんだよ

そう言つと、田村が心底嫌そつた顔をした。俺だつて嫌だよ！氣を取り直して、手帳を見ていく。

「被害者は、コーヒー豆の調達に、東区にある卸店まで来てたんだよな。そうとうコーヒーにこだわつてたんだな」

東区の卸店を後にしたのが、十一時頃だ。その後の行動は、わかつていいない。

「趣味が高じて、喫茶店を開くことにしたらしいな。これよりは、うまいだらう」

田村が、食後の缶コーヒーを飲みながら失礼なことを言つた。

「当たり前だ。缶コーヒーよりまずかつたら、商売にならないだろ」田村は、「コーヒーにこだわりがまつたくない。缶だらうがインスタントだらうが、コーヒーであればいいのだ。安上がりなヤツだ。ちなみに強行犯係で飲んでいるコーヒーは、若林こだわりのブレンドコーヒーだ。コーヒー代を課で積み立てて、毎回彼が買つてきてくれている。

T駅に降りた俺たちは、まず荷物を置きにホテルに向かつた。

若林が予約してくれたのは、駅の目の前にある九階建ての小綺麗なホテルだつた。若林が気を利かせなければ、俺たちはベットで寝れなかつたかもしれない。夏休みのことを、すつかり忘れていた。

ツインの部屋は、思つていたよりも広く清潔感のある部屋だつた。これなら疲れも取れそうだな、と安心した。荷物を置き、すぐに部屋を出て、タクシーでT県警へ向かう。

県警には篠原から連絡がついていたので、挨拶もそこそこに被害者の店まで県警の谷口という若い刑事が案内をしてくれることになつた。

「二人とも若いですね。幾つですか？」

ジャニーズ系の、かわいらしい顔立ちのこの刑事は一十九歳だといつ。

細身のスーツをさらりと着こなすあたり、若林と氣が合つだらうなと思つた。警察車の助手席に乗り込み、出発する。

「一人とも二十六歳です。谷口さん訛りがないですが、関東にお住まいだつたんですか？」

後部座席の田村が一切話さないので、俺が気を使わなくてはいけない。だから、その人見知りなんとかしろって。

「大学が東京だつたんだ。なんか、訛りを使うのが恥ずかしくて、なんて職場で言つたら怒られるけどね」

やつぱり若林に似ている。彼とは、仲良く出来そうだ。

「事件のことですけど、何かこちらでわかりましたか？」

今まで何も話さなかつた田村が急に声を掛けたので、谷口は一瞬言葉に詰まるがすぐに田村の質問に答えた。

「夫婦仲は、悪かつたよつだ」

以外だつた。安置室で、被害者にしがみつく陽菜を思い出す。

「近所の人人がよく、喧嘩する夫婦の声を聞いてたみたいだ。なんか一方的に奥さんが、旦那を怒鳴つてゐるらしい。前は仲よかつたらしいんだけどね」

「そんな風には、見えなかつたのにな」

安置室での奥さんの様子を谷口に話しながら、なんだか無性に哀しい気持ちになつた。

「演技だつたんじやないか？」

俺が口にできなかつたことを、谷口がサラリと言つた。あれが演技だつたら、俺は怖くて結婚なんてできないよ。

「着いたみたいだな」

後部座席の田村が、手前にある喫茶店を指差した。

ロッジ風の一軒家を、改築して作られた喫茶店には『太陽』という名前が書かれた木のプレートがつけられていた。夫婦の名前から、一文字ずつとつてつけたのだろう。昔は仲がよかつたか。いつから夫婦の間に、亀裂がはいったのだろう。ぼんやりそう思いながら、プレートに刻み込まれた太陽の文字をじっと見つめた。

店の入口のドアには、臨時休業の張り紙が貼つてあった。入口の横にある玄関のインター ホンを押すと、ドアがゆっくり開き憔悴しきつた顔の陽菜が顔を出した。店の中に通されると、『コーヒー』の香りに全身が包まれた。主張しない柔らかなコーヒーの香りは、オーブラージュを思い起させた。ここはきっと、あの店と同じだった、と思うと残念な気持ちになつた。

「よければ『コーヒー』淹れますね。主人のブレンドは、美味しいと有名なんですよ」

陽菜がぎこちない笑顔を浮かべながら、お湯を沸かしはじめた。

「奥さんは、どうしてご主人と一緒に行かなかつたんですか？」

席に着くなり、谷口はいきなり陽菜に尋ねた。その質問に、沸騰したお湯をフラスコに移す手の動きが一瞬止まつた。

「お店がありますから」

「夫婦仲が、悪かつたと聞きましたが？」

谷口が遠慮なしに言った。

「そんな事は、ありません」

伏し目がちに、震える声で答えた。尋問に対する恐怖からくる震えなのか、それとも失礼な質問に対する悔しさからくる震えなのかわからない。

香り豊かな『コーヒー』が、三人の前に置かれた。一口飲むと、口の中にほのかな酸味と甘味が広がる。これは、美味しい。若林のコーヒーも美味しいが、これにはかなわない。

「美味しいです。」こんな美味しいコーヒーは初めてです「俺の言葉に、やつと奥さんに笑顔が浮かんだ。

「血漫の味なんです。喜んでいただけてよかったです」

結局、収穫はこのコーヒーだけで他には何の情報も得ることができなかつた。血漫の「コーヒー豆を土産用に購入し、店を後にすることにした。

「失礼な質問の数々、申し訳ありませんでした。もし何か思い出したことがあれば、また県警まで連絡を下さい。失礼します」

店を出ると、少し先の電柱横に隠れて女がこちらを覗いていた。

「あの、山田さんが亡くなつたって本当ですか？」

女が、俺たちのところへ駆け寄つてきた。

「貴方は？」

俺たちは店から離れるよひ、女を促し歩き出した。

「私、叶といいます。あの店の常連なんです」

ただの常連客ならば、奥さんに聞けばいいことなのだが。

「山田さんは残念ながら一昨日に、お亡くなりになりました。ところで、少し時間よろしくですか？山田さんご夫婦についてお聞きしたいんですが」

口元を手で覆い、涙ぐみながら叶は大きく頷くと、まだ何も聞いていないのに山田夫婦について話し出した。

「山田さんは可哀相でした。毎日毎日、奥さんが機嫌悪くてすぐ怒鳴るんです。山田さんは優しいからいつも奥さんに気を使ってました」

ただの常連客にしては、随分と被害者の肩を持つではないか。

「そんなに、毎日喧嘩をしていたんですか？」

「そうなんです。客の前でも平気で、山田さんに怒鳴るんです」

叶は、身を乗り出しながら訴えるが、あの陽菜がそんなことするとは信じられなかつた。

「山田さんは、奥さんと別れたがつてたんでしょうか？」

叶をより饒舌にさせるためか、谷口が質問した。

「当然よ！毎日あんなに一方的に怒鳴られてれば、愛想つかずに決まつてるじゃない！」

叶が当たり前だと言わんばかりに、谷口を睨んだ。

「別れて貴方と一緒になると？」

無表情の田村に、叶は一瞬怯んだが開き直ったように言い放った。「ええ、そうよ。私、山田さんのコーヒーが好きで店に通つようになつたけど、いつの間にか山田さんの事を好きになつてた。山田さんにも私の気持ち伝えてあるわ」

妻のいる男に恋するほど不毛な事はないと思つが・・・。女は怖いな。

「そうですか」

田村はもう話に飽きたらしく、早々に話を切り上げた。谷口が、事件関係者には皆聞いていると説明し、事件当日の叶のアリバイを聞いた。一日中、家にいたと彼女は言つ。叶に連絡先を聞いて、俺たちは県警に一度帰ることにした。

「自己主張の激しい女だつたな」

谷口が、苦笑しながら言つた。

「でも、やっぱり夫婦仲悪かつたのかなあ」

「望月さんは奥さん派なの？実は、近所の人の話だと被害者は奥さんのこと、随分大切にしていたらしいよ。だから、さつきの彼女の話聞いて、あれ？と思つたんだよね。喧嘩するほど仲がいいとも言うしね」

「被害者に恨みを抱いてる人は？」

「それが、温厚な男だつたらしく悪くいう人が一人もいないんだ」

俺たちが話している間も、田村は無表情で後部座席に座つていた。お前ね。

「まあ、さつきの彼女については明日調べることにして、今日常連客の四人から話を聞くことになつていてるから行こうか。あと一人は今、S県行つていて明日話を聞くことになつていてるから

駅前の駐車場に止めた警察車に乗り込み、常連客のいるビルに向かつた。

雑居ビルに小さな旅行会社を構えている川田は、冷房の効いている室内にも関わらずハンカチで汗を拭っては熱心に山田夫婦について語ってくれた。

「あそこの店は美味しいんだけど、こだわってる分、他より割高だからあんまり客が入らないんだよね。まあ、趣味でやつてる店だから本人たちはあんまり気にしてなかつたみたいだけだね。店に通うようになつてもう八年だけさ、あの二人すごく仲良かつたよ。最近は時々言い争いとかよくしてたけど、すぐ仲直りしてたよ。羨ましいね」

「叶という女性はご存じですか？」

さつき会つた、女性のことを聞いてみた。

「あー彼女ね。一年くらい前から常連になつたんだけど、最近は週に四日くらいは店に来てたんじゃないかな。いつも一人でコーヒー飲んでさ。若いのに遊ぶ男いないのかねえ」

谷口から聞くと、彼女は現在無職で、実家に住んでいるそうだ。

「その他に、気付いたことはありませんか？」

しかし、それ以上の情報は得られなかつた。結局残りの二人も同じような内容だった。そのまま県警に帰り、篠原に叶のことだけを伝えて初日が終わつた。

「ほんとは、美味しい店あるから連れて行つてあげたかったんだけど、ごめんな」

県警に戻つてみると、強盗殺人事件が起つていて捜査員たちが慌ただしく走り回つていた。谷口もとつちの事件に加わることになり、明日は俺たち一人で聞き込みにまわることになつた。

谷口に店の場所を聞き、今日のお礼を伝えて県警をあとにした。タクシーに乗つて、谷口から教えてもらつた店の名を告げ、シートにもたれかかつた。疲れた。どこも同じなんだな。殺人を犯す人間がいる限り殺人は起ころる、か。思わず大きなため息をついてしまつた。

「お前は考え込みすぎだ」

隣の田村が横目で睨んできた。お前はなんでもお見通しなんだな。

「わかつてゐるよ」

窓の外を見ると、皆楽しそうに笑いながら歩いている。今このときにも、犯罪は起つてゐるのだ。

「わかつても 遣り切れないじゃねーか」

犯罪が身近なこの仕事だからこそ、余計に遣り切れない。窓の外の行き交う人々を見ながら、ボソリと呟いた。

「深みにはまると抜け出せなくなるぞ」

眉間に皺を寄せながら、田村が言つた。

考えるのが、無駄なのは解つてゐるさ。でも、そんな簡単に割り切れるもんじやないだろ。田村、お前はどうなんだ？お前は割り切れるのか？ 深みか。立ち止まらないつて決めたのに。はまりまくつてるじゃねーか。進歩ねーな、俺。額に手を当て、田村に気づかれないよう小さくため息をついた時、タクシーが止まつて一瞬ビクリとした。店に着いたのだ。

「うまい」

地元名産の日本酒に舌鼓を打つた。テーブルには、数種類の食べ物が並んでいる。

谷口の紹介してくれた店は、威勢のいい声が飛び交う活気のある店で大勢の客で賑わっていた。料理も美味しいし、酒の種類も揃つていて安い。なのに、田村は相変わらず烏龍ハイだ。

「調子がいいヤツだな」

田村が烏龍ハイを飲みながら、呆れた様子だ。

「テンション上げなきや、やつてられないだろ。俺は、立ち止まらないつて決めたんだから。だから飲む」

頬杖をつきながら、口を突き出した。田村は表情を少し和らげ、グラスをテーブルに置き明日の予定を確認してきた。

「明日は、S県に行つてるつていう坂崎つていう女性に話を聞いて、今日の彼女の身辺を調べようか。彼女、被害者と一緒になるみたいなこと言つてたけどさ、なんか話聞いてると一方的な横恋慕みたいな感じなんだよな」

「思い込みの激しい女なのかもな。以前の勤め先にも行つてみよう」「俗に言つ、三角関係か？彼女は家にいたつて言つしアリバイはないんだよな。奥さんは、店にいる姿を見られてるんだよな」

「近所の人が、店の外から見たんだよな。客はいなかつたらしいが」「場所が駅前から少し外れているので、集客数はかなり少なかつたようだ。それでも、ビルの収入があつたからやつていけたのだろう。ふと、憔悴した陽菜を思い出す。

「奥さん一人でお店やつしていくのかな」「さあな

「お前は冷たいなー。南極の海水くらい冷たいぞ。・・・ああ温暖化で南極暖かくなつてるから違つ違つ、えつとね、ちよつとまつてよ・・・・・」

「お前・・・・・酔うとウザイ」

「おおつ、酔つてないときはウザくないんだな、ひひ

「いつもにましてウザイつてことだよ」

「そーですかーだ。さてホテルに戻るかあ。あ、先輩お勘定お願
いします」

嫌そうな顔をする田村を残して店の外にすると、熱氣が体にまとわりついた。街にはまだ多くの人が溢れ、夏の終わりを楽しんでいるかのようだ。

「ホテルまで歩いて帰るーぜ。どうせ駅前まで十分くらいだしさ」
仏頂面で店から出てきた田村にそう言つと、フラフラと歩き出した。同じように酔っ払つた観光客と何人もすれ違ひながらホテルに着くと、ちょうどロータリーから深夜バスが出るところだった。

「バスの運転手も大変だね・・・」

部屋に戻り、シャワーを浴びてもなかなか眠る気にならなかつた。田村がいるからではないが。田村が唯一の椅子に座り、手帳とにらめっこしているのでベッドに腰掛ける事にした。

「ビール飲むか?」

「ああ」

冷蔵庫からビールを取り出し田村に渡した。

「今んとこ怪しい人物は?」

「陽菜、叶ぐらいか。明日の証言でまた人が増えるかもな」
一泊の予定のこの出張・・・無事一泊で帰れるのか心配だ。
「予定通り、絶対名所を見て歩くぞ!」

「そんな予定はない」

田村につれなく一蹴された。

「なんだよ冷たいなー。お前南極の海水くらい冷たいよ・・・あれ、温暖化だからだめだ。えっとねー」

「それはもういい、お前は寝ろ!」

「・・・ネルソン? 誰? 提督?」

「お前はもう酒飲むな」

持つていたビールの缶を、奪われてしまった。

「イビキは勘弁してね」

ベッドに入りながら、背中を向けている田村に言つと枕が飛んで来た。

「あぶねつ」

「寝ろ」

「あいよー」

長い一日が終わつた。

目が覚め、時計を確認すると五時だった。また早くに目が覚めたな。隣のベッドを見ると、まだ田村は背を向けて寝息を立てていた。起きこないう洗面室に向かって、顔を洗った。

洗面室から出ると田村も起きていた。

「早いな」

「デリケートなんだよ、俺」

「よく言うよ」

寝癖のついた頭を搔きながら、田村は洗面室に入つて行った。ホテルのラウンジで軽い朝食を終え、坂崎との待ち合わせ場所の駅構内にある喫茶店に向かつた。S県に友人の結婚式に出席していた彼女は、急遽予定を変更してT県に帰つてきてくれたのだ。

店の入口から真直ぐ俺たちの前に歩いて来た女性は、黒いワンピースからスラリと伸びる長い手足に、肩にかかるほどの黒髪のストレートヘア、自信に溢れた切れ長の目が印象的な和風美人だった。彼女が、坂崎紫保子さかさきしほいだ。

「T県警の谷口さんでしようか？」

「いえ、谷口は別の仕事が入り来られなくなりました。私たちはT県警の望月と田村と申します」

俺たちは立ち上がり挨拶をすると、彼女に空いている席に座るよう促した。

「山田さんが亡くなつたつて本当でしようか？」

座ると同時に彼女は尋ねてきた。

「はい、残念ながら三日前の二十五日にT県のビジネスホテルの一室で殺されているのを発見されました」

「どうして山田さんが

陽菜は？陽菜は無事ですか？」

口許を両手で押えていた彼女は、テーブルから身を乗り出して

聞いてきた。

「大丈夫です。奥さんの陽菜さんは無事です。随分と陽菜さんと仲がいいようですね」

田村がメモ役を譲らないので、俺が聞き役にまわる。もう慣れたけど。

「陽菜とは高校の時の友人なんです。私が関東の大学に行ってからも連絡をずっと取っていました」

「山田さんはいつ？」

「大学卒業すると同時に、陽菜は結婚しました。彼女は地元の大学に行つていて、彼とは同級生だったそうです」

彼女はそのまま関東で就職するが、七年後、地元の工県に戻っている。そして、山田夫婦に感化され自らも、実家近くに喫茶店「ブルー・ムーン」を開いた。「ブルー・ムーン」とは、バラの品名で紫色の花を咲かせるバラだそうだ。

「何か山田さんが殺されるような理由は、思い当たりませんか？」

彼女は、力なく首を横に振る。

「あの一人は、人に恨まれるような人間じやありませんから」

このセリフは昨日何度も聞いたセリフだ。彼女のその言葉に頷き、また質問をする。

「いつも山田さんは、一人で工県まで豆の調達に行かれてたんですか？」

彼女は頷き、「店もありますし、その時は私が陽菜の手伝いに入つていました」と言つた。

「そうですか。ところで話は変わりますが、なぜ貴方は喫茶店を開かれたんですか？」

「ああ、あの一人の店に行くといつも私、癒されるんです。私も同じように誰かを癒せるような店を開いてみたいと思ったんです。それに地元は観光名所があるので、採算もなんとか取れると思つて

「少し恥ずかしそうに彼女は言つた。

「昨日『太陽』でコーヒーをいただきました。味も素晴らしいかった

「でも、店の雰囲気がとても素敵でした」

俺の言葉に、彼女は自分のことのように喜んだ。

「あの一人は私にとつて太陽だつたんです。暖かくて、眩しくて、一人を見ているだけで元気になれた。陽菜が 赤ちゃんができるなってわかつても、太郎さん、優しく彼女を抱き寄せて言つたんです。『一緒に喫茶店をやろう』つて。『太陽』つて名前も子供が出来たら付けようつて考えていた名前なんです。だから あの店は、二人の子供なんです」

彼女は涙を流し、嗚咽を漏らした。関東にいる時、色々あつたんだな・・と彼女を見て思つた。彼女は、山田夫婦に救われていたのかもしねりない。

「では、叶さんという常連客はご存じですか？」

質問をするや否や、勢い欲顔を上げ、怒りを帯びた目を俺に向かた。

「知つてるも何も！あの女のせいで、陽菜がどれだけ傷ついたか！」

・彼女です！山田さん殺したのは！」

彼女が興奮して、机を思い切り叩いたので近くにいたウェイトレスがびっくりして顔をしかめた。

「夫婦喧嘩の原因は、叶さんだつたんですか？」

「ええ。始めは、『コーヒーを飲みに來ていたただの常連客だつたんです。でも会社を辞めることになつて落ち込んでいた彼女に、山田さんが特別ブレンンドを淹れて彼女を慰めたんです。そしたら何を勘違いしたのか彼女、山田さんにアプローチしだしたんです」

最初は、二人共相手にしていなかつたらしい。しかし、ある時から無言電話がかかるようになつた。毎日のよつにかかつてくる無言電話と連日店に來ては、山田を見つめる叶に陽菜は我慢の限界を超えてしまつた。元々おとなしい性格の陽菜は、精神を悪い精神科に通うようになつたらしい。山田は何度も、叶にもう店には来ないで欲しいと言つたようだ。だが、彼女はその後も店に来続けたのだ。

「あの女 前に街で見掛けた時に、連れの女友達に言つてたんで

す。あと少しで私のものになるつて。全然・・・山田さんの気持ち
伝わってなかつた」

悔しそうに、坂崎は唇を噛んだ。妻を苦しめない為に、山田が必
死に頼んでも彼女には伝わってなかつたのだ。この人は、憧れの二
人の家庭が壊れていくのが、我慢できなかつたんだろう。

「すみません 見苦しいとこ見せてしまつて。お願ひします。必
ず犯人を捕まえて下さい！」

目を赤く腫らして、坂崎は俺たちに訴えた。勿論そのつもりだと
答えると彼女は、安堵した。坂崎は、今から陽菜のところに向かう
つもりだと言つた。

駅前で俺たちは別れ、彼女から聞いた叶の前の勤め先に行くこと
にした。

叶は、地元の建設会社で受付をしていた。同僚である女性社員に話を聞くことにしたのだが、皆話すことは同じだった。

彼女は、いつも妻子ある年上男性社員に手を出すのだとそうだ。これまでに一度、相手の奥さんが怒鳴り込んできたことがあるらしい。女性社員曰く、自分のせいで他人の家庭が壊れることに酔つていたらしい。しかし、次の相手が悪かった。本社からきた支店長代理に、いよいよ遊ばれ奥さんにも相手にされず、会社で暴れたのが原因でクビになつたのだ。

そして山田に乗換え、自分を取り戻したつてどこか。迷惑な話だ。

「叶があやしくないか？」

会社を後にして、叶の家にタクシーで向かいながらメモを見つめる田村に声を掛けた。

「さあな、まだわからない

家にいたという彼女は、アリバイがない。山田を追いかけて、工県に行つたのではないか？

「相手にされていないのにわざわざ？」

エスパー田村が俺の心を読んだ。

「しつこくすれば相手が折れるかも・・・はないよなあ」

周りの話を聞くと、山田はそんな男ではない。陽菜を傷つけることを自らしないはずだ。

「最初から殺す気だつたんだよ 会社で暴れたつていうくらいだから

「そこまで出来る女じゃないだろ。所詮、相手に無言電話かけるくらいが関の山だろ」

確かに 殺すほど山田を愛していたわけではないのだろう。彼女は、自己満足のために山田夫婦を苦しめていたのだから 本人

確かに 殺すほど山田を愛していたわけではないのだろう。彼

は自覚していないかも知れないが。叶の家に、タクシーが着いた。

俺たちを待ち構えていたかのよう、玄関から彼女が出てきた。

「上がつて下さい。もっと早く来ると思つていたのに」

媚びるような口調で、彼女は俺たちを家に招き入れた。

「工県の刑事さんなんですか？」「一人ともお若いですね」

お茶を出しながら楽しげに話す彼女に抵抗を感じた。昨日の今日で、なぜそんなに楽しそうに笑えるんだ。背筋が寒くなるのを感じつつ、田村がメモを準備して待つてるので、仕方なく俺が話を切り出す。

「貴方は、山田さんの亡くなつた一十五日家にいたそうですが、どうなたかそれを証言してくれる人はいませんか？」

「いないです でももついいんです。私もつ山田さんのこと何とも思つてないですか？」

彼女の熱っぽい視線が、俺に向けられている。狙われてるのか、俺？「冗談じゃない。」

「そうですか、では何かあつたらまた連絡下さー」

急いで立ち上がりかけると、彼女は何かを思い出したかのようになんで慌てて立ち上がる俺の腕を両手で掴んだ。

「待つて！ そういえば、確か一十五日は・・・お客様が来ました」それがもし本当なら、彼女のアリバイが証明される。座り直して、彼女に誰が来たか聞き返すと覚えていないと言つ。

「どこかの勧誘の人だつたんですけど、でも確か今日また来るつて言つてました。だからもう少し家にいて下さい。ねつー」

叶は、覗き込むようにそう言つとこいつと笑つた。うーん、いつも来るかわからないのに足止めされるのは 時間が惜しい。

「では、その方が見えたら連絡下さい」

携帯の番号を書いたメモを、渡そうとすると田村がそれを制した。

「いい加減にしろ、同じことを繰り返すな」

叶に言い放つと、田村は俺の手を引っ張つて外に出て行く。叶は泣きそうな顔をして、放心したまま動かなかつた。

「バカが。アレはお前を引き止めておく為の嘘だよ」

玄関から出ると、田村が横目で睨みながら言った。ゾッ・・・とした。もし、あのまま携帯番号を渡していたらと思うと。そうまでして、彼女は男に何を求めているのだろう。やはり自己満足でしかないのか。あまりにも哀しい行為ではないか。陽菜はどれだけ苦しかつただろう。病院にまで通うくらい。

「まさか」

「被害者に恨みを抱くような人間はいなかつた。叶も殺しが出来る人間ではない。残るは」

「でも、昼近くに姿を確認されている彼女にはアリバイがあるぞ。俺たちの把握していない別の第三者がいるんじゃないか？」

「もう一度、彼女の店に行こう」

タクシーに乗つて行くと店は閉まつていた。近所の女性に聞くと、坂崎が彼女を連れて地元に戻つたらしい。

「あの、すみません。確かに、あなたが陽菜さんを見かけた方ですよね。二十五日ですが奥さんは本当に店にいましたか？」

近所の女性は首をかしげながら、店に入つてないけどカウンターに人がいたのは確かよ、と以前と同じように答えた。やはり、犯人は第三者なのか?と考え込んでいると、女性は思い出したように「ああ」と呴いた。その声に反応して、俺たちが振り向くと彼女は少し恥ずかしそうにして言った。

「たいしたことないのよ。確かにその日、開店が早かつたのよ。朝、ゴミを出しに行つた時にはもう開いていたし」

「何時頃ですか?」

「七時前よ。ここゴミの回収が早いから大変なのよ」

「二十五日だけですか?時々早めの開店などはなかつたですか?」

「そういえば、あら、ないわね。いつもは九時に開店してたわ」
店の開店は九時のはずだ。なぜ、二十五日だけ開店を早めたんだ?礼を言つて駅前まで戻つた。坂崎の地元まで、車で二十五分程で行ける。田村が駅前のレンタカー店で車を借りて、間、口一

タリーで待つことにした。いくつかのバス停がある。暇つぶしに一つ一つ見ていくと 見つけた。
まさか コレを使ったのか？

慌てて、店まで走り出した。さつきの女性が、玄関前に何人かの女性と立ち話していた。

「すみません！」

息を切らしながら声を掛けると、びっくりして皆が振り返った。
「二十四日の夜は・・・何時まで・・・店は・・・営業してましたか？」

「貴方、大丈夫？二十四日夜？そういえれば 十二時頃外みたらまだ店開いてたわね。今、皆で話していたんだけどね。この田中さん店に入つたらしいのよ、ねえ」

田中さんは、困ったような顔をしながら頷いた。

「たいしたことないから警察の人にも言わなかつたんだけどね、お昼頃店に行つたら、席に座つていた男の人に、陽菜さんなら買い出しに言つてるよって言われたのよ」

「どんな男性でしたか？」

「よく店にコーヒーを飲みにくる方ですよ、いつもハンカチで汗拭いてる人よ」

川田だ。始めてあつた時、エアコンの効く部屋でハンカチでずつと顔を拭つていた彼を思い出した。

「ありがとうございました」

礼を言うと、駅前まで急いで引き返した。駅では、田村がバス停の時刻表を見ながら立つていた。

「夜中も店は開いてたのか？」

さすがエスパー田村！

「十一時頃にまだ営業してゐるのを・・・見た人が・・・いた」走り過ぎて心臓が破裂しそうだ。

「話は車の中で聞く。乗れ」

田村に運転を任せ、さつき聞いたことを話した。

「おかしいな」

田村が呟いた。そう、おかしい。店にいたのなら川田は何故そのことを言わないのであるか。店にいなかつた陽菜を庇うためか？いや違う、話せない何かがあつたんだ。彼は、隠しことをしている。

誰もいない店。昼頃確認された、カウンターの人影。陽菜と思われていたその人影は、陽菜ではなく川田だ。何をしていたのかは、おおよそ見当がつく。携帯を取り出し T 県警に電話する。谷口にこのことを説明し、川田のもとへ向かつてもうよう頼んだ。

陽菜は、店にはいなかつた。遠く離れた T 県にいた。物証もなく、あれだけの証言で陽菜が犯人であると立証するのは難しい。だが、犯人は彼女だ。

T 駅からは、T 県行きの深夜バスがあつた。彼女は、それに乗つて旦那のもとへ向かつたのだ。篠原に連絡を取つて、陽菜が飛行機や新幹線を使つていないか、もう一度確認してもらつよう頼んだ。その後、叶に電話する。

「二十四日、貴方は山田さんの家に電話しませんでしたか？」
受話器の向こうで、彼女は声を詰まらせた。

「奥さんに、何て言つたんですか？」

「私は、ただ・・・山田さんと今一緒にいるつて・・・」

「叶さん、貴方すべてを知つていたんぢやないですか？」

言い終わる前に、電話が切れた。彼女は、陽菜がやつたことを知つていたのだ。知つていて 何も言わなかつた。言えなかつたのか。自分のしたことが、何を意味するのかを考えるのが、怖かつたのかもしれない。だからといって、許されることではないのだが。

。

坂崎の店は、閉まつたままだつた。坂崎の両親に聞くと、砂丘に行つたと言う。砂丘に着くと、一人の女性が座り込んでいた。

「刑事さん」

俺たちに始めに気付いたのは、坂崎だつた。陽菜は、どこか遠くを見たまま動かなかつた。初めて陽菜に会つたときもこんな状態だ

つた。彼女の皿には何が映つているのだ？

「刑事さん、どうしたんですか？」

坂崎が、心配そうに聞いてきた。

「陽菜さんに伺いたいことがあって来ました。陽菜さん、一十五日は早朝から店を開けていたそうですが、何故ですか？」

「刑事さん？ 何を？」

坂崎を制しながらも、陽菜に質問の答えを促す。陽菜は、声が届いていないのか何も反応しない。

「二十四日の深夜まで営業していたのは何故ですか？」

「刑事さんっ！」

坂崎の悲鳴にも似た叫び声が、俺を非難する。

「工県まで行く深夜バスが丁駅から出ています。それに乗つて工県まで行つたんではないんですか？」

陽菜はもうどこか遠くへ行つてしまつたかのように、空を見つめるだけだった。誰の声も、もう彼女には届かないのではないかと思つた。

「山田さんを殺したのは貴方ですね？」

篠原の連絡を車で待つていた田村が、いつの間にか隣に立つていた。

「飛行機の乗客名簿に『山田太陽』といつ名前がありました。貴方ですね」

陽菜が、田村の言葉に僅かに反応した。

「貴方は、叶さんからの電話で店を開けたまま深夜バスで工県に向かつたんですね。そして、山田さんを殺害し、中部空港から飛行機に乗つて帰つてきた。違いますか？」

陽菜が頭を抱えて、何かを振り払うかのように頭を激しく掻きむしめた。

ドアを開けると、彼は強引に部屋に入ってきた私の姿に驚いていた。店はどうしたんだ、と尋ねてきたがそれには答えず、彼女はどこにいるのかと詰め寄った。

『陽菜！なぜお前は俺の言つことを信じてくれないんだ！』

彼は、私の両肩に手を置いて自分の潔白を訴えた。

『だつて、あの女が今、貴方と一緒にいるつて言つたのよ…』

彼の手を振り払い叫んだ。彼はそれでもまた両肩に手を置き諭すように真剣な目で訴えてきた。

『彼女はただの客だ！俺は彼女のことなんて、なんとも思つてない！』

『だつたらどうしてベットが一つあるの？！おかしいじゃない！！』

『これは違うんだ。ホテルが満室で』

『毎日！毎日！…店に来て貴方のこと

見てるじゃない…！』

頭を抱え、腹のそこから絞り出すような叫び声を出した。

『陽菜・・陽菜、俺を信じて。陽菜、俺はお前しか・・あ』

優しく抱きしめてきた彼の背中に、隠し持つっていた果物ナイフを奥深くまで突き刺した。

『イヤよ、貴方を誰にも渡さない』

信じられない　　といった顔で男は床に崩れ落ちた。

恐ろしい記憶を振り払つかのように、頭を激しく振りながら声を絞り出しながら叫んだ。

『何を信じればいいの。私は・・私は！　あの人は私だけの・・・・私の大切な、人なの。　愛してる、あの愛してる、愛してるの！』

泣き叫びながら、両手で砂を掴んだ。だが砂は、指の隙間から逃げるようにさらさらと零れ落ちていった。

『失いたくなかった。だから、主人を・・・殺したの・・・・ああああ、私は・・・どうして、こんな』

陽菜は両手で顔を覆い、低い叫び声を上げながらそのまま泣き崩れた。いたわるように坂崎が、陽菜を引き寄せて抱き締めた。

「陽菜 力になれなくて『ごめん・・・・・ごめんね』

片手に靴を持ち、裸足でやわらかな砂の上を田村と歩いている。細かな砂が、足の裏に纏わりついてくる。砂丘の先には何があるのか、文芸少年気取りで地平線を見つめた。田村のタクシーの中の言葉を思い出す。俺は、田村のように割り切ることはできない。だから割り切れないことを、『割り切れないもの』として『割り切る』ことに決めたのだ。

もしも、シングルルが空いていれば、叶があんな嘘をつかなければ、深夜バスが出ていなければ。もしかしたら、もっと違う未来になっていたかもしれない。何が良くて、何が悪かったのか、考え出したらきりがない。ただ、二人が会つていなければ良かつた とは絶対に思わない。二人は最後まで愛し合つていたのだから。

「俺 当分、結婚はいいや

空を仰ぎながら呟いた。

「お前ね、せめて相手ができるから言つてくれ。突つ込みどころ満載すぎて困るだろ」

相変わらず腹の立つ男だな、コイツは。

「悪かったよ。あーお前に言つんじゃなかつたよ

「帰るぞ」

背中を向けて歩き出す田村に、ふと気になつて尋ねてみた。

「田村、砂丘の先には何があると思う?」

田村は振り向くと真面目な顔で「道路だろ」と言つた。

その答えに、俺はおかしくなつて笑つた。不満そうに睨んでいる田村を見て、コイツとコンビを組んでよかったと思つた。

episode12 - 7 太陽のHレジー（後書き）

何とか終わりました。

もう既に、別のところで載せてはいるのですが読み直してみてたくさんの矛盾を発見してしまい慌てました。ちょっと、まだあまり納得のいっていない部分もあるような気がしますが（麻痺してわからないです）今ある力を出し切つて書いたので載せます。

ちなみにこの「県の砂丘は、鳥取でもいすおか（静岡）でもあります。私の空想上の砂丘です。しかも砂丘を実際に見たこともありません。サハラ砂漠（いったことないけど）をイメージして書いてみました（笑）日本なのに、すつごい広大な砂丘なの・・・。

読んでくださって、ありがとうございました。

episode 13 - 1 アツイ男

砂丘も堪能し、土産の酒を持って昼過ぎにエ県に降り立つと、むせ返るほどの熱気に迎え入れられた。暑い。県警にたどり着くまでに、今日一日の気力と体力を使い果たしてしまいそうだ。

「ただいま戻りました」

部屋に入ると、若林や陣内、藤堂があたたかく出迎えてくれた。「土産は買つて来たか？酒以外は受け付けんぞ」

篠原が扇子を仰ぎながら、右手を出して催促している。

「買つて来ましたよ」

篠原の机に大吟醸を置くと、ニンマリと表情を弛め「お前はいいヤツだな」と手にとつて喜んでいる。今度から、篠原に何か頼む時は酒を渡そう。

「サイキョウ？」

「いえ、最強と書いてツワモノと読むそうです」

「ほう、本気と書いてマジと読むヤツか

「 そうです」

よく分からぬが、同意しておいた。篠原は満足そうに頷いて、俺に顔を向けた。

「じゃあ早速、報告書出してくれよ」

鬼か、この人は。酒を渡してもこの人には意味がないな。

「久しぶりだな、田村」

席に着くと、後ろの捜査一課から威勢のいい声が聞こえてきた。振り向くと、短髪の目鼻立ちがハツキリとしたデカい男が立つている。誰だ？見ない顔だな。田村の知り合いか？

「誰だ？」

「さあ」

田村は彼を一瞥し、すぐ背中を向けた。その田村の態度に、男は怒りを帯びた目で田村を睨みつけた。

「いや、明らかにお前の名前呼んだだろ」「いや、明らかにお前の名前呼んだだろ

俺の言葉を無視して、報告書に取り掛かる田村。まあいいか、俺関係ないし。座り直して丁寧の報告書に取り掛かろうとする後ろから肩を掴まれた。

「無視するな」

「なんで俺なんだよ、田村に用があるんだろ！」

なんだよ一体。訳がわからずにいる俺に、若林が苦笑しながら彼を紹介してくれた。

「彼ね、猪又タケシっていつて、一年前まで強行犯係で田村と組んでたんだ。二ヶ月だけだけどね」

「九月から捜査一課に異動になりました。またよろしくお願ひします！」

強行犯係の皆さんに礼儀正しく挨拶をする。周りの皆さんも、各自猪又に声をかけている。俺も猪又のほうを向いて、挨拶をした。

「俺、望月といいます。よろしくお願ひします」

挨拶は済んだが、田村を睨みつける猪又とまったく猪又を相手にしない田村の間に挟まれて、俺はどうすればいいんだ？ ていうか、俺を巻き込むな。

「あの 報告書があるんで」

俺がそう言つと、猪又は田村をもう一度ひと睨みし席に戻つていつた。陣内と藤堂は、「若いね」といしながら笑い合つていた。ため息をつき、報告書に取り掛かつた。篠原がちよつかいをかけてくるのを無視しながらなんとか完成させることができたのは、一時間後のことだった。

藤堂が、事件解決のお祝いに寿司をとつてくれた。なぜ篠原は、こういう気遣いができないのか。買つてきた酒を、いち早く飲んでご機嫌でいる篠原を見ながら、この人が上司なんて世の中何か間違つていなか と疑問に思つた。

「かわいい子いたか？」

若林が寿司を乗せた皿を片手に話しかけてきた。相変わらずの若

林に、叶の話をしてみた。若林の表情が見る見る曇つていく。です

よね、そうなりますよね。

「若さん行つたら大変だつたでしょうね」

「女は怖いね」

若林としみじみと語り合つていると、小林と、なぜか一緒に加わつている間宮が酒を飲みながら割り込んで来た。

「うちの娘はいい子だぞ！」

「あーはいはい、そうですよね」

小林と間宮が満足して向こうへ行くのを、見送りながら若林と苦笑した。

「ところで、猪又のこと気にならないか？」

いつ切りだそうかと思っていたことを、若林から話を振つてくれた。ありがたい。若林の目を見返して答えた。

「なります」

「田村さあ、ああいうヤツだからこれまでに四人、相棒代わつてるんだよね。修平が五人目」

初耳だ。若林の話では、四人は結局、他の部署へ異動していったそうだ。その一人が、猪又だつた。最短が3日、最長が猪又の二ヶ月だつたらしい。猪又は我慢したほうなのだ。その記録も、半年目の俺が抜いている。やつたー、て喜ぶべきなのか？ 確かに難しいヤツだが、異動したいと思うくらい嫌だと思ったことはない。むしろ最近は、ヤツの生態が気になつて面白いことさえ思つてゐる。

「猪又もそうだけどやー皆、真面目すぎたんだよね」

若林は、しみじみと言いながらウニを口に放り込んだ。

「ん？ それじゃあ俺が不真面目みたいじゃないですか、ひでえ若さん」

がつくりと方を落とす俺に、「ごめん」と若林は笑つた。

「違うつて、お前も真面目だよ。田村もな。ただ彼等は入りすぎちやうんだよね、アツイ男だつたんだね。だから田村が手を抜いてるみたいに見えちゃうのよ」

あの実直そうな猪又の顔を思い出す。ああ、そういうことが初めての強盗事件を、思い出した。被害者に感情移入しすぎて自滅しそうになつてた俺を、冷静にさせてくれたのは田村だった。彼等も同じだつたはずだ　　ただ受け入れられなかつたんだな。どっちが悪い訳でもない。同じくらゐ犯人を捕まえたいと思つていたのだから。

「難しいですねえ」

「なんだお前、田村の気持ちが彼らに伝わらなかつたのが悲しいのか？優しいなあ、修平は」

酔つ払つた若林が、もたれ掛かりながら頭をグシャグシャと撫で、ぐいぐい髪の毛を引っ張つてきた。

「違いますよ、もう若さんは。あと髪の毛引っ張らないでください、ハゲたらどうするんですか！」

乱れた髪を直していると、一ヤ一ヤしながら若林は人差し指を立てて俺の頭を指しながら、アデラーンス！とウインクした。そして、意地悪そうにニヤリと笑い、両手を俺のほうに向けて近づいてきた。

「冗談じゃない」

慌ててその場を離れ、席に戻ると廊下にいる田村が目に入った。よくみると猪又に絡まれてる。気になつて近寄つて行くと、猪又の苛ついた声が聞こえてきた。

「まだ強行犯係にいたんだな。あんたみたいな警官がいるから、警察が叩かれるんだ」

顔を真つ赤にしている猪又を無視して、田村は酒を淡々と飲んでる。

「聞いてるのか？なんであんたが刑事部に残つて、俺が異動させられるんだよ」

「上の人間に聞けよ」

田村が、面倒くさそうに答えた。・・田村、お前それじゃあ、猪又より自分が有能だといつてゐみたいじゃないか。案の定、猪又の顔が仁王像の顔のように変化していくのを見て、ヤバイと思い飛び

出した 俺がバカだつた。

なんでこうなる。隣には、酒を飲みながら悪態をついている猪又がいる。ここは、猪又行きつけの居酒屋だ。その後猪又に捕まり、ここまで連れて来られたのだ。

田村一、覚えてろよーっ！一度と助けてなんかやらねーからな！

店は、仕事帰りの会社員で埋まっていた。皆、楽しそうに料理をつまみながら酒を飲んでいた。頑固そうな店主が一人で切り盛りしている店で、旬の食材や地元で作られた野菜を使って作られた料理が人気なのだそうだ。出てくる料理はボリュームがあり、里芋の煮物やぶつ切りにされたカレイの煮つけなどが目の前のテーブルに並んだ。美味そうだ、と一口食べてみると、素朴で家庭的な味だった。あの頑固そうな店主が、これを作ったことに驚くとともに、俺の母親の料理より美味しいことに小さな衝撃を受けた。ここも彼らの憩いの場なのだろう。

「大丈夫か？」

料理にも手をつけず酒を煽つてている猪又に声を掛けると、真っ赤に充血した目で、うるさいとでも言つうかのように睨んできた。一人になりたいのなら、何故俺をここに連れてきた。付き合いきれなくなつて、手元の酒を飲み干した。

「あんた 望月さんはなんとも思わないのか？」

「何が？ああ、田村の事？憎たらしいヤツだとは思つよ」

あの野郎、俺が出て行つてコイツを宥めていた間に逃げやがつて。覚えてろよ。

「あんないい加減なヤツを、なんで刑事部に置いておくのか俺はわからん！」

「別にいい加減でもないだろ。アイツはアイツなりに考えて動いてるだけだよ」

「何でだよ！」

猪又がテーブルに拳を叩きつけたので、周りの客が驚いてこちらを見てきた。また怒りが込み上ってきたのか握つた拳が震えている。頼むから俺を殴るなよ。

「静かに飲めよ。周りの客に迷惑だろ。アイツは、職務に忠実なだ

けなんだよ」

今にも暴れ出しそうな勢いの猪又を、周りの客は心配そうに見ている。前にもあつたぞ、こんな状況。なんで俺が田村を擁護しなくちゃいけないんだ。

「まるで自分は何も悪くないかのような顔で、遺族に無神経な質問をするアイツが残つて何で俺が異動させられなきゃいけなかつたんだ」

悔しそうにテーブルを何度も叩きまくる猪又に、店主が外に向かって指を差した。出て行けということらしい。この状態じゃ無理もないよな。ため息をつき周りの客が心配そうに見守る中、猪又の腕を掴んで外に引きずり出した。

「すみません、お勘定コイツにつけといて下さい」

店の外に出るや否や、俺の手を跳ね除け一人でフラフラ歩き出す猪又に無性に腹がたつてきた。もうコイツと酒を飲むのはごめんだ。「俺は、犯罪を無くしたくて警察官になつたんだ。これ以上傷つく人が出るのは嫌なんだ。なのに、俺は止められなかつた。俺たちのせいだ、何人も亡くなつたんだ。なのに、アイツは」

「田村は、何ていうか線引きをして仕事をしてゐるんだよ。俺たち警察だつて、ただの公職だ。民間の企業と同じで、仕事を細分化するためにいくつかの部署に分けられている。その中の刑事部の強行犯捜査係の仕事は、犯人を逮捕して事件を早期解決することなんだよ。でも、被害者や遺族を軽視している訳じやない。彼らの苦しみを少しでも早く取り除くためにアイツだつて真剣なんだ。猪又、お前は背負いすぎなんだよ、少し

言い終わらないうちに「お前も田村と同類かよ」と猪又に捨て台詞を言われて、ブチッと頭の中の何かが切れる音がした（実際はそんな音はしてないし切れてないが してたら大変）と同時に猪又の背中を思い切り足で蹴り飛ばしていた。前のめりに倒れこんだ猪又は、驚いた顔をして俺を見上げる。

「思い上がるなよ、ボケが！ 何でも抱え込んで背負つちまつたら、

やらなきゃ いけないとすらできなくなるだろーが。どあほつが！
感情に流されれば迅速な判断もできないだろ。頭を冷やして冷静になれ！」

俺の豹変に、猪又は口をパクパクさせながら座り込んでいた。俺はそのまま呆然としている猪又を残して歩き出した。

蹴つたのは、田村が馬鹿にされたからじゃない。それは断じてない。ただ、悔しかった。同じ日本人なのに、同じ刑事なのにまったく伝わらなかつたことが。こんなに、悔しいものだとは思わなかつた。話せば分かり合えるなんて 嘘つぱちだとしか今の俺には思えなかなつた。よく、田村は一ヶ月ももつたな。夜空を見上げて、深く息をついた。

飲み直すために『オンブラーージュ』に行くことにした。俺にはあそこの方が落ち着く。ドアを開けるとこつものカウンターの席に田村がいた。

「お疲れ」

「ほんと疲れた、お前の相手してるとほつがずっと楽だ」

前に置かれたジントーラーを一口飲むと、火照った体からじんわりと熱が引いていく。

「やっぱりここが一番いいや」

マスターに笑いかけると、ありがとうござまると会釈で返された。

「仲良くなれたか？」

意地悪そうに聞いて来る田村にニヤリと笑しながら答えた。

「さあな」

朝出勤すると、刑事部の廊下で猪又が仁王立ちで立っている。若林の「アツイ男」という言葉が頭に浮かぶ。やめてくれ、朝から猪又の相手をしている暇なんてないんだから。目を合わせないようにして部屋に入ろうとしたが猪又に呼び止められた。やっぱり無理だつたか。なんで田村じゃなくて俺なんだよ。

「望月、昨日はすまなかつた」

恐縮しながら、猪又が頭を下げてきたので、驚いて何も言えないでいると猪又が力のこもった眼差しを俺に向けた。

「確かに俺、感情的になつてた。あの後、冷静に考えてみたんだ。お前、捜査一課に来ないか？ 末広警部もお前の事気に入つてるし、俺と組もう」

「は？」

なんかこの展開前にあつたぞ。コイツ　まさか、間宮属性か？！　まずい、今すぐ丁重に断らなければ。

「断る」

後ろから声がしたかと思うと、腕を引っ張られて部屋に連れ込まれた。

田村？ お前、なんでこんなタイミングで出て来るかな。廊下を見ると、猪又がこっちを見て睨んでいる。

「お前が出て来ると、ややこしくなるんだよ。ほらこっち睨んでるじゃねーか」

田村は平然とした顔で席に着き、報告書に取り掛かり出した。なんだよ、面倒だけ押し付けやがつて。廊下でまだ恨めしそうにしている猪又のところに戻ろうとしたが、若林たちが部屋に続々と入ってきたので行けなくなってしまった。なんか俺ここに来てから、気苦労が絶えない気がする。ゲンナリしながら報告書に取り掛かる。仕事は山積みなんだ　猪又とのことも、もうどうでもよくなつて

きた。

取り掛かった報告書が、出来上がったところで若林が声をかけてきた。

「修平、今日飲みに行かないか？いい店見つけたんだよねー」「行きます。ところで、総務部の女の子たちとはどうなったんですか？」

ふと気になつて聞いてみると若林がニンマリ笑つて残念だつたねーと意味深な事を言った。

「あー俺つて運がないな」。

「あの、俺もいいですか？」

ぎよつとして後ろを振り返ると、いつの間にか後ろに猪又が立つている。

「いいよ、猪又も来いよ。多い方が楽しいしさ」

若さーん！俺の気持ち察して。結局三人で飲みに行くことが決まった。こんなに憂鬱な飲み会は初めてだ。

「コーヒーを飲もうと席を立とつとした時、篠原の机の電話が鳴つた。篠原の電話が鳴ると緊張する。事件の発生を報せる電話だからだ。こればかりは慣れない。俺たちは、じつと静かに篠原の電話が終わるのを待つた。篠原が何度も相槌を打つて受話器を置いた。

「中央署で捜査本部設置だ。俺は、藤さんたちと少し遅れて行くから、先に行ってくれ」

「例の通り魔事件、やつぱり……な」

廊下を歩きながら、若林が苦々しそうに言った。一ヶ月前から起こっている通り魔殺傷事件の事だ。

「確か一人亡くなつてますよね」

俺が言うと若林が頷く。

一貫して、深夜帰宅途中の女性を背後から襲うというこの事件。最初に犯行が行われたのは、二か月前の六月下旬、被害者は背中を刺されて重傷を負った。一件目は七月中旬、被害者は、背中を数カ

所刺され重症。三件目は、八月上旬に背中を刺されて重傷、そして四件目とうとう死者がでた。八月二十六日、俺たちが丁寧に発ったその夜、帰宅途中の女性が背中を数ヵ所刺されて失血性ショックにより死亡。いずれも中央署管内で事件は起こっている。被害者も後ろから襲われているというのもあり、犯人の特長を覚えてはいなかつた。

「卑劣ですね」

嫌な事件だ。女性を、しかも後ろから襲うなんて。アレ……。でも。

「犯人が女っていうのはないのかな?」

頭に閃いた事を口にだしてみた。背後からなら、女でも犯行は可能ではないか?

「忘れたのか、犯人が3件目の事件で被害者の流した血を踏んで逃げた事を」

田村に突っ込まれて思い出した。情けない。そう、犯人は靴跡を残して逃げたのだ。右足27cmのスニーカーの。

「27cmの足の女か。彼氏の靴を履いていたとか?」「

隣を歩く里見に笑われてしまつた。ショックだ。

「ごめんなさい、若林さんと同じ事いうから……つい

若林をみるとニンマリ笑つて、「俺たち同類だな」と言つた。同類のはずなのに何故若林だけモテるのか。納得がいかないまま地下駐車場に着き、いつものように田村の車に乗り込んだ。二台の車のエンジン音が地下駐車場内に響き渡つた。向こうは若林の車で行くようだ。

「こんな事件、早く終わらせよ!」

「そうだな」

地上に向けてアクセルを踏み込んだ。

地上はダンテの『神曲』に描かれている煉獄地獄の様相を呈していた。太陽の強烈なまでの日差しに、行き交う人の目は虚ろで生気がない。恐ろしい光景ではないか。でもこの地獄の業火の中でさえ

犯罪は起きるのか。それとも地獄の業火の中だからこそ犯罪は起きるのか。この暑さで人を殺したくなつて、無差別に殺しているとか？わざわざ深夜を選んで？随分と冷静じゃねーか。

「なあ、被害者はお互い面識ないんだよな」

「だから通り魔なんだろ」

ハンドルを握りながら、素つ気なく田村は言い放つた。

「お前な　だからさ、よく推理小説で、ある一人を狙う為に通り魔に見せかけて殺人を犯すつてのがあるだろ。なんか今それが頭に浮かんだんだ」

「どうだろな」

随分今日は素つ気ないな。事件に集中してゐるのか。

中央警察署に着くと、すぐに捜査会議が始められた。今まで出でいる情報以外で目新しい情報が出ることもなく、俺たち一人は第一被害者のもとに聞き込みに行くことになつた。

「またあとでな」

若林たちは、まだ入院している第三被害者のもとへ行くことになつてゐる。第二被害者は、同じ病院の集中治療室に入つていて、未だに意識は戻つていない。

第一被害者は、アパレル会社に勤務している佐々木頼子、二十四歳。彼女も数日前に退院したばかりだつた。今は実家に帰つてゐるそうなので、実家のある南東区に向かう。

「私は工県警の望月、隣が田村といいます。何度も申し訳ありませんが、事件当夜のことをもう一度詳しく述べていただけませんか？」モダン調の広いリビングに通された俺たちは、オフホワイトのソファに腰掛け、向いに座つている頼子が話し出すのを待つた。彼女は当時のことを思い出すのを一瞬躊躇したが、ゆっくりと深呼吸をして話しおとした。

「あの夜も、音楽を聞きながら一人で歩いていました。後ろから誰かついて來てるなんて、思つてもみませんでした。何かが背中にぶ

つかつたと思つたら背中が冷たく感じたんです。痛みは最初、ありませんでした。背中を触つたら手に血がベットリついてるのを見て、初めて刺されたことに気付きました。それからどんどん痛みが出てきて。しゃがみ込んで、叫び声を上げました。近所の人人が出て来てくれなかつたらと思うと ゾッとします」

話をする間、彼女の膝の上で握り締められた手が震えていた。いくつか質問をしても、入院中に証言してもらった内容と同じで、新たに思い出した記憶などはなかつた。犯人は刺したと同時に逃げていて姿も見ておらず、犯人について思い当たることもないと言うことだ。彼女の体調のこともあります、佐々木邸をあとにするこにした。「ありがとうございました。また何か思い出したことがあつたら連絡下さい」

頬子に送られて玄関先まで行くと、後ろから力のこもつた声で頬子が声を掛けてきた。

「絶対、犯人捕まえてくださいね。もつ誰にもこんな怖い思いして欲しくないから」

力強く頷くと、頬子は笑つた。今日始めて見た、彼女の笑顔だつた。

車に乗り込み、事件現場の聞き込みに向かつ。

現場は、中央区の大通りから一本奥に入った路地で、雑居ビルと民家が隣接している。日中は、雑居ビル内のテナントで働いている会社員などが多く出入りしている。

「目撃者もいないんだよな　運のいいヤツだな」

四件とも目撲者がないのだ。いくら深夜とはいえ中央区の中心街で事件が起こっているのだ　運がいいとしかいいようがない。

「神様が味方してるのかもな」

運転しながら、田村が吐き捨てた。やっぱりおかしい　いつもの冷静な田村ではない。

「　お前どうかしたのか？」

「別に」

強い拒絶を含んだ口調だつた。

「話したくないなら聞かねーけども　あんまり無茶するなよ」

何か通り魔事件に思い入れがあるのか？田村は相変わらずの無表情でハンドルを握っている。俺には、その表情から田村の考えを読むことはできない。

車を止め現場周辺の聞き込みをしてみたが、収穫は得られなかつた。そんなすぐ何か見つかるようなら、とつぐに所轄が見つけていはすだ。黄昏があたりを包みはじめていた。いくつかの民家の電灯が、いつの間にか灯っている。背広を脱ぎ、ハンカチで汗をぬぐいながら現場をくまなく歩いてみる。辺りも暗くなり、事件発生から一ヶ月も経つてるので、さすがに何も見つけることはできなかつた。車に戻り、大きく息をついた。

中央警察署に戻り、捜査員が集まつたところで捜査会議が開かれた。意識を取り戻した第三被害者の証言で、犯人が少しの間その場に留まつていたことがわかつた。

「低く押し殺したような笑い声が聞こえたそうです」

若林が報告するのを聞きながら、他の捜査員たちは苦虫を噛み潰した顔をした。怖かった、と被害者は話しながら泣いていたそうだ。

「もう一度と次の犠牲者を出さないように犯人逮捕に尽力してくれ！以上」

篠原がそう言つと、捜査員たちの顔が一気に引き締まつた。会議終了後、捜査員たちが次々部屋から出ていき、最後に俺たち一人が残つた。何も収穫がないまま一日が終わつた。今までだつてそんな日はあつた。無駄だとも思つていない。可能性を一つ一つ当たつていつて、最後に行き着いた所に真実があるのだから。でも今日の田村は、明らかに苛立つていた。

県警に戻ると、田村がこんな状態なのに、後ろで猪又の気配がする。ヤツは、背後靈か。

「コーヒーを飲んで一息ついている若林のところに行き、猪又を連れだすように頼むと若林は二ヶコリとほほ笑み親指を立てた。

「OK！今度何か奢れよ」

あんたは篠原か。

「わかりました。食堂のカレー奢ります」

「安つ！あれ一杯四五〇円だよ？！」

愚痴をこぼす若林を急き立て、なんとか一人を部屋から出すことに成功した。猪又は、何か言いたそうに俺を見ていたが、今はお前を相手している暇はない。事件資料と向き合つ田村を横目で見つつ、席につき手元の資料を広げた。どれくらいの間、資料と向き合つていたのだろう。気付けば部屋には俺たちしか残つていなかつた。

「付き合つ必要ないぞ」

田村が事件資料を読みながら、いつもにまして素つ氣なく言つてきた。

「別に付き合つてゐわけじやねーよ。早くケリつけたいって言つただろ」

様子がおかしいヤツ残して帰るわけにもいかないだろーが。それ

に、事件も気になつてはいるのだ。イスに深くもたれ、資料を一瞥する。犯人に繋がるものがない。他に何か突破口見つけなきや、やつぱダメか。

襲われた日も曜日もみんなバラバラだし、被害者も性別以外、職業も年齢も見た目も共通するところはない。やつぱり無差別に選んでいるだけなのか？

窓の外を見ると、周りのビルの窓からちらほらと明かりが見える。もう十一時だ。俺たちの他にも頑張っている人たちがいるんだな。犯人は今何をし、何を考えているのだろう。コーヒーを淹れに席を立ちながら、犯人の事を考えてみる。犯行はすべて平日深夜。仕事が終わって、そのまま犯行に及んでいるのか？スニー カーってことは、会社勤めではない？それとも一旦家に帰っているのか？土日に犯行に及ばないのは何故だ？もしかして犯行に及んでいるのは犯人の休みの日か？いや、そうとは限らないか。うわあループだ。頭を振り、深呼吸をする。

何故犯罪を犯す？

田村の机にコーヒーを置き、窓際に立つと、さつきよりも明かりが減つていて。急にぞわりと体の中に嫌な感覚が沸き上がってきた。じわりじわりと体中に広がつていく。まだ、この嫌な感じ。色々な感情が、縑なまい交まぜになつたもの。

子供の頃、居残り授業や授業後の委員会が嫌いだった。周りの友達が帰つていく中、自分だけが取り残されていくようで無性に寂しく思つたのを覚えている。未だに、最終電車に乗るのが苦手なのだから、まだ直つていないのだろう。部屋に独りでいるときは、何とも思わないのに、深夜の最終電車が苦手だなんて自分でもおかしいものだと思う。両親が共働きだったので、独りには慣れているはずなのに。それとも、本当は寂しかったのか。俺は。ああ、もしかしたら犯人もそうなのか。寂しいのか？

窓の外の明かりが、またひとつ消えた。ああ、どんどんとり残されていく。寂しい。独りは、寂しい。独りは怖い。

でも、寂しさから人を殺そうと思うか。むしろ、誰かと一緒にいてほしいと願わないか。

何故殺す？

いつも凶器を持ち歩いて衝動に駆られて刺しているのだろうか？殺すと決めてから獲物を探して刺しているのか？

「どっちが先でもまたループか」

いやまでよ。

「衝動的だらうと計画的だらうと、その時何らかの要因があるはずだよな」

「どんな要因だ？」

声に反応して振り向くと田村が一いちらを向いていた。

「犯人にとって人を殺したくなる程の何か」

「もつと詳しく言えよ」

「詳しく？犯罪論でも言えと？」

「お前にそんなあつたんだ」

大げさに仰け反りながら田村が言つた。失礼な男だ。

「小学生並のならな」

「言つてみろよ」

頬杖をつきながら、田村が片手をひらひらさせた。

「それが人にものを頼む態度か」

「うるさい演者だな」

田村は、俺のほうに体を向け姿勢を伸ばして座ると拍手をした。

余計むかつく。しかも・・話しにくいじゃないか。

「あくまでも俺の意見だぞ。犯罪は、怒りや不満などの抑圧された感情が爆発して、一瞬理性が吹っ飛んだその時に起きるものだ

と思う。それも、時間はそこには関係しないんだと思う。何年も計画を立てて犯罪を実行する人間もいるし、衝動で犯罪を犯す人間もいる。それも、要因と言えるストレスの度合いによるものなんだと思う。だから、衝動的な犯行だろうが計画的な犯行だろうが、犯罪を犯すに至る要因は必ずある。被害者によって刺された回数が違うのも、要因の度合いによるものではないのかな

「ふうん、でも愉快犯なんてのもいるぞ」

「それも同じだ。ストレスを溜めた人間が、何かのきっかけ、例えば殺人事件のニュースを見てストレスを解消することができた。スッキリした気持ちから犯罪に興味があると錯覚する。そして、犯罪を犯す」

「なるほどね、で、その要因がなんだ?」

「だからさ、日もあいているし無差別という点から、犯行当日に何か要因があつたんじゃないのかな? 競馬とか競艇とかで負けた、とかさ」

我ながらいい点ついてると思ったが、あっけなく田村に却下されてしまった。

「当日とは限らないだろ、毎日の積み重なったストレスが偶然その日に爆発して、犯行を犯したかもしない。時間は関係しないんだろ」「確かに でも諦めないぞ。

「でも一応、事件当日に共通するものがないかを調べてみる価値はあるはずだ。毎日のストレスの限界がきていて、計画的に日付を決めていたのかもしれないだろ。他は 事件で共通することっていつもたら『深夜』『女性』『背後からの犯行』。そこにこだわる犯人の理由はなんだ?」

「何も考えていないか、完全主義者か、それが犯罪哲學でもあるんじゃないか?」

『深夜』『背後』を選んだのは、犯行や顔を見られないため。確実に犯行を実行するため。『女性』を襲うのは、非力な相手を狙つ

て犯行の成功率を上げるために。でも、犯人は足跡を残している。ずいぶんお粗末じゃないか？

「哲学ね」

「話しながら、急に頭にあることが浮かんだ。

「もしかしたら、四件の犯行の前に、犯人が衝動的な犯罪を犯しているかもしれない。少しこのまま話せ。衝動的に犯罪を犯して、捕まつたのかどうかはわからない。もしかしたら未解決事件かもしれない。だが犯人は、その犯行でストレスを発散することが出来たとしたら？ 一件目から四件目まで一貫して、深夜に女性を襲っている。前の犯罪でも深夜に女性を襲つたんじゃないのか？」

「随分強引だな。さつき言ったように、ニュースで見た犯罪を真似ているだけかもしれないぞ。それに、完全主義者かもしれないし、何も考えていないかもしれない」

田村は、「ヒーヒーを飲みながら、冷静に俺の推理を論破した。

「血を踏んで足跡を残すような抜けたヤツが、完全主義者なわけがない。それに、これだけ騒がれている事件で四件とも目撃者が現れないんだ。綿密に犯行を実行しているに違いない。だから、何も考えていないヤツには無理だ。俺は、この犯人は愉快犯ではないと思っている。世間が騒ぐ様子を楽しんでいる感じも受けないし、犯行がエスカレートしていくわけでもない。ただ、同じ事を繰り返すだけだ」

「根拠が弱いな」

「うう、やっぱリループか、ていうかお前は何かないのかよ。俺の考え方、こと」とく却下しやがつて

少し考え方こんでから、田村は意外な事を言い出した。

「実はお前と同じなんだ」

「何が？」

「色々考えたんだが、お前と同じように犯人はもうひとつ犯罪を犯してるんじゃないかと思ってな」

「あ？ だつたらなぜ同意しないんだよ。恨めしそうに睨んでいる

と、ニヤリと笑いながら言ってのけた。

「なんとなく同じ考えなのが嫌で、力はいつちまつた」

「お前なつ！」

「ムカつくつ。この男ほんとムカつく。今なら、猪又と同盟組めそ
うだ。

「他に手掛かりはないんだ。思い当たることを一つ一つ潰していく
しかねーだろ。ほらやるぞ」

田村は、いつもの田村に戻つたらしい。でもムカつくヤツには、
変わりない。ふと外を見ると、ビルの明かりがなくなつていた。で
もさつきのように寂しくないのは、独りじゃないからか。

「深夜、女性が襲われる事件　なんて結構な数あるんじゃないか
？いつまで遡さかのぼって調べるんだ？」

深夜一時過ぎに何故俺は、田村と一緒に仕事をしているのか　。

それもこれも犯人と猪又のせいだ。

「細かな条件つけて、ヒットさせていくしかないだろ。そんな大変
な作業じゃないさ。地道にやろうぜ、朝まで時間はタップリある」

一気にヤル気を奪つうこと言つな　。コイツも鬼だ。た
め息をつき、気になつて全国の殺傷事件を検索してみた。過去五年
で、十八万件ヒットした。

「ふざけんなーっ！十八万件ってなんだよ。日本の未来は真っ暗だ
ーっ」

「落ち着け、前の犯罪が工県とは限らないんだ。全国すべて当たつ
ていくしかないだろ。手を動かせ手を」

「くそ、やつてやるよ」

田村といくつかの条件付をしながら絞り込んでいく。『深夜』『
20代から30代の女性』『殺傷事件』『背後からの犯行』それで
も解決した事件、未解決事件合わせると三万件ヒットした。殺す氣
かつ。

「俺は解決事件を調べる。お前は未解決事件を頼むぞ」

田村はそう言うと、すぐに解決事件の振り分けにかかつた。相変

わらずの集中力だな。やつぱりまだいつも田村、じゃないのか？大丈夫か　このまま止めなくとも。

「急げよ、もう三時だぞ」

「止めたって聞きやしないんだ、このまま行くしかないだろう。パソコン画面に向き直り、事件の振り分けを始める。付き合つてやるよ。

「お前ら 何してるの！？」

黙々とパソコンに向かっている俺たちを見て、いつもより早めに勤した若林が呆然としながら尋ねてきた。

「ああ若さんおはよー・・・・」「ざいまふあー。あ、すみません」話している途中で、欠伸がでてしまった。

「修平・・・目が真っ赤だ。何してるんだ？」

昨夜の田村との話すると、若林も興味をもつたらしく一緒に作業を手伝ってくれることになった。

「お前ら顔洗つて来い。ヒドい顔だぞ」

廊下にでると、朝日が眩しすぎて一瞬目の前が真っ白になつた。

「うあ、目がチカチカする」

フラフラと、二人で壁にもたれ掛かりながら洗面室まで歩く。こんな朝を迎えるのは久し振りだ。大学時代、レポートを毎回ギリギリになつて慌てて仕上げていたあの日々を思い出した。出来ればもう迎えたくない。

顔を洗つて部屋に戻ると、若林が出勤した篠原に昨夜の俺たちの話をしているところだつた。篠原も興味を持ったようで、俺のパソコン画面のファイルを一瞥して言った。

「若から聞いた。中央署の捜査員には俺から言つておく、お前ら四人は引き続き過去の事件を洗い出してくれ。何かあつたら俺の携帯を鳴らせ」

このまま続行か。でもこれで、何か犯人に繋がるものが見つかるかもしれない。俺たちは、またファイルの振り分けを始めた。

「何やつてるんだ？」

休憩がてらコーヒーを飲んでいると、猪又が強行犯捜査係の方を見ながら話かけてきた。全員が、朝から一心不乱にパソコンに向かっていれば気にもなるわな。

「んあ、ああ・・・アレね」

昨夜の俺たちの話をするとき、猪又は驚いた顔で田村の方をみた。

「何の手掛かりもない今の状況じゃ、小さな可能性でも地道に調べるしかないしな」

「どれくらいあるんだ?」

ネクタイを緩めながらストレッチをしていると、猪又が心配そうな顔で聞いてきた。

「ん? 三万件、ハハ、やんなるだろ」

「・・・・頑張れよ」

「サンキュー」

席に着き、パソコン画面の中のファイルを一つ一つ見ていく。それにしても 全国津津浦浦よくまあ こんなに犯罪がおこるもんだね。しかも未解決ときた。のうのうと暮らしている犯人に無性に腹が立ってきた。

「これはキツいなー、お前ら一晩中ずっとこんななんやつてたのか?」

若林が、目頭を押さえながら呻いた。

「そうですよ、だから昼飯奢つて下さい」

パソコン画面の横から顔を覗かせ、若林に笑いかけた。

「たくましくなったね、修平君」

「若さんの指導のお陰です」

「点心のラーメンの出前とつてやるよ」

「 安過ぎますよ」

点心のラーメンは一杯三〇〇円という格安のラーメンだ。県警内では、安い早いということで人気がある。ちなみに味は普通。

「昼まで頑張るうな」

「了解」

今回の事件と類似する、事件ファイルの振り分け作業を淡々と続けていく。気が遠くなるような地道な作業だが、それでも四人でやるようになつてからは大分楽になつた。田村は相変わらず、食いつのように画面を見据えたまま動かない。

始めは、何か通り魔事件に強い思い入れがあるのかと思った。でも考えてみれば、事件は二か月前から起きていて、田村は、その間この事件に関心を寄せるようなこともなかった。じゃあこの田村らしからぬ行動は、一体何だ？この事件とは本当に関係ないのか。まさか亡くなつた被害者が知り合いとか？妹？親戚？片思いの相手とか？片思い？片思い？！

「修平　　どうした！？大丈夫か！？」

若林が、不安そうに俺を見ている。何でだ？

「ニヤニヤしながら画面見てたぞ。おかしくなつたか？」

いけない、つい面白くなつて顔がニヤついたらしい。アイツが女に片思い　　とか想像できねえ。

「すみません、考え方してました」

「余計怖いぞ」

「若さん、ひでえ」

「何を考えてたんだ？」

隣の田村が、気になつたのか聞いてきた。いや、悪い。事件のこじじゃないんだ。何考えてたかなんて言えねえよ。

「いや、その、うん。大丈夫」

自分でも意味の分からぬ事を言つてしまつた。俺が大丈夫か。

「みたいだな」

呆れた顔をして、また画面に向き直る田村。

「修ちゃんえつちい」

若林が囁かれてると、隣の里見が顔を真つ赤にして俯いてしまつた。

「ち・・違いますよ！変な事言わないで下さい、若さん」

慌てて訂正するが、里見はなかなか顔を上げない。最悪だ。

「じゃあ修平君は、何考えてたんですかー？」

若林は、ファイルを見ながらからかつてきた。

「そんなこと聞く若さんはキレイでーす」

「アハハ悪い悪い、でもほんとおかしくなったかと思つたよ」

「そんなひどい顔してましたか 以後気をつけます」

時計を見るともう一時を過ぎていた。他の捜査員たちは、外を駆けずり回つて犯人の手掛かりを探しているのだろう。何か少しでも犯人の手がかりになるものが見つかればいいが

その後も、なかなかファイルと向き合つが、酷似した事件がなかなか出てこない。俺たちの考えは間違つていたのだろうか？ネクタイを緩めながら、ファイルを見ていると目に入つたファイルにネクタイを緩める手が止まつた。おい・・・コレ。食い入るようにファイルを見つめると、だんだんと動悸が激しくなつてくるのがわかる。

「田村、ちょっと」

田村が俺のパソコン画面を覗き込むと、表情が険しくなつていつた。やつぱり この事件だ。田村の反応を見て、若林と里見も俺のパソコン画面に集まつてきた。

「この事件か？」

若林が、食い入るように事件ファイルに目を通す。

『事件は今から一年前のS県K市で発生。被害者は、二十五歳。市内の会社で事務員をしていた女性で、深夜帰宅途中、背中を包丁で刺され失血性ショックで救急車が来る前に死亡』

「確かに、うちの事件と似てるな 。所轄のK警察署に連絡して資料を送つてもらおう」

若林が電話をしている間に、事件について話し合つ。

「発見者の男性が救急車を呼んだつてあるけど、被害者から何か聞いてないのかな？」

「まだ息があつたつてことは、犯行からそんなに時経つてないよな。でもこのファイルには、目撃情報なしつてあるな」

ファイルには事件の概要しか載つていないので、詳しい資料は所轄から送つてもらわなければならない。

「早く資料が見たいな 」

そう言つて若林の方を見たとき、俺の腹が豪快な音をたてた。し

ん、と張り詰めた空気の中誤魔化せないくらいの大きな音だ。

「そういうや、お前ら朝飯も食つてないだろ？出前とつてやるよ」

あまりの恥ずかしさに、机に突つ伏して落ち込んでいる俺の背中を叩きながら、電話を終わらせた若林が震える声で慰めてくれた。なぜ田村の腹は鳴らないのに俺の腹は鳴る。我慢するということができないのか、俺。しかも主張しすぎだつての、もうこんな俺辞めたい。

「お手柄だつたな」

廊下で猪又に声をかけられた。

「これからだよ、やつと事件が前進するんだ。お前の方は？」

朝話した後、すぐ猪又も捜査で外出したのは覚えている。

「ある詐欺グループを担当してるので、もう少しかかりそうだよ」
俺たちの前を、点心の店員が岡持おかせりを持つて刑事部の部屋に入つて
いった。

「頑張れよ。おつ、ラーメンが来た、じゃあな」

「ああ、じゃあな」

猪又が笑つた。はじめてみる猪又の笑顔に一瞬驚いたが、空腹の
せいで頭がうつまく回らない。そのまま部屋に入ると田村たちが待つ
ていてくれた。

「詳しい資料は、メールで送つてきてもうひょひょになつたから早く
食べよう。中央署にもさつき連絡したら、四時から捜査会議開くそ
うだ」

若林の報告が終わると、みんな一斉にラーメンを頬張りだした。
美味しい。点心のラーメンつてこんなに美味しかつたつけ。

「廊下で猪又と一緒にいたつたけど、何話してたんだ？」

ラーメンを食べながら若林が聞いてきた。

「事件の手掛かりを掴めたことを少し あとアイツ笑つたの初め
て見ましたよ。やっぱり同じ刑事部でも、扱う事件が違う課だから
緊張してたのかな」

「そうかもな、そういうや昨日の夜も大変だつたよ。修平かなり気に
入られてるな」

「彼は間宮さんと同じ属性の人間ですから」

ラーメンを食べ終わり、満足しながらそう言つと若林が笑い出し
た。隣で里見も笑つて見ると、みんなも同じように思

つてたのかもしない。田村もか？と思つて見ると無表情だつた。なんだ、そんな事もないのか？ああ、興味がないのか。

「若一つ！」

小林がパソコン画面を見ながら若林を呼んだ。K警察署から資料がきたらしい。慌てて若林がパソコンに駆け寄り、資料を人数分プリントアウトする。

資料によると、発見者の男性は現場は深夜だつたため見通しが悪く、犯人を見ていなかつた。被害者も意識が朦朧としていて、話すこともできなかつたようだ。凶器は、血のついた包丁が近くに落ちていた。

K警察署が、近辺に聞き込みにまわると十一時頃、男女の争う声が聞こえたらしい。被害者には恋人がいたが、日頃からよく喧嘩をしていた。アリバイのない恋人を、任意で数回事情聴取したが物証が出なかつたため、結局令状が取れなかつたようだ。現在、K警察署では通り魔の犯行として捜査をしている。

「発見者の野中武彦は疑われなかつたんだな。簡単な資料しかないや」

野中武彦、三十七歳、妻帯者。市立K中学校の数学教師。当曰は野球部の練習試合の後、雑務を片付けて退社。その帰宅途中に被害者を発見。倒れている被害者を見つけ、慌てて抱き起こし呼び掛けたが出血で意識が朦朧としていたため、すぐに119番通報をしたらしい。その野中の声に、近所の人が何人か家から出てきている。

「被害者とは面識もないし、野中には、犯罪歴もない。田じろの評判もよかつたみたいだしな」

資料を見ながら若林はそう言つが、何か引っ掛かる。

「恋人以外に容疑者候補は出なかつたんですね。だつたら普通はもう少し、第一発見者を調べるものだと思つんだけど」

「そうだな、担当刑事に聞いてみるか」

若林が電話をかけると、ちょうど担当刑事が応対したらしくすぐ理由がわかつた。なんでも、野中は被害者の傷口をタオルで押さえ

ながら、救急車が来るまでずっと被害者に呼び掛けていたらしい。その誠意ある対応に、近所の人たちも日々に彼を擁護したようだ。それに、もし犯人なら現場に留まつて救急車を呼ぶのもおかしい。そういう事からも彼は、容疑者候補には入らなかつたらしい。

「へえ、すごいな」

そんな人が教師なら、安心して子供を預けられそうだ。

「被害者の恋人は？」

田村が無愛想に若林に聞いた。 まださつきまでは普通だつたのに。

「今、Ｋ警察署が調べてくれてる。田村、どうかしたのか？」

「別に」

昨日と同じだ。この変わりよつの早さは何なんだ、一体！？

「野中さんもまだ中学校で教鞭とつてのかしら」

「じゃないか？でも今の教師は大変そうだな。 風当たりキツいし、仕事量も半端じやないし。しかも野球部の顧問だろ？帰宅が深夜になるのもわかるよな」

若林の言葉を聞いて、さつきから引っ掛けかかっていた事がまた頭をよぎる。田村を見ると田村も同じように何かを考えてるようだ。

「若さん、野中さんの所在も調べてもらつて下さい」

若林は俺の顔を一瞥し、何も聞かずにＫ警察署に電話をかけてくれた。里見は首をかしげながら、何故彼のことが気になるのかを聞いてきた。

「いえ、確証はないんです。ただ、その時その場所に彼と被害者がいたのは事実ですから。それに、刺されて間もないはずなのに、犯人を見ていのにも 気になります」

彼が怪しい。俺の中で、その思いがどんどん強くなつていて。でも凶器は？教師が何故包丁を持ち歩いていたんだ？見ず知らずの被害者と何があつた？ やつぱり第三者の真犯人がいるのか？

「えらく悩んでるな」

若林が、向かいの席からじつちを見ていた。

「若さん・・・なんかすつきりしないんですね」

「そんなに野中が気になるか」

「お前だけじゃないさ。早くＫ警察署から連絡ほしいな」

若林の言葉に、電話を見つめた。この電話で犯人がわかるかもしない。そう考えたら落ち着いて座つていられなくなってきた。俺つて 情けないな。ため息をつきながらコーヒーを淹れに席を立つた。四人分のコーヒーを淹れないと、猪又が声を掛けてきた。

「猪又も飲むか？」

「ありがと、なんかソワソワしてるな」

「そりなんだよ、電話一本でもうドッキドキだ。なんつーか、合格通知を待つ受験生の心境みたいな感じだ」

猪又と二人で笑つていると、若林も落ち着かないのかこっちにきて話に加わってきた。

「俺は好きな女の子からの電話を待つてる気分だね」

若林らしい例えだ。

少し落ち着きを取り戻し、コーヒーを里見と田村に配つてみると待つていた電話が鳴つた。俺はコーヒーを田村の頭に零しそうになりながら、素早く受話器をとつて電話にでた若林を見つめた。みんなが若林を見つめる中、本人は電話の相手の話に、時々相槌をうちながら聞いていた。

「あ、悪い・・・」れ置いとくぞ」

田村の机にコーヒーを置くと、席に座り電話が終わるのを待つた。

「わかりました。ありがとうございました、篠原に伝えておきます」

受話器を置くと、神妙な顔つきで俺たちを見回した。

電話を終えた若林が、俺たち今聞いた内容を話し出した。

「被害者の恋人だった斎藤啓介は、今もK市に住んでいた。第一発見者の野中は、K中学校を退職していて 今は県内の市立中央中学校で教師をしているそうだ。修平、ビンゴだ」

K警察署から担当刑事が、こっちに来ることになつたらしい。四時の捜査会議に出来るために、俺たちは中央警察署に向かつた。

「なんとかなりそうだな」

隣で運転する田村に向かつて声を掛けたが、そうだな、と素つ気ない返事だけが返つってきた。なんでだ? 昨日、元に戻つたのになんでまたおかしくなつてるんだよ。機械の故障か? 砂丘の砂がやばかつたか? T県から帰つて来るまでは普通だつたのに。帰つてきてからか? おかしくなつたのは。なんだ? 何かあつたか?!

「あ!」

俺の声に思わず田村が反応した。

「何だよ」

「あ、いや何でもない。悪い」

猪又だ。でも オンブラーージュで飲んだ時は普通だつたな。ん? その次の日からか? 思い出した! 俺が猪又に捜査一課に誘われた後だ。で? 何故おかしくなるんだ? 猪又が嫌いなのか? わからん やっぱり砂丘の砂が。そういう考えていらうちに、中央警察署に着いてしまつた。今は事件に集中しよう。

捜査本部に行くと、中央署の捜査員たちが全員揃つていた。若林が篠原に報告している間、俺たちは席につき会議が始まるのを待つ。会議では、K警察署と共同捜査本部が組まれることが報告され、野中を重要容疑者として身辺を捜査することが決つた。俺たちは、野中の顔写真をもとに、現場周辺の聞き込みにまわることになつた。

「飯食つて署に戻ろ! づか」

若林が提案したが、田村一人先に県警に戻ることになった。俺も断つて田村と一緒に帰ろうとしたが、若林に聞きたいことがあつたので、結局、若林と里見と俺で食べに行くことになった。

「たくさん食べていいで、割勘だしな」

事件が進展したことで、若林も機嫌がいい。注文を終え、料理を待つて いる今がチャンスだ。

「若さん、田村と猪又がコンビだつた時の話が聞きたいんですけど俺が そう切り出すと、若林と里見が顔を合わせた。

「田村と猪又？」

「はい、最近、猪又がどんなヤツか気になつてきたので、詳しく知りたいんです」

若林と里見の様子を伺つて いると、若林が口を開いた。

「猪又が、強行犯捜査係に異動になつて組んだのが田村なんだ」

最初からソリが合つて ないのは、一目瞭然だつた。田村の言うことを、いつも無視して勝手に無茶な行動をし、結局一ヶ月で機捜に異動して いつた そ うだ。他の三人も、似たよ うな感じだつたらしい。料理が運ばれてきたので、食べながら話を聞くことにした。若林オススメの店だけあつて、美味い。

「猪又さん、希望してやつと入れた刑事部だつたから異動する時、すごく悔しそうだつた」

タラコパスタを、フォークでいじりながら里見が遠慮気味にいつた。あまりにかわいい仕草なので、タラコパスタを頼めばよかつたと後悔した。

「でもまあ、また戻つてこれたんだし良かつたよな。またアイツ誘つて飲みに行こうな」

そう言いながら、若林はカルボナーラをフォークで器用に使いながら食べた。何をやつても様になる人だ。やはり、猪又は田村の話を聞き入れなかつたんだな。ぼんやりと初めて飲んだ日のことを思い出した。

「・・・・修平ー」

「ん、はい？」

「さつきから話しかけてるのにー。無視されてるかと思つて悲しかつたぞ」

「冗談つぽく言つて笑い、若林は食後のエスプレッソを美味しそうに飲んだ。

「すみません。何ですか？」

「野中のこと。なんで前の事件では、逃げずに現場に留まつたのかなつて話してたのに無視されたの」

恨めしそうにして若林が、俺に言つてきた。

「その手には、のりません。割勘でお願いします」

そんな俺とわざとらしく残念がる若林を見て、里見が笑つてゐる。

「二人仲いいよね　でも私も、なぜ逃げなかつたのか不思議に思つた」

「俺思うんですけど、K市の事件は理由はわかりませんが、野中が衝動的に被害者を刺したんだと思います」

我に返つて自分がしたことに驚き、慌てて救急車を呼ぶ。保身の為かどうかわからない。何も考えていなかつたかもしれない。彼は、被害者に声を掛け続けなんとか助けよつとした。その行為によつて、疑われなかつたんだと思う。

「でも怖くなつてK市を離れた　　か」

若林が神妙な顔つきで、俺を見た。

「はい。そして一年後　　。今度は計画的に犯行を犯していつた四件も」

俺の言葉に、若林も里見も悔しそうに顔を歪めた。

「必ず逮捕しような！行こう」

若林が力強い声で言つと、伝票を持つてレジへ向かつた。結局、若林が食事代を支払つた。いうことをスマートにできるから、この人はモテるのだろう。

県警に戻ると、K警察署から新たな資料がきていた。

「今、連絡を入れようとしてたとこだ。一年前の凶器についてだが、

野中の勤務していたK中学校に聞き込みに行つたところ、事件の一ヵ月前に野中は職場の同僚とバー・becueへ行つて了一ことがわかつた。その時に、包丁と食材を持つてきただのが野中だつた。しかもその包丁を忘れて帰り、後日同僚が、職場に持参して本人に渡したそうだ

ただその同僚は、凶器が野中の持つてきた包丁かどうかは、断言できなかつたらしい。一年も前のことだし、どこにでもある野菜切り包丁だ。残念だが仕方がない。彼が包丁を持って帰宅する機会があつたことが、わかつただけでもよしとしよう。

「明日で終わらせるつもりで、頑張ってくれ」

篠原は深くため息をつき、俺たちの顔を交互に見ながらそう言つた。

「今日行くか？」

隣の席に座つた田村を、いつものように誘つた。

「やめとく」

いつもの返事が返つてくると思っていたのに断られた。オンプログラミュに誘つて、断られたのは初めてだ。なんだか違和感を感じる。もしかして……原因は俺か？

店に入りカウンターのいつもの席に座る。大きく息を吐き、ここ数日のことを考えてみる。もしかしたら、田村の様子が変なのは俺のせいか？ あの後、何か俺の言動が気に触つたのか。俺……何やつたつけ？

「悩み」とですか？」

マスターの声に、我に返つた。前に置かれたジントニックのグラスの表面に、水滴が浮いていた。

「いや……ちょっと気になる事があつて」

マスターが、新しいジントニックを俺の前に置いた。

「すみません、折角作つてくれたのに」

マスターは、ニッコリほほ笑みながら頷いた。今日は謝つてばかりだ。俺が至らないからか。新しいジントニックを飲み、頬杖を

ついた。

そうだよな 田村だつていくら無表情でも感情はあるもんな。
俺調子にのりすぎたのかも。でも、昨日の夜は普通だつたよな。や
つぱり猪又か ? やつぱり猪又を嫌つてているだけか? でも猪又も
彼なりに真剣に事件に向き合つたはずだ。それを評価もしないで嫌
うヤツじやないだろ、アイツは 猪又は 田村のこと理解しよう
としてないけどな。

それか? もしかして田村は・・・傷ついていたのか? 今ま
で四人とも田村を理解せず、猪又のようく彼を逆恨みして異動して
いつた。アイツだつて真剣に事件解決に取り組んでいるのに。周り
の人間も、アイツがああいう性格だから気付かなかつただけで、実
は傷ついていたのかもしねない。

ひとつ思い出した。最初の挨拶でアイツ『一応よろしく』って言
つた。長く続かないと思ってたんだ。でも続いた・・半年。飯食つ
て、酒飲んで、冗談言い合つて 。ケンカもしたけど、それでも
続いてる。それが今回、猪又が来たことで 不安になつたのかお
前? 「コレ俺の考え方間違ひだつたら、めちゃめちゃ恥ずかしいぞ。
自惚れすぎか?

「お帰りですか?」

「 また来るかも」

照れ笑いして外に出ると、歩き出した。どうせまだいるんだろう、
アイツ。

刑事部の部屋に入ると、田村がちょうどコーヒーを淹れています
ころだつた。ガランとした広い部屋に、昨日のように一人しかいな
い。

「なんだ急に」

流石に驚いた様子の田村だつたが、すぐにいつもの無表情になつ
た。

「どうせ独りでいるんじやないかと思つてな。食うか?」
途中で買つてきたパンを渡すと、田村は受け取つた。

「野中は今頃何してるだろうな。新学期も始まって、生徒に保護者に気を使って」

自分のコーヒーを淹れながら、田村に話しかけた。

「嫌なら辞めればいい」

田村は、突き放すように言い放つた。

「ほんとだよな、相手に本気でぶつかって行つて、お互に信頼関係を築けていればストレスなんて溜まらないよな」

壁にもたれ掛かりながら、淹れたてのコーヒーを飲むといつもにして苦味が口の中に広がつた。田村は、黙つて買つてきたパンを口に運んだ。

「まあ、本気でぶつかつていっても相手に伝わらないことの方が多いけどな。でも、全員が全員、伝わらないわけじゃないさ。いるんだよ、中には信頼関係を築くことができるヤツだつて」

田村を見てニヤリと笑い、残りのコーヒーを飲み干した。

「 そうだな」

田村は、コーヒーカップを口元に運びながら呟いた。

「今の生徒は、生意気そだしなー、お前教師できるか?」

「無理だな。お前を相手するので手一杯だ」

「お・ま・え・ね。俺は中学生以下かつ！それに、それは俺のセリフだつづーの！」

いつもより早めの出勤をすると、若林がすでにいた。そういうえば、昨日も早くに出勤したな。この人もやっぱり眞面目なんだな。席に着くと、若林が話しかけてきた。

「修平、ジャンケンで何が好き？」

「え？ えーと、グー？」

訳も分からず答えると、若林はニッコリ笑いながら言った。

「俺パーが好きなんだよね。だから俺の勝ちね。コーヒー淹れて」

「何ですかそりや。普通に言つてくれれば淹れますよ、コーヒーくらい」

おかしくなつて笑いながら、コーヒーを淹れに立つた。でも、今日にも野中を追いつめる物証を見つけなければと張り詰めていた緊張が、少し楽になつた気がする。これが、この人のやり方なのかもしない。コーヒーを淹れていると篠原と田村も部屋に入つて来た。四人分のコーヒーを用意して、配つていると篠原の電話が鳴つた。また新たな事件か！？全員に緊張が走る中、篠原が電話をとる。俺たちは篠原の前に集まり電話が終わるのを待つた。出勤してきた里見も、その様子を見てすぐに俺たちのところに寄つてきた。受話器を置くと、篠原がため息をつきながらイスにもたれかかった。

「学校に聞き込みに言つた捜査班からだ。野中から朝、学校を休むと電話があつたそうだ。もしかしたらＫ中学の誰かが、警察が来たことを報せたのかもしない」

下手に動いて逃げられては困るので、至急、野中の家に張り込みがつくなつたそうだ。

「俺たちも行きます」

若林はそう言つと、俺たちを促して部屋から出て行く。Ｋ警察署から送つてもらつた、野中の顔写真を持つて現場の聞き込みにまわつたが、目撃者もなく収穫は得られなかつた。人に見られないよう

に、細心の注意をしていたのだろう。

「くそつ」

「落ち着け。どうせ逃げられん」

田村はいつもの無表情で言った。

「でもこのままじゃ」

「ヤツは凶器をまだ持っている。しかも警察が張り込んでいるんだ、捨てに行くことはできない。俺たちは、確実にヤツを追いつめる」

そうだ。凶器を持っているんだ、まだ。しかも手元に必ず置いてるはずだ。その時、俺の携帯が鳴った。電話は若林だった。

「ビデオ班が、野中を見つけたぞ」

第四現場付近のコンビニの防犯ビデオに、犯行時刻直前にタバコを買っている野中が写っていた。職場からも自宅からも離れているコンビニに、深夜行つた理由は何か。野中を参考人として署に呼んで話がきける。今、野中邸で張り込んでいた捜査員が、野中を任意で中央署まで運んでいるらしい。今頃、家宅捜査令状も申請しているはずだ。家から凶器が見つかれば逮捕できる。急いで中央署に戻ると、野中が自供していた。逃げられないと思つたのだろう。

その日のうちに、家宅捜査令状が発行され捜索すると、彼の仕事部屋のクローゼットから新聞紙に包まれた包丁が見つかった。押収したスニーカーからも、ルミノール反応が出た。事情聴取は連日行われ、S県の事件の全容も明らかになった。

深夜帰宅途中、前を歩いていた被害者が後ろを歩いていた野中を、変質者呼ばわりしてきて言い合いになつた。

「気持ち悪いんだよ」

吐き捨てるように言つて背中を向けた被害者に、カツとなつて運悪く持つていた包丁で背中を刺してしまつた。ロッカーに置きつ放しになつていた包丁を、忘れないように鞄に入れたのが運の尽きだつた。すぐに自分のしたことに気付き、救急車を呼んだが被害者は亡くなつてしまつた。自首する勇気がなく、いつ捕まるかとビクビ

クしながら毎日を過ごしていた。だが、結局捕まることはなかつた。それでも怖くてJ県を離れた。

○市で教師をやりながら、問題のある生徒や横暴な保護者、ことなかれ主義の上司などにストレスが限界に達した時、K市の事件を思い出した。被害者を刺した後の爽快感を。そして一人、二人と刺していく。もう罪悪感もない。どうせ警察には捕まらない。そんな気持ちが彼を犯行へと向かわせた。そして四人目の時は、コンビニでタバコを買つう余裕すらあつた。結局それが仇となつたのだけれど。

だが、昨日のK中学の同僚からの電話で、野中は驚愕した。

「今日、警察がきてお前のこと聞いていいだぞ」

そんな・・・警察が俺を怪しんでいる。足許から這い上がつてくる恐怖に怯えた。嫌だ。捕まりたくない！家族だつているんだ。嫌だ。捕まるのは・・・嫌だ！捕まるのは・・・怖い・・・。色々な事が頭を巡り結局学校を休んだ。凶器を捨てようにも、警察が見ているかもしれない。そう思うと捨てられなかつた。

そして　家のチャイムが鳴つた。
もう　おしまいだ。

「お疲れー」

ジョッキがぶつかる音が響いた。猪又行きつけの、あの居酒屋に若林と三人で来ている。田村は今頃オンブラーージュで一人で飲んでいるだろう。

「はーうまい美味しい！仕事終わりのビールは美味しい！」
ビールがまたキンキンに冷えていて、火照った体によく染み込んだ。

「修平は美味そうに酒飲むよな」

前に座った若林が、頬杖をつきながら感心している。

「これが唯一の楽しみですから」

ニッカリ笑つて、一杯目のビールを注文した。

「可哀相に 唯一の楽しみだなんて。若い男がいいの、それで？」

若さんが涙を拭く真似をしながら、からかってきた。

「ぐつ、いいんです。どうせ仕事が忙しくて、それどころじゃないんですから」

目の前の唐揚げを頬張りながら半分強がりを言つ。忙しくてそれどころじゃないのは確かだが、やっぱり彼女は欲しいぞ。

「えーもつたいいないな、若いうちは楽しまないと」

若林は大げさに残念がりながら、「二十代なんてあつという間だよ」としみじみと言つた。

「好きで一人でいるわけじゃないですよ」

「望月つて彼女いないんだ 以外だな」

隣に座つた猪又が、驚いている様子で呟いた。

「え・・・お前はいるの？」

「いるよ」

あつさりそう言われた。

「そんな…こんな不規則な仕事してて、何故彼女がつくれるん

だ！？」

頭を抱えて壁にもたれかかる俺に、若林と猪又が顔を見合わせ、ニヤニヤしながら聞いてきた。

「最後のデータはいつですか？修平君」

「・・・一年・・・前です」

「一年！？それはそれは、残念ですねえ」

まったく気持ちがこもってませんよ。ていうか、えらく楽しそうじゃないか、二人とも。

「あなたたちは鬼ですか？」

そんな俺の言葉を無視して、一人は楽しそうに聞いてきた。

「じゃあ、別れた理由は何ですかー？」

「・・・も、黙秘権行使します、鬼ーつー」

なんとか、終わらせることができました。
無事？終わらせることができてしまつとしてます。「犯罪論」あたり
が危ういですが・・・。

良ければ、感想、評価をいただければ今後の励みになります。

よろしくお願ひいたします。

読んでいただきて、ありがとうございました。

「望月も大分慣れたみたいだな」

煙草の煙を、ゆっくりとくゆらせながら篠原は言つ。白い煙は、吸い込まれるように天井を目指して昇つていく。そして、天井にたどり着く前に消えてしまった。

「田村とも、うまくやつているみたいだしね」

藤堂が、手前に置いてある刺身を箸でつまみながら話すと間宮が残念そうに唸つた。

「あれだけ肝が据わつてれば、うちに来てもやつてけるのにな」

三人行きつけの小料理屋『菊光』、高校の同級生が切り盛りしている店で、もう二十年近く通つてゐる。店内はカウンターと三つほどテーブル席があるくらいでこじんまりとしているが、店主は以前料亭の料理長をしていたこともあり、味は絶品だつた。三人は、いつもカウンターの席に座り昔話に花を咲かせながら酒を飲んだ。

「まーさん、望月はやらんぞ」

篠原は冷酒を一口飲み、赤い顔でニヤニヤしながら間宮に言つ。「篠さんとこ若いヤツたくさんいるんだから、一人くらいいいだろ。ケチくせーな」

「何言つてる、猫の手も欲しいほど人手不足だつての」

「じゃあ、うちの猫やるから望月くれ」

「いらねーよ」

間宮と篠原のやり取りを、店主と藤堂が苦笑しながら見ている。

これもいつもの風景だ。

「だいたいお前は昔から自分勝手だつたよな。体育大会の応援団の時だつて、お前が旗を破いたせいで、うちのクラスはビリになつた」

「お前だつて問題ばかり起こしてたじやねーか。文化祭のとき、校長の焼きそばにタバスコ入れて楽しんでたのは誰でしたっけ罵しり合う二人を横目に、ため息をつきながら見守る藤堂。一人

が起こす騒動の後始末は、いつも藤堂の役目だった。体育大会のときも文化祭のときも。

「藤さんも大変だな、二十年近くもコイツらの相手して」

店主が、茄子とえびそぼろ煮を出しながら藤堂に苦笑した。

「もう慣れたさ。まあ、もう少し大人になつてくれると助かるけどね」

藤堂が片肘つきながら店主に笑いかける。

「なんだよーこれが俺たちのいいとこだう?」

篠原と間宮が声を揃えてぼやいた。

「開き直るな」

藤堂は苦笑しながら一人の方に向き直る。

「お前ら、成長がないな」

店主が、あきれ果てて篠原と間宮を交互に見た。

「成長がないとか言つな。少年のままなんだよ、俺たちは。なつ」

「いや、どうかな」

間宮が、一緒にするなとも言つように顔をしかめた。

「一緒に、ほらあの夏の日の校舎裏

篠原が意地悪そうに言つと、慌てて間宮が「一緒に、仲間仲間！」と叫んだ。

「お前ら、よく藤さんに見放されなかつたよなあ」

店主が、二人を見ながらじみじみと言つた。

なんだよなんだよと愚痴をこぼす二人を、藤堂は穏やかな顔で見つめながら静かに目を閉じ低い声で呟いた。

「救われてるのは、俺の方だ」

ハツとしたように店の中が静まりかえり、店主は哀れむような目で藤堂を見た。篠原は真顔に戻り藤堂の肩に腕をまわした。

「水臭えな、俺たち親友だろ！」

間宮も力強く頷く。篠原の力のこもった声に、藤堂は伏し目がちに力なくほほ笑んだ。

「まあ、これからも色々迷惑かけるからな、よろしく！」

篠原がニヤリと笑いながら、バンバンと藤堂の背中を叩いた。

「痛い痛い、程々してくれよ」

いつもの笑顔で、篠原と間宮を見ながら背中をさする。店主はそんな藤堂の笑顔を見て、ほっとした表情をした。

「おう！」

結局、いつも通り閉店まで、篠原の武勇伝や間宮の失恋の話で盛り上がった。帰り道の違う藤堂と別れ、篠原と間宮は深夜の人通りのまばらな道を歩いていた。街路灯の弱弱しい明かりが道路を微かに照らしている。無言のまま歩く一人。まるで、話すのを拒むかのような沈黙が続いた。重苦しく押し掛かるその沈黙を、最初に破つたのは篠原だった。

「あれからもう二十三年か」

煙草に火をつけながら篠原は呟いた。煙草の白い煙は、星ひとつない空に同化していく。間宮はその煙が同化していくのを見上げながら、小さな声で呟いた。

「そうだな」

「いの道、真っ直ぐな」

田村は返事もせず、無表情でハンドルを握っている。篠原に頼まれて、〇市に住む遺族に遺留品を届けに行くことになつた俺たち。天気もよくドライブ日よりだ。篠原に礼を言いたくなる。

「部屋で働くのが勿体ないくらい、いい天気だな」

フロントガラスから見える雲一つない青空に見入つていると、急に大きな音がしたかと思うと、車のスピードが落ちていつた。何事かと田村を見ると、パンクだ、と落ち着いた声で言つた。え！？ ここ民家もガソリンスタンドもないんですけど。みごとに人つ子一人いない田舎道に取り残された俺たちの乗つた車。

「パンク修理剤があるから大丈夫だ」

田村が車から下り、修理に取り掛かつた。俺も手伝うために車から降り、携帯を取り出す。

「じゃあ篠原警部に連絡入れておくよ」

携帯を見ると圈外だつた ぐはつ、ここ圈外なの？ 結局、田村に篠原へ連絡を入れてもらつた。なぜ田村の携帯は繋がるんだ。同じ携帯会社なのに。軽くショックを受けていた間に、田村が修理を終わらせていた。おお、すまん。車をまた走らせる。

きれいに舗装された道は、ひたすらまつすぐ続いている。周りには、金色の稲穂が風になびきいて、幻想的な世界が目の前に広がつてゐる。こんなに稲穂が綺麗だとは思わなかつた。もう少し来るのが遅ければ、この金色の稲穂はすべて刈り取られ、刈り取られた後が無残に残る田んぼを見ることになつていただろう。それを考えると、少し得をした気分になつた。ふと気になつて、後部座席に置いてある遺留品の木箱に目を止めた。

「そりいえばこの遺留品の持ち主の件、結局事故で処理されたんだよな」

「みたいだな」

この木箱の持ち主だつた佐藤タケル、〇市に住む会社員。

中央区の美術館前のタクシー乗り場で、タクシーを待っていたところ、突然、車が彼に突っ込んだ。それだけならただの事故として処理されるのだが、事故を目撃していた多数の人間が、中央の車線にいた車が彼目掛けて突っ込んできたと証言した。運転手が故意に彼に突っ込んだとしか思えない状況だつたらしい。

殺人の疑いもあるということで俺たちも駆り出されそうになつたが、運転手と被害者の接点を調べても出てこず、運転手も興奮した様子で、急にハンドルが左に切れたと言つだけで埒が明かない。結局、事故扱いとなつた。

「よくわからない事故だつたよな」

「ただのハンドル操作ミスだろ」

やつと広い道に出て、景色を楽しみながらのんびり走つていると、前から来た対向車が急に俺たちの前に飛び出してきた。

ギャ ッ

すかさず田村が、ハンドルを左に切り衝突を切り抜け、すぐにハンドルを右に切り直して元の車線に戻つた。

「・・・ナ、ナイスだ田村」

かすれた声で、田村の瞬間芸を褒め称えた。シートベルトにしがみつきながら後ろを振り返ると、車は猛スピードで逃げていつた。心臓がバクバクいつている。叫んだときは、口から心臓が飛び出るかと思った。ホツとして、シートにもたれ掛かり、とりあえず命があることに感謝した。

さすがの田村も、大きく息をつきほつとした様子だつた。

「何だつたんだ、今の」

「ハンドルの操作ミスだろ。すごい顔してたな」

田村の言葉で、運転席と助手席に座つていた二人の男が目を見開

き、口を大きくあけ驚愕している顔を思い出した。俺もあんな顔だつたんだろう。怖かつた。

その後は何事もなく進むと、いくつか集落が見えてきた。突き当たりまで車を走らせると、目の前に莊厳な門構えの寺が現れた。こだけがまるで別の空間であるかのような佇まいの寺。被害者の実家である。車のエンジン音に気付いたのか、中から住職らしき年配の男性が出てきた。

「警察の方ですか？」

「はい、E県警の望月と言います。隣は田村です」

俺がそう言うと、男性は頷いて中に入るよう促した。二十畳ほどの客間に通され、向かいに座ると同時に、男性が慄懾に頭を下げた。

「わざわざ遠いところからお越しいただき、ありがとうございます。」

私は、タケルの父親の佐藤博嗣と申します」

遺族である彼に、こんな丁寧な対応をされてしまつと心苦しくなつてしまつ。毅然とはしているが、顔にはどこなく憂いを帯びた印象もある。遺留品の木箱を手渡すと、父親の手が少し震えていた。

「もしかしたら これが原因だつたのかもしれません」

父親が、木箱を見つめながら力ない声で呟いた。

「は？・・・・と、申しますと？」

「先日、檀家の人間を通して御払いをして欲しいと連絡を受けまして。ちょうど家に遊びにきていたタケルに、取りに行つてもらうよう頼んだんです」

父親の言葉に背筋が寒くなつた。

「まさか・・・それがコレデスカ？」

おそるおそる聞くと父親は頷いて、木箱の蓋を開けた。

中には、牡丹の花が描かれている真つ赤な着物を着た女の子の形が入つていた。

よりによつて人形。

その時、ここに来る時に起つた奇妙な出来事が頭の中に鮮明に

蘇つた。こんな時に能力を最大限に発揮しなくてもいいのに、俺の脳よ。

「あ、では・・・我々は、失礼します」

血の気が引く思いで、よろよろと立ち上ると、逃げるよつに車に乗り込み寺をあとにした。

「 なあ、さつきのつてさ、アレのせいじゃないか？」

「何が言いたいんだ？」

「だから、さつきのパンクと飛び出してきた車だよ！」

田村の落ち着いた態度に、苛立ちながら答えた。この恐怖を一人で抱えたくないんだよ！

「違うだろ」

無表情でハンドルを握りながら、平然と答える田村。頬もしいがお前の反応はおかしい。

「いやいや、どう考えたつてそつとしか考えられないだろ

「ただの人為的な事故だろ」

「コイツまだ言うか。

「お前、あれ程おかしな目に合つてるのに、何で落ち着いていられるんだよ！」

頭を抱えて叫ぶと隣りから、「おかしいか?」と返ってきた。

「ただのパンクにハンドル操作ミスだろ。お前だつて、あの人形を見るまでは普通にそう受け止めていただろ」

それは・・・そうだが・・。

「偶然起こつた出来事のその場に、あの人形があつただけさ」

そ・・・うなのかな?なんだか腑に落ちないでいる、窓の外の空がいつの間にか薄暗くなつていて不気味な感じがした。まるで、空から邪悪なものが降り立つてくる前触れのような静けさを漂わせている。すぐ横の林に目を移すと、光の届かない木々の隙間からは漆黒の闇が覗いていた。鳥の鳴き声さえも不気味に聞こえてくる。気持ち次第で、感じ方も随分変わるんだな 。

「 そうだよな。今時、呪いなんて非科学的な事なんてないよな」

湧き上がる恐怖を振り払うかのよし、明るい声を出して笑った。
その後は、何事もなく県警まで戻ることができた。やっぱりただの
偶然だつたんだ。

翌日、田村が席に着くなり無表情で「車が壊れた」と言つた。
ひ つ、やっぱり呪い！？

episode 16 - 1 錯乱

(現在) (前書き)

今回、全20話（一巻）を予定しているので、少し長めのお話になります。

でせぬだけ早めに更新してこべつもつですの、よろしくお願いします。

何で美咲が……こんな……どうして……？

俺はまた暴れたのか？

・・・俺が・・・美咲を・・・

殺したんだ・・・

半狂乱で、包丁を振り回す彼を取り押されたのは藤堂だった。あんな藤堂の顔を見たのは初めてだ。

「十五時十分、現行犯逮捕だ」

落ち着いた声で、藤堂が言った。

「藤さんお疲れ。あとは所轄署に任せよう」

篠原がそう言うと、俺たちに彼を連れていくよう指令をした。一時、騒然となつた商店街。彼は、包丁を振り回しながら夕方の人通りの多いこの商店街に乱入したのだ。俺たちは所轄署から帰り道、この騒ぎに巻き込まれた。

放心している彼を、連絡して呼んだ所轄である南署の警察車に乗せようとした時、彼が小さな声で呟いた。

「俺が殺したんだ・・・俺が」

「何！？」

慌てて彼に問い合わせても、ただ同じ言葉を繰り返すだけだった。

田村も険しい顔をして、彼をじっと見ている。

「どうした望月」

車の前で固まっている俺たちに、篠原が声を掛けてきた。

「篠原警部！ちょっと来てください！」

彼の言葉を聞いて、篠原の顔が強張った。

「「コイツ誰かを殺つた後なのか、くそつ。身分証を持つてないか確認しろ」

彼のジャケットの内ポケットを探ると、財布があり、その中に学生証が入っていた。

「中部経済大学の2回生で、田崎学。大学に連絡取ります」携帯を取り出し、学生証に明記されている電話番号に電話をする。学校から聞いた住所に行つてみると、部屋の中央で腹部を真っ赤に染めた若い女性が倒れていた。

「！まだ、息があるぞ！救急車を呼べ、急げ！」

篠原は、腹部の止血をしながら叫んだ。

俺たちは、車の中で田崎の隣に座り待機していた。怯えている田崎は、唇を震わせ肩を抱いて座つている。

「望月、彼を連れて来て」

アパートの階段の踊り場から藤堂が叫んだ。顔を真っ青にして震えている田崎を車から降ろし、部屋の前まで連れて来ると田崎は急に暴れだした。

「嫌だ、入りたくない！「ココには入りたくない！」

暴れる田崎を、俺と田村で押さえていた藤堂がドアを勢いよく開けた。部屋では、篠原が女性の傷口の止血をしているところだった。

「まだ、息がある」

藤堂が静かにそう言った。

「あああああ！　み、美咲！」

女性の名前を叫び、部屋の中へ靴を履いたまま駆け込んでいった。

「・・・どうして・・・こんな・・・ごめん・・・美咲」

捜査員を押しのけ、横たわる女性にしがみついて泣き崩れる田崎。耳を澄ませると、救急車のサイレンが遠くから聞こえてきた。サイレンの音が次第に大きくなつていて、藤堂が、田崎に近寄り彼の腕を掴んで立たせた。

「彼を車に

静かな、しかしどことなくいつもと違う声で藤堂は俺たちに囁いた。

「美咲を助けて！お願いだ・・・美咲を・・・誰か、助けて・・・」

田崎は、車の中で震える肩を抱きながら声を押し殺して泣いていた。

救急車は到着するとすぐに彼女を搬送し、病院へ向けサイレンを

鳴らしながら走り去った。

ガタソニッ

後ろで、イスの倒れる音が聞こえた。振り返ると同時に、担任の声が後頭部に聞こえてきた。

「どうした田崎、まだ授業中だぞ」

担任の佐々木がそう言つと、ドアのノブに手を掛けていた田崎と呼ばれた男子生徒が「つまらないから帰る」と言つて教室から出ていった。教室中が騒然とする。

なんだ アイツ。気になりながらも、前に向き直ると担任はため息をついて授業を続けた。ああ、追いかけないんだ。

結局、そのまま何事もなかつたかのように授業は続けられた。

「美山一、さつきは、驚いたなあ」

一年で同じクラスだつた真山が、授業が終わると同時に後ろを向いて話しかけてきた。まだ、席替えをしていないので出席番号順の席なのだ。だから去年同様、俺の前に真山が当たり前のようになっている。愛嬌のある顔で、気さくで誰とでもすぐ仲良くなることができる特技を持つ彼は、クラス一番のお調子者だ。

「ていうか、誰なの、彼？」

「中学に入つてからほとんど学校来てないからな、アイツ。俺、小学校一緒でさ。田崎つて言つんだ。田崎学」

「へえ、そなんだ。でも、追いかけない佐々木もどつよ クラス委員長になつていた（立候補はしていない）俺は、田崎のことが一応気になつていた。

「ほつとけよ。担任も相手するのが面倒なんだろ、アイツ暴れるとかなりヤバイよ」

余計気になるじやないか。

それよりさー、と真山がクラスの女子について話している間も、

田崎のことがなんとなく頭から離れなかつた。根っからの委員長体質なのかな、俺。

「で、誰がいい？」

真山の声で我に返り、少し考えてから「そう言つお前は誰がいいんだ？」と切り返した。真山は、照れくさそうに笑つて校内でも人気の高い女子生徒の名前を挙げた。

「また無謀なところなあ」

「無謀とか言うな。だつてめちゃめちゃ可愛いだろ？ 同じクラスなんだし、チャンスだと思わね？」

机に身を乗り出しながら興奮氣味に真山が言つた。

「チャンスねえ・・・・ま、頑張つて」

頬杖をつきながら片手をあげ、ホールを送つた。

「心こもつてねえなあ、まあ見てろつて」

そう言つと真山は、彼女のいるグループのところに行つてしまつた。

ため息をつき窓の外を見ると、校庭にはどこかのクラスの女子が次の授業で使うのだろう、ハードルの準備をしていた。

俺は、あといくつのハードルを越えなくてはいけないんだろう。学校を卒業しても、企業に入りあくせく働き、人間関係に気を使い、出世争いもして。今とたいして変わらない生活をいつまで続ければいいんだろう。別に今の生活が嫌だとは思つていない。友達だつているし、勉強もそれなりに楽しい。

でも・・・なんだか虚しいと思うのは、なぜだろう。

ハードルをぼんやりと見ながら、田崎の表情のない顔が浮かんだ。

この事件は所轄署に引き継がれ、田崎は、その場で現行犯逮捕された。

被害者は、田崎の恋人の佐々木美咲、二十三歳、看護師。二人は、四年ほど前から付き合っていた。彼女は今、職場である大学病院の集中治療室に入っている。危険な状態で、意識は戻っていない。

調べでは、田崎には精神科への通院歴があった。学生時代にも突然暴れだしたり、刃物を振り回したりしていたそ�だが、薬を服用するようになつてからは症状は治まつていたらしい。

薬は現在も処方されている。

所轄では、当日、田崎が薬を服用していたか調べるため、採血をして科捜研（＝科学捜査研究所）に鑑定にだした。田崎は、被害者とその大学病院で知り合つたようだ。

イスにもたれかかり、時計を見るともう十九時だ。といつても今田は当番なので、朝まで田村と一緒になのだが。

「じゃあ望月たち頑張れよー」

そう言つと篠原たちが帰つていつた。いいな、管理職は。当番がなくて。まあ、俺たちの年齢の時、散々やつただろうけど。

「修平ー、デパ地下の弁当買つてきたぞ」

外出先から帰つてきた若林が、そう言つて弁当を二つ渡してきた。

「若さーん！俺、若さんに一生ついてきますー」

祈るポーズをして若林に感謝した。この心遣いが嬉しいではないか。

「大袈裟だな、修平は」

若林と里見が笑つた。一人はすぐに席に着き、仕事に取り掛かつた。その後も時間が過ぎるにつれ、一人また一人と人がいなくなり、とうとう田村と一人だけになつた。

「若さんからもらつた弁当食おーぜ」

蓋を開けると、色とりどりのおかずの入つた松花堂弁当だった。

「おお、美味そー！」

弁当を頬張りながら、田崎のことが頭をよぎる。田村を見ると、黙々と弁当を頬張つている。

「お前はどう思つ? 田崎のこと」

気になつて田村に聞いてみた。

『俺が殺してしまつたんだ』

彼の哀しげな声が頭からこびりついて離れない。

食後のコーヒーを淹れながら田村が言つた。

「事情聴取でも、錯乱状態で詳しい話ができるといならしい。犯行

時のことは一切覚えてないようだ」

「記憶がなくなるほど、彼らに何が起つたのか?

「あとは、彼女の意識が戻るのを待つしかないか

「そうだな。危ないらしいけど

「コーヒーを受け取り、口元まで持つてきたところで手が止まつた。彼女が亡くなれば、傷害事件から殺人事件に切り替わる。今の田崎の状況では。

「裁判で心神喪失状態が認められれば、下手すれば 不起訴か」

田村が俺の考えていたことを口にした。

「確かに今日、検察に送致されたんだよな」

勾留請求が通つたとして、明日から十日、延長できたとして二十日しか勾留できない。それまでに、彼女が亡くなれば 事情聴取は今よりももっと厳しいものになるだろう。田崎の精神は持つだろうか? もうすでに、彼の脆弱な精神は限界にきている。いつ壊れてもおかしくない状態じやないのか。

「傷害か、殺人か、所轄は大変だな

「コーヒーを飲みながら田村が呟いた。

会話がそこで途切れ、部屋は静寂に包まれた。ふと窓の外から聞こえる音が気になつて、覗いてみるといつの間にか雨が降つていた。

「雨だ」

「コーヒーを片手に窓に近寄る。窓の下の道路には、ワイパーを忙しく動かしながら走る車が何台も行き交つてゐる。家路に向かう車やこれからどこかに出かける車だろう。

「そういえば　お前車いつ来るんだ？」

「来週末だ」

結局、あの後、新しい車を買つたようだ。しかも、コイツ御祓いにも行つてないらしい。何かあつても知らねーからな。

「まさか助手席の一一番乗りは俺か？　あはは、笑えねえ話だな」

想像するだけで笑いが込み上げてくる。俺より先に彼女は作らせん。

「笑つてるじゃねーか。これからは、お前の車出せや

田村がふて腐れながら言つた。

「イヤだ」

キッパリと言つてやつた。彼女を助手席に乗せるまでは　。じやなきや　笑えない。

あれから一週間、田崎は学校に一度も来なかつた。いつものように本を読んでいると、真山が小声で話しかけてきた。

「おい、美山。昨日、田崎が捕まつたぞ」

「は？」

驚いて、思わず読んでいた本を床に落としてしまつた。真山が人差し指を唇にあてて、しー！と慌てて辺りを見回した。お前が変なこと言うからだろ。

「俺ん家、田崎の家の近所なんだ。昨日、田崎ん家にパトカー来てたんだよ。なんかさ、家に火つけようとしたらしくてさあ」

「迷惑だよなー」とぼやく真山の声が遠のいていく。

家に火を？

なんでそんなことを？ 何を考えているのか想像ができない。そんなヤツが、クラスメイトなんて。考えただけで、背筋が寒くなつた。

「トル、ストイ？クロイツェル・ソナタ？なんだそりや？」

真山が落とした本を拾い上げ、本の著者名と題名を読み上げた。

「読みたかつたら貸すぞ」

「うへえ、遠慮しどくよ」

「だろうな。もし読んだとしても、また、うへえ、と言いそうだ。始業のチャイムが鳴り、教師が教室に入ってきた。教師の流暢な英語も頭の上をするりと流れていつて耳に届かない。ずっと田崎のことばかり考えていた。

下手をすれば、家族全員が死んでいたかもしね。なぜ、そんなことができるんだ？

家族が死んでもいいと思つたのか？

家族を殺したいと思つたのか？

そう思つたとき、氣分が悪くなり吐き氣がした。

授業が終わり、真山と話していると担任の佐々木が教室に来て、俺を職員室まで呼びだした。職員室へ行くと、佐々木は申し訳なさそうに話を切り出した。

「美山、悪いが田崎の家にプリントを届けてくれないか？」

「え・・・」

顔を強張らせ言葉も出ない俺に佐々木は「今日どうしても外せない研修会があつて行けないんだ」と言つてプリントを差し出してきた。この人は、田崎が昨日何をしたか知らないのか？！

「でも、家も離れますし」

なんとか断ろうとするが、佐々木もなかなか折れない。

「田崎の母親に渡すだけでいい。頼む、委員長だろ」

最悪だ。教頭や学年主任の先生に頼めばいいではないか。
「・・・わかりました」

ため息をついてプリントを受け取る。教室の前に戻ると、部屋からはクラスメイトたちの楽しそうな笑い声が聞こえてきた。なんで、俺が。席につき、プリントを鞄の中へ押し込んだ。すぐ渡して帰ればいいんだ。母親に渡せばいいんだし、たいしたことないさ。

真山たちの中身のない話に加わり、氣を紛らわせたりした。クラスの誰と誰が付き合つているだの、誰々が近所の本屋で万引きしただのつまらない話だつたが、それでも家に火を放つて家族を殺そうとしたヤツの話よりはまだマシだつた。

だが下校時間が迫つてくると、急に胸が締め付けられるように苦しくなり、手が震えた。

やつと家に帰れる。ソファで仮眠を取つたせいで体が痛い。今日は、家でゆっくり休もう。早くも田村が助手席に乗るという笑えない状態になつたが、もういい。いつ彼女ができるかわからんしな。投げやりになりながら、田村を乗せ地上に上ると気持ちいいほど真っ青な空が一面に広がつていた。

「おお。休日にぴったりの天気だな」

空を見上げながら声を上げると、隣から「お龍ど」かへ出かけるのか? という容赦ない問いかけをされた。

「いや」

家で寝るつもりだ。

「落ち込むよつなこと聞くなよ。せつかへ送つてやるつとしてるのよ」

ハンドルを握りながら抗議すると、気持ちのまつたくもつてしない返事が返ってきた。

「せりやじうも」

「コイツ 乗車拒否してやるべ。車を走らせていると、ちゅうど田崎が暴れていた商店街が見えてきた。気になつて、アパートの方へ車を走らせると、田崎のアパートの前に男が立つていた。おや? と思い車を止めると、田村も気付いたらしく車から降りて男の元へ歩いて行つた。

「すみません、田崎さんのお知り合いの方ですか?」

田村の声に振り向いた男は、凜とした涼しい目元が印象的で、年は田崎と同じくらいの若者だった。

「あ、警察の」

田村を見て、青年は呟いた。

「はい、県警の田村といいます」

それを受けたのに田村は答えた。非番で警察手帳持つてないの

に。若者は、その言葉だけで安心したのか（そんなすぐ信じちゃダメだ！）自分の身分を明かした。

「俺、学の友人の美山といいます」

ほんとダメだよ。今回は本物の警官だけじさ、きちんと確認しないと。ため息をつきながら、車を降りて一人のもとへ向かう。美山は、俺を見ておずおずと会釈した。

「何をされていたんですか？」

田村が美山に聞いた。

「いえ・・・なんか、信じられなくて。家に来れば・・・一人が笑つて迎えてくれるんじゃないかと思って・・・でも、やっぱり現実なんですね・・・」

苦しげな顔で美山は答えた。

「大学のご友人ですか？」

俺の質問に美山は、ゆっくりと顔を上げて「中学からの親友です」と答えた。田崎に親友がいたのか。

「学とは、中学から大学までずっと一緒にでした。美咲と付き合いつ」とになつた時も一番に教えてくれたんです」

美山が寂しそうに話してくれた。

「今回の事件で、何か思い当たる事はありませんか？」

美山は首を横に振るだけだった。
「検討もつきません。本当に仲が良かつたですから　あの、俺もう行かないと」

田村は、飽きたのか何も話さなくなつていて。おい「カラッ！――

「引き止めてしまつてすみませんでした」

美山と別れ、車に戻る。エンジンをかけながら、美山の寂しげな後ろ姿を見ていた。

「可哀相に、相当ショックだつたんだな」

隣から返事が返つてこない。まさか寝たのか！？隣を見ると、田村は、じつと美山の背中を見据えていた。

「なんだよ、返事くらいしろよな」

アクセルを踏み、車を発進させた。

「ああ、悪い」

そう言つと、腕組みをして窓の外に田を向けた。

「何か気になることでもあるのか？さつきの彼に「俺が運転しながら言つと」 ああ、ちよつとな」と歯切れの悪い返事が返ってきた。

「なんだよ。気になる事があるなら言えよ」

田村の方に顔を向けると、田村が前を指差した。

「前見て運転しろ。まだ死にたくないからな」

くそー、お前が悪いんだろ！前に向き直り運転に集中する。

「腹減つたな」

俺の苛つきを無視するように、田村が呑気に言つた。でも確かに腹は減つた。周りをキョロキョロと見ると、ちよつど喫茶店が目にに入った。

「あそこで、モーニングでも食つか」

車を喫茶店の駐車場に止め、店内に入るとコーヒーの香りが空きつ腹を刺激した。

机には、モーニングセットが並び俺たちは黙々とそれらを食べた。腹が一杯になつたところで、さつきのことを田村に聞いてみる。

「で？気になることつてなんだよ」

「コーヒーを飲んでいた田村が、顔をしかめた。

「お前もしつこいね」

「刑事だからな」

田村はため息をついて、観念したように話しだした。

「あの美山って男さ 僕たちのこと知つてたよな」

「そつか？事件があつた後なんだから話かけてくる人は皆、刑事だと思つたんじやねーの？」

「コーヒーを飲みながら、さつきの美山のことを思つ出す。

「マスクミ関係者かもしけないだろ？」

まあ、確かに。俺は、頷いた。

「でも彼は、手帳も見せてないのに俺たちのことを疑いもせぬ自分の身分を明かした」

田村は、コーヒー カップをテーブルに置いた。

「じゃあ、どこで俺たちが警官だと彼は知ったんだ？」

あつ！

「た、田崎をアパートまで連行した時　か？」

俺は、持っていたコーヒー カップを危うく落としそうになつた。

「彼はいたんじゃないのか、アパートの近くに」

優雅に桜の花びらが舞い散る中、重い足取りで佐々木の描いた地図を見ながら田崎の家を田指す。いつそ家が見つからなければいいのに。

思いとは裏腹に、地図どおりの場所にひっそりと佇む一階建ての白壁の家があった。表札には『田崎』とゴシック体で書かれていた。着いてしまった。

ドキドキしながら、インター ホンを鳴らす。応答がない。いないのか。ホッとして、郵便ポストにプリントを入れようとしたとき、庭に誰かがうっくまつているのが見えた。

誰だ？目を凝らしてよく見ると田崎だつた。

捕まつたんじゃなかつたのか。

泣いて いるのか？

気になつて、玄関の門を開け田崎の方へ近づいていった。気配を感じたのか、田崎が振り向いた。鼻筋の通つた整つた顔立ちをしているが、目だけが強く闇い光を放つていて。まるで、野生の獣のような目だつた。その目が赤く腫れています。

「誰？」

乱暴に涙を手で拭つた田崎は、身構えながら聞いてきた。

「あ、俺クラスメイトの美山です。担任の佐々木先生に頼まれてプリント持つてきたんだ」

田を細め、田崎は立ち上がつた。何も言わずに、そのまま背を向けて家に入つうとする。

「お、おい、・・・大丈夫か？」

声を掛けると、田崎が凄みのある獣の目で俺を睨み「失せろ」と吐き捨てて家に入つていった。

あまりの迫力に何も言えないまま立ち尽くし、結局プリントを郵便ポストに入れて家に帰ることにした。

あれが 田崎。

想像していた感じと少し違っていた。もっと、人間臭いヤツだと思っていた。自己中心的で自意識過剰、卑怯で狡猾な人間。世の中に溢れているそんな人間の中の一人だと。

でも、今日の彼の姿は まるで傷ついた獣そのものだった。

震えながらうずくまり、必死に何かから自分を守ろうとしているように見えた。よくわからない。今日は、たまたまそうだったのかもしれない。まだ、よくわからない。遠くに見える田崎の家を振り返り、まだ泣いているのだろうか と呟いた。

「でも、それじゃあどうしてそのことを言わないんだ?」
俺の問いかけに、田村が冷めた目で思いがけないことを言った。
「もしかしたら、現場を目撃してたのかもな」
「はあ? ! それなら尙更、どうして警察に言わないんだよ? !」
勢いよくテーブル越しに身を乗り出したので、コーヒーがカップから零れそうになつた。

「あ、悪い」

座り直してテーブルに頬杖をつき、苦しげな彼の顔を思い出す。
「なあ、もしかしたら 親友だから言えないでいるのかな」
「バカな。そんな理由で隠してどうする」

田村が呆れながらコーヒーを手に取つた。

「ショックだつたのかも、田崎が被害者を刺した現場を目撲して。
それに、止められなかつた自分に悔やんでるのかもしない」
田村が俺を一瞥し、ため息をついた。

「お前は やつぱり刑事にむいてないな」

また言つか、コイツは。

「あんな、同情してるわけじゃないぞ。それに それが事実なら、そこで自首させるのが本当の親友だと俺は思うし」

田村が鼻を鳴らした。

「理想論だな」

「ひね 捻くれてるな、お前。だって、お前が何か悪いことしたら俺自首すすめるよ?」

頬杖をつきながら俺が言つと、田村は一瞬驚いた顔をしたが、すぐいつもの無表情になつた。

「するか!」

「何だよ、たとえ話だろ」

「縁起でもないとえ話をするな。行くぞ」

田村は、伝票を握るとレジまで早足で歩いて行った。車に乗り込むと、「中部経済大学まで行ってくれ」と偉そうに言つ。俺はタクシーか？！

今日も、佐々木はプリントを届ける役を俺に押し付けた。これが、佐々木の手だったのかもしれない。佐々木に不信感を抱きつつ、教室に帰ると真山が「ハムテルって知ってるか?」といきなり聞いてきた。

「ハムテル? 知らん」

「本だよ、本」

本つて。。。俺は、図書館の司書でもないし、すべての本の把握をしてるわけがないだろ。不機嫌な俺の顔を見て、真山が慌てて補足した。

「なんかさ、片思いの果てに拳銃で自殺しちゃうんだよ」

「ああ、ハムテルってことは『若きウヘルテルの悩み』だな。なんだよ、ハムテルって」

呆れていると「そう、ウエルテル。それそれ。やっぱり知つてた」と真山は嬉しそうにまくし立て「貸して」と右手を差し出して言った。

「お前が読むのか?」

「うん」

「ふーん、俺持つてないよ」

「何だよ! 先に言えよ」

真山が、がっくりと肩を落とした。そのまま、落ち込むことじやないだろ。

「図書室で借りればいいだる」

俺の言葉に、真山が勢いよく顔を上げた。

「そうじやん! つて図書室つてどこだっけ?」

「お前を。。。どこで、ゲーテなんて知つたんだ?」

「ゲーテ? 違うよ。ウェルテルだつて」

「だから『若きウヘルテルの悩み』はゲーテが書いたんだよ

頭が痛くなってきた。額を押さえため息をつく俺に真山は「いや、畠山が読んでたんだよ」と、はにかみながら言った。まだ、諦めてなかつたのか。

「あつそ。でも、お前向きじゃないぞ。アレ

「いいんだよ。話ができれば」

「自分の好きな本の方が話は続くと思つけどな、いいけど。図書室は、別館の一階だ」

えー自分の好きな本つて漫画しか読まねーし、とぼやく真山を無視してプリントを鞄の中に仕舞い込んだ。

「じゃあ、アレ貸して。この前読んでた、スツトロゾ・コイの本」

「お前わざと言つてるだろ。それに アレはもつとお前向きじゃない。明日なんか持つてきてやるよ」

「頼むー」

ほんと、口イツ憎めないヤツだな。おかしくなつて笑つていると、チャイムが鳴り授業が始まる。授業中、ロッテへの叶わぬ恋に絶望して拳銃自殺するウェルテルを思い出していた。俺は、あの話は好きではない。たかが恋に、唯一無二である命を絶つ主人公に怒りを通り越し呆れていた。彼は馬鹿だ、と。煩悶する主人公に結局最後まで感情移入することなく読み終わってしまった。だから、本は持つていない。

学校も終わり、田崎の家にプリントを届けに行く。また郵便ボストンに入れておけばいいよな。

田崎の家の前まで来ると、母親らしきやつれた女性が家から出てきた。

「あの、すみません

俺の呼び掛けに一瞬体がびくりと反応した。驚いた顔で俺を見た後、すぐに女性は笑顔で応対してくれた。彼女は、やはり田崎の母親だった。

「僕、田崎くんのクラスメイトの美山といいます。佐々木先生に頼

まれてプリントを持つ てきました」

わざわざありがとう、と言つて丁寧にプリントを受け取つた。

「失礼します」

会釈をして、一階のカーテンの引かれた窓をチラリと見てから田崎の家を離れた。あの母親大分やつれていた。

田崎は家でどんな風に過ごしているのだろう

。

「彼に話を聞くのか？非番でしかも管轄外なのに？」

「休みたかったら、お前は帰れ」

田村は、窓の外を見ながら言い放つた。俺の車だつての。
「じゃなくて！管轄外だつて言つてはいるの！俺は。手帳ないしどうすんだよ。彼が現場にいたつていう証拠だつてないんだぞ」

運転に集中しながら田村を諭すが、ヤツは完全無視だ。お前な。お前がそういう態度を取るなら俺だつて考えがあるぞ。

「 おい！」

田村が気付いたのか、俺の方を振り向いた。車は、県警へと向かっている。

「 県警行つて、篠原警部に報告が先だ。手帳もないのに、うるつくわけにはいかないんだから」

横目で田村を睨みながら言つと、田村はため息をつき、また窓の外に顔を向けた。勝つた。

車を駐車場に止め、刑事部へ向かつた。その間も田村は無言だ。お前は子供か。篠原に、美山が現場にいた可能性があることを報告すると、所轄に連絡を取つてくれた。

「お前ら、仕事していくか？」

電話を終えると、篠原がニヤニヤ笑いながら言つてきた。若林たちも苦笑している。

「 帰ります」

車に戻りながら、田村が「余計な事を」と舌打ちした。何を言つ。所轄の刑事に見つかったらそれこそ大目玉だ。これは、俺たちの仕事じゃないんだからな。

「行くぞ」

ふて腐れた田村を車に押し込み、アクセルを踏んだ。運転しながらも、やはり気になつて美山のことが頭から離れない。田村を見る

と、いつも同じく窓の外を見ながら何やら思索に耽っている。危うく、大学まで車を走らせるところだった。

漫画好きの真山に『トム・ソーヤーの冒険』『ハックルベリー・フィンの冒険』『ドン・キホーテ』の本と『車輪の下』と、同じベッセの作品で『春の嵐』も一緒に渡した。

ベッセは俺の好きな作家の一人だ。

「人は自分だけのために生きるより、他人のために生きる場合のほうが、満足が大きい」

『春の嵐』のこの件の部分にとても感銘を受けた。やっぱり、俺は委員長体质なんだな、と改めて思つたりもした。

始め、五冊の本を机に置いたときの真山は口には出さなかつたが、うへえ、という顔をした。でも、次の日、『トム・ソーヤーの冒険』を一気に読んだらしく興奮して話してきた。

「すっげー面白かった! ドッキドキで一気に読んじました」
そんな真山を見て、本を持ってきた甲斐があつたと俺も喜んだ。
畠山とも、本の話をして少しづつ仲良くなっているようだ。よかつたではないか。

俺はと語つと、その後も田崎の家へプリントを届け続けていた。最近は、母親が応対してくれるのでも、初めほど苦でもなくなつていった。あれ以来、田崎の姿は見ていない。アレは何だったのか。

「佐々木のヤツも最悪だよな　　お前に面倒押し付けてさ
真山が、お使い役の俺に同情する。

「いいさ、別に」

頬肘をつき、こつものように本を読みながら言つた。

「気をつけろよ。言わなかつたけどさ、アイツ包丁で母親に切り付けたりして暴れるらしいから」

声のトーンを落とし、真山が表情を曇らせながら言つた。

「 本当か、それ？」

本から真山に視線を移し、言葉を失つた。真山は、無言で頷く。

家庭内暴力。

だから、あの母親あんなにやつれていたのか。

「 今日も行くんだろ？」

真山を見ながら頷いた。

「 俺が届けてやつてもいいけど、部活と塾があるからな 悪い」

「 ありがとな、大丈夫さ。渡してすぐ帰るだけだしさ」「すまなさそうにしている真山に、ありがたく思いながら笑顔で答えた。

学校が終わり、いつものように田崎の家へ向かう。そしていつものように、母親にプリントを渡せば終わりだ。そう思っていた。しかし、家へ行つてみると様子がいつもと違つていた。

一階の窓ガラスが割れていて、庭に物が散乱している。インター ホンを押しても、応答がなかつた。嫌な予感がして玄関のドアを開け中に入ると、廊下はガラスの破片や本、服が散乱していて足の踏み場もなかつた。

何があつたんだ 。

一階から、呻き声が聞こえる。まさか 。真山に聞いた話が頭を過ぎつた。家庭内暴力。慌てて階段を駆け上ると、田崎が床に突つ伏していた。母親と妹の姿は見えない。ほつとして田崎の背中を見つめた。

また 泣いているのか？

「 た、田崎 」

声をかけると、田崎がすごい勢いで体を起こした。

「何で　　お前がここにいる」

涙で濡れた顔で、俺を睨んだ。あの獣の田だ。闇く鋭い目。田崎はゆっくりと立ち上がり、俺に近付いてくる。

まざい、逃げなきや。

そう思つが、恐怖で足が思つよつに動かない。

「帰れつ！」

思い切り突き飛ばされ、左肩を床に強く打ち付けた。

「つてえ」

田崎は俺の胸ぐらを掴み、壁に押し当てる。

「ぐつ」

壁に思い切り頭をぶつけ、激痛が走る。

「お前だつて、お前らだつてみんな　　いらないと思つてるんだろ！？」

田崎は、涙を流しながら叫んだ。悲痛な叫び。哀しそうに顔を歪めながら、大粒の涙を流し続けている。

「俺に　　関わるな！出て行け！」

田崎は俺を放すと、そのまま奥の部屋へ入つていった。

田村を寮の前で降ろし、自分の家に帰つて来てもなかなか眠る気になれなかつた。どうしたものか。溜まつた洗濯物を洗濯機に放り込み、スタートボタンを押した。水が流れ出す音が聞こえる。冷蔵庫からビールを取り出し、ソファに腰掛ける。今じろ、美山は所轄の刑事に話を聞かれているだらう。

もし現場を見たのなら、自分の見たことすべてを話すんだ。それは、親友への裏切りでも何でもない。田崎のためにも話してほしい。「ゴウンゴウン、ゴウンゴウンと一定の速さで洗濯機が鳴り響く。その音を聞きながら、ビールを一口、一口と飲んでいく。誰から、洗濯機の回っている様子を見ると癒される、と聞いたことがある。俺は、この音を聞くと何だか落ち着く。メトロノームのように一定のリズムで鳴り響く洗濯機。その音を聞きながら、ぼおつと座り続ける。

ビールを一缶、二缶、飲んでいりしおちに意識がどんどん遠くなつてきた。体が鉛のように重い。もういいや、ベッドへ移動するのも面倒だ。ここで寝てしまおつ。そして、だんだんと意識が遠のき、そのまま深い眠りに落ちていつた。

目が覚めると、窓の外がうつすらと明るい。時計を見ると、六時を指していた。

これは午後の六時なのか、それとも朝の六時なのか。どちらうつ。また、ソファで寝たせいで体のあちこちが痛む。腰を擦りながら、テレビを点けると朝の顔でお馴染みのアナウンサーが爽やかな笑顔でニュースを読んでいるところだつた。

ほんとに寝ただけで終わつたな、休日。

着替えを持って洗面室にいくと、ひどい寝癖の自分が鏡に写つていた。髪を搔き上げ、ため息をつきながら服を脱いでいく。蛇口を

捻り、シャワーを浴びる。朦朧とした頭がやっと冴えてきた。

美山がどう証言したか篠原に聞いてみよう。それが気になつてしまつがない。でも、田崎の事件ばかり考えている暇はない。他にも事件を抱えているし、調書も書かなくてはいけない。ああ考えただけで気が重くなつてきた。

蛇口を捻り、シャワーを止めると洗面室にでた。タオルで体を拭き、洗濯機から下着を取り出し着替える。

今日もまたいつもの始まりだ。

その場を動くことができない。床に座り込んだまま呆然としていた。

あんな声を聞いたら。
あんな顔を見たら。

アイツは 何に苦しんでいるんだ？

ゆっくり立ち上がると、田崎のいる部屋へ歩いて行く。部屋に入ると、部屋の真ん中で田崎がアルバムから写真を剥して破り捨てていた。

「！来るなあ！帰れって言つただろ！殺されたいのか？！」

俺に気付くと、アルバムを俺田掛けて投げてきた。アルバムは俺のすぐ横の壁に当り床に落ちた。足許に落ちたアルバムには、笑顔の少年と父親らしい男性が並んで写っている写真があった。アルバムを拾いあげ、田崎に手渡そうと近づくと彼の足許には無数の家族写真の残骸が積み上げられていた。

田崎はアルバムを手で払いのけ、奇声を発しながら飛びかかつてきた。俺の首を絞めながら、顔を歪め泣いている。

く、苦しい。

手をどけようと思つてもすごい力で、びくともしない。田崎の泣き顔を見上げながら、意識がどんどん遠のいていく。
も、もう だめだ。

「 父さん！…びつしてえ」

遠のく意識の中、田崎の悲痛な叫び声に

涙がでた。

父親と一緒に写った笑顔の幼い田崎と、家族写真を破り捨てるほどの田崎の絶望に涙が溢れて止まらない。俺には 田崎の苦しみがどれほどのものか分からない。でも それほどの苦しみを独りで背負っていた彼を想うと哀しかった。何も知らずに彼のことを怖がった自分が恥ずかしかった。

田崎の首にかけた手が緩んだ。

「つぐつ、じつほ、じほつがはつ」

急に呼吸ができるようになり、むせ返る。田崎は、俺が泣いていることに驚いて後退った。

「帰れ。俺が暴れる前に、帰ってくれ！」

田崎はそのままその場にうずくまつた。震える肩を両手で抱え、必死で自分を守っているかのように。

「田崎・・・・・

フラフラになりながら立ち上がり、田崎の方へ歩み寄る。

「黙れ！来るな！」

つづくまりながら、震える声で田崎は叫んだ。

「どうせお前だって、俺を裏切るんだ！だつたら！ 俺に関わるなよ！」

「俺は・・・・・

田崎の肩に手を置くが、振り払われた。

「嫌なんだ。もう、拒絶されるのは 嫌なんだ」

「おはようございます」

部屋に入ると、若林と猪又が「コーヒー」を飲んでいた。

「修平も飲むか？」

「飲みます」

田村は、まだ来ていよいよだ。若林たちのところへ行き、コーヒーを受け取る。

「えらく田崎の事件、気になってるみたいだな」

若林が苦笑しながら聞いてきた。他にも仕事があるだろうと呆れている様子だ。ごもっともです。コーヒーを一口飲み、頷いた。

「中途半端に関わったせいかもしれない」

「お前、真面目だよな」

壁にもたれながらしみじみ言つ猪又に、俺と若林が声を合わせて言つた。

「お前が言つな」

確かに、と猪又が笑い出した。

「最近、忙しそうだな」

ここ数日、捜査一課は連日のように慌ただしく動き回つていて、猪又はほとんど部屋にいることがない状態だったので気にはなつていた。

「今、抱えてる事件が厄介なんだ。まだ少しかかりそうだなー」頭を搔きながら猪又は言つ。以前よりずいぶんと落ち着いたように見える。

「お前だつて、抱えてる事件あるだろ」

若林に突つ込まれてしまった。

「そうでした。早く終わらせなきゃ」

「コーヒー」を飲み干し、カップを置いた。俺と若林が席に向かおう

とすると「片付いたら、また飲みに行こうな」と猪俣がニヤリと笑つた。

「ああ、行こう。「一ヒー」駆走さん」

溜まつた書類に取り掛かるうとしていると、篠原と田村が部屋に入ってきた。席についた田村に、美山のことを聞いてみた。

「篠原警部、何だつて？」

田村が、イスにもたれ掛かりながら「認めた」と短く答えた。あまりの出来事に混乱して逃げた。信じられなくて逃げた。と証言したそうだ。

「 そつか」

普通は そうだよな。人が、しかも親友が恋人を刺す現場を見たら動搖するよな。

「これで、事件も進展 するかな

手元を見つめながら呟いた。

「そうだな」

田村は、頬杖をつきながら答えた。

嫌なんだ

いらない人間だと思い知らされるのは

俺は父さんが大好きだった

一緒に暮らしたかった

一緒にいられれば それだけでよかつた

それは難しいことなのだろうか

それは望んではいけないことなのだろうか

父さん どうして俺と一緒にいてくれないの?

どうして家に帰れって言うの?

どうして笑いかけてくれないの?

せっかく会いに行つたのに

せっかく会えたのに

会いたかったのに

俺は必要じゃないの?

俺はいらないの?

もう家族じゃないの?

もう 愛してはいないの?

じゃあどうして俺を生んだの?

捨てるくらいならどうして俺を生んだの?

どうして 愛することをやめてしまったの?

俺は 生きていいのだろうか

必要のない人間なのに　　生きていていいの

どうやって　　生きてけばいいんだ

必要とされていないのに
捨てられた人間なのに

学校にいるのがツライ

幸せな奴等と一緒にいるのが苦痛だった
俺だけが違う空間にいるようで
胸がよじれるほどに苦痛でしかなかつた

学校に、教室に入るのが　　コワイ

みんなの俺を見る目がコワイ
異端者を見るような目で見ないで
わかっているから

俺がココに必要ないのはわかっているから

だから

もう

お願ひだから

そんな目で

見ないでほしい

生きているのが赦されないといつのなら

誰か　　俺を殺してくれ

「お前、なんか納得してない顔だな」

ジント一ソクの入ったグラスを片手に田村に言った。

「 まあな」

田村は、頬杖をつきながら烏龍ハイの入ったグラスを見つめていた。

「何が気になるんだ?」

「 田崎は、気が付いたら美咲が倒れていた、と繰り返すばかりらしい」

グラスを見つめながら田村は言った。

「理性が吹っ飛んでて、覚えてないのはよくあることじやないか。現に、学生時代から似たようなことあつたんだろ?」

「田崎が暴れだす『キッカケ』は、父親だ」

田村がサラリと言つた。

「お前 まさか調べたのか?！」

俺が咎めるのも無視して、田村は言葉を続ける。

「田崎は、暴れている時以外の記憶は覚えているらしい。もちろん、暴れるに至る『キッカケ』も。なのに、今回は覚えていない。気づいたら、被害者が倒れていた。商店街の狂乱劇だつて、『美咲を刺したから』つていうよりは、『美咲が血だらけで倒れているのを見たから』 それが、『キッカケ』だつたんじやないのか?」

「何が言いたいんだ?」

「 でも、美山は見てたんだろ?犯行を」

「ああ、ハッキリとな。細かな証言をして、警察に貢献しているよ」

田村はグラスを口元に運んだ。

「なんかトゲのある言い方だな。美山に、まだ何か気になることでもあるのか?」

「 お前はまだ気づいてないのか?美山は、俺たちが警官だとい

うことを知っていたんだぞ」

「だからそれは現場に」

「そうだ。現場にいたんだ、俺たちが田崎をアパートに連れて行つたとき。犯行を見て逃げたはずの美山が。じゃあ、何しに現場に戻つたんだ?なぜそれを言わない?」

あつ。

何てことだ。どうしてそのことに気づかなかつたんだ。俺は、美山の証言で事件が進展することしか考えていなかつた。逃げたはずの彼は、俺たちのことを知つていた。何故戻つてきたんだ?田崎や美咲のことが心配になつて戻つたのか?田崎を自首させようと現場に戻つたのか?

だったら、どうしてそれを証言しない?

混乱している俺に、田村が言つた。

「本当に、田崎が美咲を刺したのか?」

「おいつ、何言い出すんだ!」

これだけ状況証拠も揃つているのに。田村は、俺を一瞥し、話を続ける。

「所轄も苦労してるみたいだな」

どんなに調べても、田崎が美咲を殺そうとする動機が見つからない。田崎の友人も美咲の友人も口を揃えて言つのは、二人は羨ましいくらい幸せそうだつた、ということだ。

「血液検査で、当日、田崎は薬を飲んでいたことがわかつている。それなのに、我を忘れて暴れるだろうか?しかも記憶も一切ない」確かに動機はわかつていない。田村の言うこともわかる。

「だが、田崎は証言してるじゃないか」自分がやつた、と

「そう思い込んでいいだけじゃないのか?学生の頃、何度も暴れていたんだ。田崎は混乱し、また自分が暴れて刺してしまつた、と思ひ込んだんじゃないのか?」

田村は俺をじっと見据えた。

「そんな・・・こと、有り得るのか？じゃあ誰が彼女を　　」
「ここまで言つて、やつと田村の言おつとしている」ことがわかつた。

「お前、美山が美咲を刺したと思つてるのか？」

美山の寂しげなあの後ろ姿を思い出す。だつて美山は田崎の親友なんだろ？！

「田崎がやつていなにに、なぜ詳細な証言ができる？」

田村は、腕を組んだままカウンター前に並べてあるグラスを見据えた。

「でも、それはお前の推測でしかないだろ？！－いくら過去にそういう経験があつたとしても、目の前に彼女が血まみれで倒れていたとしても、自分がやつたと思い込む　なんて乱暴すぎないか？」
「現に思い込んでるじゃないか」

「いい加減にしろ！」

思わずカウンターを叩きつけた。

田村は、ため息をつき「お前は、美山に肩入れしそぎだ」と言つて店から出でていった。

取り残された俺は、カウンターに頭を抱えて唸つた。

「畜生！」

肩を抱き、こみ上げてくる家族や自分への憎悪という醜い感情を必死になつて押さえつける。溢れ出てくるドロドロとしたモノを、自分の中に押し戻す。このまま狂い死んでしまいたいとさえ思つ。もう嫌なんだ。こんな感情に囚われ続けるのは。

誰でもいい俺を殺してくれ。ナカツタモノにしてくれ。

「独りで苦しむなよ」

顔を上げると、美山が泣きながら怒つていた。
なんで 怒つてるんだ？

首を絞めたからか？

「お前が、一人で苦しむことないじゃないかつ」
溢れ出る涙を拭うこともせず、美山は俺に向かつて叫んだ。
何故怒つているのかも、彼が誰なのかもわからない。訳がわからず呆然としていると、美山はつかつかと近づいてきた。

「田崎は父親が好きなんだろう？ それなら、それでいいじゃないか」
引き込まれそうなほど力強い目。あまりの真剣な眼差しに視線を逸らすことができない。それでも、何とか視線を逸らせ声を絞り出した。

「いいわけないだろ いいわけないだろーが！」
愛されていないのに・・・。

「家族のことを愛して何が悪いんだよーお前は悪くなんかない！」
美山は、じぶしを震わしながらこれ以上ないくらいの声で叫んだ。

「コイツは 俺のために泣いているのか？」

「人と人の繋がりなんて簡単に切れやしない。ましてや家族なんて

どんなに離れていたって、お前の父親であることに変わりはないだろ？！いいんだよ、愛してたって！！

「お前に何がわかる！・・・父親に・・・みんなに・・・必要とされない人間、の何がわかるっていうんだ！」

握り締めた写真の残骸を、美山に向かつて投げ捨てた。それが美山の顔に当たり、赤い血が滲み出た。

「あ・・・」

「俺はお前が必要だよ。俺はお前と友達になりたいと思つてゐる。顔の傷を気にすることなく、美山が手を差し延べてきた。

嘘だ　嘘だ　嘘だ　嘘だ　嘘だ　嘘だ

そんなことあるはずがない！美山の手を振り払い、後退る。

「やめろ！　やめてくれ、もう嫌なんだ」

裏切られるのは。

「裏切らない、絶対に　。俺はお前を裏切らない」

まっすぐに俺の目を見ながら、美山はもう一度手を差し伸べてきた。

優しい声

こんな言葉を言つてくれた人は今までいなかつた。

嘘、じゃないのか？

信じて　いいのか？

もう傷つくのは嫌だ。

でも、信じたい。

俺は、生きたい　　生きていきたい。

どれくらいの時間が経つただろう。もしかしたら、ほんの数分しか経つていなかつたかもしれない。でも、俺には とても長い時間に思えた。

「田村さんも、貴方だから御自分の考えを打ち明けたんじゃないでしょうか？」

顔を上げると、マスターがほほ笑んでいた。どういうことだ？「人間は勝手ですからね。辻褄を合わせ、都合のいい解釈をしてしまうものです。だから田村さんは貴方に打ち明けた」

「どうしてですか？」

マスターは、俺の前に水の入ったグラスを置いた。

「人は色々な意見を聞くことで、新たな道が見つかったりするものです。人との繋がりは可能性を広げることにも繋がるんですよ。でも、人は臆病ですからね。それは簡単そうで難しい。意見がぶつかり合うことだってある。拒絶されたり、受け入れられなかつたりもする。でも、ぶつかり合つてお互いを理解し、より繋がりが深まるものでしょ？ 人は？」

マスターは、優しくほほ笑んだ。

田村は独自に事件について調べ、考えていた。俺は事件について詳しく知らない。それなのに、田村の考えを頭ごなしに否定してしまつた。田村の考えだって、可能性の一つかもしれないのに。俺は、確かに美山に肩入れしていたかもしれない。

「マスター、ありがとう」

水を飲み干し、店を出る。確か 南警察署の機捜に警察学校で一緒にだつた竹下がいる。内ポケットから携帯を取り出し、電話をかける。

「竹下か？ 夜遅くすまん、望月だ。頼みがあるんだ。今から、そつち行つていいか？」

竹下から「了解をとり、彼の住む寮に向かつた。玄関のインターホンを押すと、竹下がにこやかに出迎えてくれた。

「久し振りだな、望月。どうした?」

「悪い、夜遅くに」

竹下は部屋の奥へ案内しながら、別にいいさと笑った。
「頼みがある。お前の署で捜査している田崎の事件を、詳しく教えてくれ」

テーブルに両手をついて頭を下げた。竹下は一瞬キヨトンとしたが、次にはお腹を抱えて笑い出した。

「お前どうしたんだー！そんな改まって！腹、腹いてー」

「ここは、笑うとこじゃないと思うが」

笑い転げる竹下を見て、自分でもおかしくなつてきた。

「だつて、お前のキャラじやねーもん。あーおかしい、お前変なことすんなよな。俺を殺す気か？あつ、ビール飲むか？」

竹下は涙を拭いながら（お前の中の俺の認識はどうなつてるんだ？！）キッチンに向かい、冷蔵庫からビールを取り出した。
「看護師傷害事件のことだよな」

ビールを渡しながら竹下は言った。

「ああ」

「そつか、望月たちが田崎を取り押さえたんだつけ？」

「ああ」

俺の向かいに座り、ビールを飲みながら竹下が話しだした。

「俺たちは別の機捜班が、初動捜査をしたんだ。被害者は、腹部を一ヵ所刺されていて、まだ血は乾いていない状態だつたそつだ。凶器は、田崎が持つていた包丁。彼はその日、十四時四十分まで大学の講義に出ていた。家から大学までは、自転車で十分程だ。田崎が、望月たちに取り押さえられたのが十五時十分。田崎は、薬の服用もしていた。学校も普通に登校していく暴れることもなかつたし、変わつた様子もなかつたらしい。概要は以上」

竹下は、そう言つと渴いた咽喉をビールで潤した。

「友人たちの証言は？」

「被害者の友人も田崎の大学の友人も、皆口を揃えて「信じられない」とそればかりだ。よっぽど仲が良かつたんだな。ただ、中学、高校の友人に聞くとほとんどが「やつぱり」「納得」って感じだつたな」

竹下が、頭を搔きながらため息をついた。

「かなり荒れてたらしいな」

「ああ、家族でさえ　母親と妹がいるんだが、ひどく怯えているんだ」

「家族も？　父親は？」

「田崎が十一歳の時に両親は離婚している。父親つ子らしくてな、離婚が原因で暴れるようになつたらしい。包丁振り回して母親に切り付けたり、妹の首を絞めたり、家に火をつけようとしたりかなり危険な状態だつたみたいだ」

『キツカケ』は父親　田村の言葉が頭に過ぎつた。田崎にとって、父親の存在はかなり大きかつたようだ。

「父親は今、何をしているんだ？」

「S県に住んでいるよ。結婚もしているらしい」

「そうか　　美山は？」

「お前詳しいな。中学からの親友だ。田崎が落ち着いたのも、美山の存在が大きかつたようだな。今回も、美山の証言のお陰で田崎も少し落ち着いたし、毎日のように病院にも通つてているみたいだよ、彼

「彼」

「そうか」

美山　　は田崎のことをどう思つているんだろう？

「そんない荒れている田崎に、どうして美山は近付いたんだ？」
飲みかけていたビールをテーブルに置き、竹下は顎をなぞつた。
「クラス委員長だったみたいだな。熱心に家に通つてたそうだ」
俺が考え込んでいると、竹下が声のトーンを落として言った。
「被害者さ、一時危篤状態に陥つて心停止したんだ。なんとか、も

ち直したけどな。刑事課も気が気じゃないみたいだ

「そりか もち直したか。よかつた」

本当に、よかつた。ほつとして胸を撫で下ろす。

「なあ、望月。彼女とつまくいってるか？」

竹下の唐突な質問に、飲んでいたビールを吹き出しそうになつた。

「汚ねつ！お前部屋を汚すなよ」

「吹き出してねーよ！お前が変なこと言つからだろー。」

口元を拭つていると、竹下がニヤニヤしている。

「その様子だと別れたなー！愉快、愉快」

竹下は、楽しげにビールを飲み干した。

「人の不幸を笑うなつーの。お前はどうなんだよ」

「痛いこと聞くなよ だから愉快だつて言つてんだろ」

口をへの字にして肩をすくめた。

「なんだよ、お前もじやねーか」

苦笑しながら、ビールを飲み干す。

「だつて警察学校時代、お前付き合い悪かつたもんな」

竹下は冷蔵庫から新たにビールを取り出し、口を尖らせながら言った。

「まあ、若かつたし、彼女と付き合い出したばかりだつたしな」

頭を搔きながら、照れ隠しに受け取つたビールをあお煽つた。

「今は、気になる女いないのか？」

竹下の言葉に、里見が頭に浮かんだ。

「いないよ、忙しくてそれどころじゃないしな。お前はどうなんだよ？」

真顔で、ナッスティングだ！と言われて吹き出しあつた。

「機捜なんてガタイのいいオヤジしかいねーからな。そこで、恋が

芽生えても口ワイよ」

顔をしかめながらビールを飲む竹下に、応援するぞー！と言つたら
クッショングが飛んできた。

「シャレになんねー」

一人で笑い合つた。笑うしかないではないか。

「県警も大変そうだな」

「所轄ほどではないわ」

「まあな でも、どこも一緒だ

「そうだな どこも一緒だ。

「竹下、ありがとな。また、飲みに行こうな」

立ち上がり、玄関に向かいながら竹下に礼を言った。

「たいした事しないさ、飲みに行くの楽しみにしてるよ」
外に出ると、ビールでほてつた頬に風が当たつて気持ちが良かつた。歩きながら、事件のことを考える。田崎が犯人なら、家に帰つてすぐ犯行に及んだことになるよな。何が原因で?しかも、記憶に残らないくらいの『衝撃』って何だ? 『衝撃』か。

美咲と美山の逢引の現場 はどうだ?信頼していた恋人と親友の裏切り。これほど田崎にとつて衝撃的なことはないだろう。俺、冴えてるぞ。ん? ダメだ。田崎の部屋で一人が会う意味がない。

じゃあ、美咲が美山に乗り換える、と田崎に別れを告げるつてのはどうだ?これ、よくないか? 衝撃だが、それで包丁で刺すか?しかも美咲だけ。自分にとつて大切な二人。傷つきはするが傷つけるだろうか?

「あーもう、さっぱりだ!つていうか、一人で考えると延々ループだつづーの!」

ため息をつき、近くの公園の花壇の脇に腰掛ける。田村も、ループしながら考えたんだろうか。

差し出した手に、田崎がおそるおそる手を重ねた。

俺の手の平に、田崎の温もりが伝わってくる。俺は、何か神聖な儀式を行つているかのようと思えて胸が熱くなつた。目頭が熱くなるのを感じながら、俺は田崎の手を強く握り返した。

「俺、美山洋一。これから、よろしくな」

田崎は、困ったような顔をして頷いてから「ごめん」と小さな掠かすされた声で謝つた。一瞬何を謝つているか解らなかつたが、首を絞めたことだと気がついた。

「え？ ああ、いいよ。気にしてないから」

「でも・・・・・血が」

「え？ あ、そっちかよ。これも大丈夫だよ」

頬の傷を手で擦つた。血は乾いているらしく、僅かの血も手についてはいなかつた。

「あっ！ 首も・・・絞めてごめん」

田崎が、顔を歪めながら頭を下げた。

「だから、大丈夫だよ。こんなのは平気。俺のほうこそ田崎に謝らなきやいけないんだ。お前のこと勝手に思い込みで怖がつてたんだ、俺。」

「ごめん」

「暴れて、恫喝して、怪我までさせて。怖がるのは当然だ。お前が謝ることなんてない」

俺が謝るのを制するよつに田崎は、強い口調で言つた。違うよ、と俺は言つ。

「分かり合あうともせずに、思い込みで人を決め付けるのは最低だよ。馬鹿だよ。俺は、馬鹿だつたんだ。お前はずつと苦しんでたのに。でも、もう独りじやない、俺がいるよ」

その言葉に田崎は目を見開いて驚いた。そして、急に顔をくしゃ

くしゃにして子供のように声を上げて泣き出した。まるで、今まで心の奥に溜めていたものをすべて吐き出すかのようだ。

突然、田崎が泣き出したのでびっくりした。けれどすぐに、何かから開放されたかのように、声を上げて泣く田崎を見てほっとした。

そして、田崎に笑いかけた。

「一緒にに行こう。これからどんな苦しいことがあっても、一緒に乗り越えていこう。一人だったら怖くないわ。もう独りで苦しまなくていいんだ」

そう言つと、一層激しく田崎は泣いた。

泣き疲れて眠つてしまつまで、ずっと

。

俺の彼女と田村ができていたら、俺はどうする？

ムカつくつ！

いやいや違う違う。もう一度、考え方。

田崎は、父親と一緒にいられなくて情緒不安定になつたんだ。それを支えたのが美山だ。そして、美咲だ。友人の話でも、田崎と美咲は本当に仲がよかつたという。そんな彼女が、美山と恋に落ちるだろうか。

ナッスティングだ。

美山は、田崎が美咲を刺したところを見たと証言している。美咲と美山が、できていないとすれば田崎にどんな衝撃があつたんだ？

数分の間に。

部屋に美咲が血まみれで倒れていたとしたら。

田崎の衝撃を想像するのは、難くない。

美山の証言は嘘だったのか。どうして、親友を裏切った。田崎にとつて美山は支えだつたが、美山にとつて田崎は何だつたんだ？なぜ美咲を刺した？足元を見つめながら、美山のことを考えた。打算だけで、荒れ狂う田崎と付き合い続けることができるだろうか。八年も。美山にとつて、田崎はどんな存在だつたんだろう。

机に突つ伏している俺を見て、田村は驚いてドアの前で立ち止まつた。

「おーそーいー！田村ー」

結局、昨日は県警に泊まつた。田村がいるかと思い来てみたら、当番の強行犯捜査一係の山形たちしかいなかつた。「仕事熱心だな」と苦笑され、三人で夜を明かしたのだ。コーヒーを死ぬほど堪能し

たさ。

若林も出勤してきて「お前ここの好きだな」と呆れている。違う、すべて田村のせいです。だが反論する気力もなく、田村を廊下に連れ出した。

「俺も行き着いた考え方がある　　被害者を刺したのは、美山だ」
田村はいつもの無表情で、壁にもたれかかりながら俺の話を聞いていた。

「…………ことだ。以上」

ネクタイを緩めながら、田村の隣の壁にもたれかかった。

「…………で、どうするつもりだ？」

「どうするかねえ、証拠も何もない。推測にしても、強引すぎる。眞実は、やっぱり田崎が刺したのかもしない。美山本人に直接ぶつけるしかないんじゃないか？免職覚悟でな」

俺たちがそこまでする必要があるのか。このまま田崎を逮捕しても、裁判で心神喪失状態が認められるのは確実だ。

でも　　もし本当に田崎が無実なら？

あまりに残酷ではないか？親友に裏切られ、恋人を傷つけられ、その犯人に仕立て上げられた。もしかしたら、恋人はこのまま意識が戻らないかもしれない。亡くなってしまうかもしれない。そうすれば、恋人を殺したとして殺人者という烙印を押される。　彼はこれから先、その絶望の中で生きて行かなければならぬ。死ぬまで一生　。

俺はそれを赦せるのか？

「俺は、美山が赦せない。親友だと偽つて田崎のそばにいたことが一番赦せない。田崎にとつて、美山は掛けがけえない友人で支えだつたはずだ。それを利用した美山は　赦せない。赦しちゃいけない。そんなことは絶対」

田村を真直ぐ見据えながら、怒りに震える声で俺は言った。

「なら行きなさい」

急に声をかけられ、驚いて声のした方を振り向くと、藤堂が立っていた。田村も驚いている様子だ。いつからいたんだ？

「あの・・・」

藤堂は、普段見せない真剣な眼差しで言った。

「少しでも疑問に思うことがあるなら行きなさい。後悔をしないようにな」

「冤罪は最も忌むべき大罪だ」

藤堂の言葉に決心がついた。俺たちは頷くと、地下駐車場へ向かつた。このまま後悔を抱き続けるなら、今、動こう。俺たちは車を走らせる。

美山のもとへ。

「美山さん」

俺の呼び掛けに、ベンチに座った美山は振り向くと、知らない笑顔を浮かべた。

「あ、刑事さん」

俺たちが美山の方へ歩み寄つて行くと、「どうかしたんですか？」と心配そうに聞いてきた。

「少しお聞きしたいことがあってきました」

ここは、被害者のいる病院の中庭。美山は、その中庭にあるベンチに腰掛けて書店名の入ったカバーをかけた本を読んでいた。まだ、新しい本だ。

「聞きたいことって何ですか？」

「貴方が現場に戻った理由です」

俺が美山に質問している間、田村はじつと美山の顔を見据えていた。

「え？」

美山の頬がぴくりと動いた。

「貴方、現場にもう一度戻りましたよね？」

美山は、頬を微かに上気させながら叫んだ。

「行つてません！お、俺は、学が美咲を刺すのを見て怖くなつて逃げました。その後は刑事さんたちに会つたあの時しか、学の家には行つてません」

肩で息をしながら、俺たちを美山は睨んだ。

「落ち着いて下さい。別に、貴方が怪しいなんて言つていませんよ。それに貴方の証言のお陰で田崎の犯行が立証されたんですから、私たちには貴方に感謝しているくらいです」

その言葉に、美山の表情が見る見る曇つていった。

「す、すみません。急にそんなこと言われてびっくりしてしまつて

それに、俺は別に感謝されるようなことは、してませんから」

声のトーンを落としながら、美山は伏し目がちに言つた。

「そんなことはないです。貴方のお陰で、犯罪者を捕まえることができたんですから」

犯罪者という言葉のとこりで美山は一瞬肩をびくりとさせた。そのまま美山は顔を上げない。

「でも 学の精神状態じや、実刑は 無理ですよね」

「実刑は無理でも社会が彼を裁きます。そして、彼自身が自分で自分を裁くでしょう 一生かけて」

「 一生、かけて」

美山は、ゆっくり顔を上げて力ない目で俺を見た。始めてあつたときの、あの凜とした涼やかな目とは違つて闇い光を帯びた目だった。

「 そうです、一生です。生きている限り、彼は愛した恋人を手にかけた贖罪の念に苦しむでしょう」

美山の口元が動いた が、声にならなかつたので何を言つたかは分からぬ。額にはうつすらと脂汗が浮かんでいる。

「 貴方は、何故現場に戻つたんですか？」

「 何を さつきも言つたように俺は現場に戻つてません！」

「 でも貴方はあの時、俺たちが警官であることを知つていた。俺た

ちは、この事件を担当していません では、いつ知ったんですか

？」

「それは・・・・・」

言葉を詰まらせた。

「俺たちが田崎をアパートに連れて行つた時 ですよね」

美山は何も答えない。ただ微かに唇が震えていた。

「どうして現場に戻つたんですか？」

もう一度質問をしても、美山は唇を噛みながら顔を歪めただけだつた。『田崎を自首させるために戻つた』と聞きたかった。

「田崎はよっぽど衝撃を受けたんでしょうね。知つてますよね、犯行時の記憶がないんですよ。記憶をなくすほどの『衝撃』って何だつたんでしょうね。そのせいで彼は、恋人を刺してしまつたんですから。美山さん、何か思い当たることはありますか？」

美山は、口を固く閉ざし何も答えない。

「 貴方は、美咲さんのことなどをどう思つていましたか？」

美山の眉がびくんと動く。

「どうつて・・・・別に、親友の恋人としか・・・・

かされた声で、弱々しく答えた。

「私たちは、貴方と美咲さんが愛し合つようになり、田崎に別れを切り出したことが原因ではないか、と考えました。親友と恋人の裏切り、田崎には十分過ぎる程の『衝撃』ではないでしょうか？貴方は現場にいた。田崎が部屋から飛び出した後も、パトカーのサイレンで部屋から逃げた。だから私たちが警官だといふこともわかつた」「失礼なことを言つたな！ そんなことは絶対ない！」

美山は、怒りを露にして言つた。それを無視するように言葉を続けた。

「ええ、違いました。美咲さんは、田崎を裏切るようなことはしない。だとすると、田崎の『衝撃』とはどんなものか それは、

『部屋に美咲さんが刺されて倒れていた』ことです」

美山が、愕然とした顔で俺たちを見た。

そこからが大変だつた。

眠つてしまつた田崎をベッドで寝かせ、ちょうど帰宅した母親と妹と一緒に、滅茶苦茶になつた家の掃除をした。田崎の母親に送られて家に帰つたのは、九時を回つていた。

学校へも、最初は怖がつてなかなか来たがらなかつた。

佐々木に頼み俺の隣の席を田崎にしてもらい、少しずつ学校に慣れるようにしていった。真山も、小学校時代に田崎と仲が良かつたらしく一緒に登校してくれたり、色々と協力してくれた。

真山は畠山と付き合つことにはならなかつたが、本を読むのが好きになつていて。「お前のおかげで、現国成績が上がつたから手伝つてやる」と照れくさそうに言つていたが、真山も田崎のことが気になつていたのかもしれない。

その甲斐あつて、三年になる頃には学校にも通えるよつになつていた。

時々、嫌な記憶が甦つて学校や家で暴れることもあつた。でも、もう独りになんてさせない。独りで苦しませたりはしない。

田崎と出会いつて、俺はいつの間にか生きていることが虚しいと思わなくなつた。心から信じあえる友達を見つたからかもしれない。

そうだとい、と思つた。

「洋一、これ何て読むんだ?」

現国教科書を手に、学が頭を搔きながら聞いてきた。あと一ヶ月で、高校入試だ。学校を休みがちだった学に、彼の家で泊まり込みの勉強会を開いている。

「これは、バラ。ちなみに読めるが書けん」

読めるだけすげえよ、と学は笑う。少しうつ学は、笑うよくなつた。それがうれしい。

今まで苦しんだ分、幸せになつて欲しい。俺は、ベッセの『春の嵐』の言葉を思い出す。

「人は自分だけのために生きるより、他人のために生きる場合のほうが、満足が大きい」

俺は、学が幸せになるように支えになりたい。それは、俺の幸せにも繋がっていると思うから。

「一緒に高校、行こうな」

「ああ」

教科書から顔を上げ、学は嬉しそうに笑つた。

一緒に生きてこいつ。これからも ずっと。

俺は、学の一一番でいたかった

今まで、これから先も ずっと

始めは、クラス委員長としての義務感から学の家に通つた

でも アイツは苦しんでたんだ

暴れたくて暴れていたわけじゃない

でも、居場所がなくて、自分が生きている意味が分からなくて、苦しんでいたんだ

少しずつ学が心を開いてくれて一緒に過ごすようになつて、俺だつて学に支えられていた

初めて親友と呼べる友人ができたことが嬉しかつた

だから 美咲が現われて不安になつた

美咲に出会つて学は前よりも落ち着いていき、たくさんの友人ができた

学にとつていい事だし、俺も喜んだ

でも 俺は独り、取り残された感じがしていた

学には俺はもう必要ないのか？

寂しかつたんだ

だから、学の信頼を一心に受ける美咲を妬み、憎んだ

お前をえいなければ、と

でも、いつからだろう

それが好意に変わつたのは

いつから、彼女を目で追うようになつたんだろう

好きで堪らなくなつた

自分の中にしたいと思つた

一緒にいたいと思つた

どれだけ眠れない日々を過ごしただろうか
学のことを思うと胸が痛み、美咲への想いを押さえ込もうとした
一緒にいるのが辛くて、美咲を避けるようになつた
でも、避ければ避けるほど強く彼女のことを持つてしまう
会いたい、彼女に会いたい

だから あの日、学の家に行つたんだ
気持ちを伝えるために

「好きなんだ」

そう言つた時の、美咲の顔は今でも覚えている
「洋一くん、自分が何を言つてるかわかってるの？」

「わかつてゐるさ、俺は美咲が好きなんだ」

美咲の目をじっと見据えた。彼女は、俺が本気で言つているとわかると目を逸らした。

「ごめん、私には学がいる。だから、このことはなかった事にしましょう。学が傷つく

なかつた事にする？学が傷つく？

なら、俺は？
俺は傷ついてもいいのか？！

気が付いたら、美咲が倒れていた。手には、血の付いた包丁を握り締めている。

足元から這い上がつてくる恐怖に体が震えた。

そんな、どうして！？
どうしてこんなことに
包丁を投げ捨て、頭を抱えた。

学だ すべて学が悪いんだ

俺はただ ただ、また前みないに

「……何が……言いたいんですか？俺が……やつたとでも言つんですか？」

美山は、震える声で言った。中庭には、俺たちしか今はいない。鳥のさえずりがあちこちで聞こえる病院の憩いの場で、なんて哀しい話をしているのか。

俺たちは、美山を見つめた。彼にとつて 田崎はどんな存在だったのか。

「……刑事さん。し、証拠は……あるんですか。俺が、美咲を刺したっていう、証拠は」

美山が、震えを止めるよつて固く手を握り、食い入るよつて俺たちを見つめた。

「ありません」

俺がそう言つと、美山の顔中の筋肉が緩んだ。

「……証拠もないのに、こんな事していいんですか？訴えますよ」

美山が、唇の端を歪め勝ち誇ったように言い放つた。

「どうぞ、『勝手に』俺たちはその覚悟でここに来てます。どうしても、君のしたことが赦せなくてね」

「だから違うと……」

「君にとつて田崎学とはどんな存在だったんだ？」
初めて田村が口を開いた。

「え……」

美山が困惑した顔になつた。

「一つ約束してほしい。もし君が、田崎さんのことを利用したのなら 二度と彼に近付かないで欲しい。親友だと偽つて近付くのはやめてほしい。これ以上、彼を苦しめるのはやめてほしい」

俺の言葉に、美山の顔が見る見る醜く崩れていつた。

「やめろ！　どいつもこいつも皆、学、学つて。　俺だつ

て、傷ついたんだ！俺だつて、学のこと一番大切だつたんだ！大切な親友なんだ！俺が傷つけたみたいに言つたな！俺は・・・ただ、前みたい・・・」

美山は、その場に両膝をついて拳を地面に何度も、何度も振り下ろした。

「君は今まで大切に築いてきたものを　自分の手で壊したんだ」

涙で濡らした顔を上げ、悔しそうに唇を噛んだ。

「俺は・・・どうして・・・どうして、こんなことに」

声を押し殺しながら、美山は何度も呟いた。

「君はもつと自分に自信を持つてよかつたんだ。田崎さんにとって、美咲さんも君も掛替えのない大切な人間だつたのだから」

美山は、頭を抱えながら震える声で呟いた。

「俺は、ただ、前みたいに・・・学の一一番で・・・いたかった、だけなんだ」

美山の落とした本を拾い上げると、カバーが外れて本の表紙が露^{あら}わになつた。表紙には『若きウエルテルの悩み』と書かれている。美山に渡すと、恥ずかしそうに本を受け取つた。

「昔は、ウエルテルのこと嫌いだつたんです。馬鹿なヤツだと思つてました。思い込みは、ほんと最低ですね。俺が馬鹿だつた。ウエルテルは、俺だつたんです。でも　　俺は、愛する人を刺してしまつた。　　最低です」

「　君にとつてのロツテは、田崎君だつたんだ」

田村の言葉に、美山は一瞬キヨトンとした。それから「ああ、そういうことか」と呟つておかしそうに笑つた。目からは涙が幾筋も流れていた。

美山を南警察署に連行し、田崎が釈放されるのを俺たちは待つた。

程なくして田崎が、廊下の向こうから出てきた。最初に彼を見たときより、ずいぶんとやつれていた。

田崎は、なぜ自分が釈放されたのかを理解できていなかつた。美山が逮捕されたことを伝えると、顔を強張らせ声を震わて美山の無実を訴えた。

「洋一がそんな事するはずがない！ アイツはそんな人間じゃないんだ！ 優しいヤツなんだ！ 何かの間違いだ！ アイツは・・・俺たちは親友なんだ・・・そんな・・・そんな事あるはずが・・・ない」

俺たちが何も言えないと、田崎は肩を落としうな垂れた。

「・・・父さんが好きだつた。父さんと一緒に暮らしたかつた。でも、あの人はもう別の家族がいたんだ。・・・生きていくことが地獄だつた。でも、洋一は・・・アイツだけは、俺を認めてくれたんだ。一緒にそばにいてくれたんだ。一緒に泣いてくれたんだ。俺は、洋一がいたから生きてこれたんだ。これから俺はどうやって・・・生きていけばいいんですか？」

涙に濡れた田崎の目は、救いを求めるように俺たちを見つめた。「人間なんて皆、孤独だ。お前だけじゃないさ。でも、いらない人間なんていやしない。自分の存在理由は、自分で見つけるしかない。今までだつて、自分で見つけたじゃないか」

田村が、相変わらずの無表情で田崎に言つた。でもその声は、とても慈悲深く、愛情に溢れたものに聞こえた。

「でも・・・」

「君は、救いを求めている誰かを助けることができるんだ・・・」

美咲さんや美山さんが君を救つたように「

「・・・俺が」

「そう、側にいてあげるだけでもその人にとつて救いになる・・・君だつてそうだつたろう？」

田崎は涙を拭い、頷いた。目には、今までにない強い光が宿つていた。

「待ちます、洋一を・・・。アイツを苦しめたのは、俺だから。ア

イツが俺を支えてくれたように、今度は俺がアイツの支えになります」

す

「望月 つ！」

竹下が息を切らしながら、階段から下りてきた。

「よかつた、まだいた。彼女が、意識を取り戻したぞ！」と言つて親指を立てた。

田崎の顔が見る見る崩れ、目からは大粒の涙が溢れ出てきた。

「・・・美咲・・・・」

「病院まで送ろう

竹下に礼を言つて、田崎を連れて病院へ車を発進させた。

美咲が意識を取り戻したことは、美山にも伝えられた。涙を流しながら「よかつた・・・・」と呟いたそうだ。彼は、毎日不安な日々を送っていた。美咲が意識を取り戻せば、自分の犯行が知られてしまう。でも・・・・意識を取り戻して欲しい。助かつて欲しい。毎日、祈る気持ちで病院に通つていたそうだ。

病室に入ると、彼女は、田崎を見て幾筋もの涙を流して微笑んだ。
「よかつた・・・・また学に会えて・・・・よかつた。また・・・・学と、一緒にいられる」

田崎がベッドに駆け寄ると、美咲が「洋一くんを責めないで」と言つた。自分が、彼が傷つくことを考えずにひどいことを言つてしまつたから、彼女は申し訳なさそうにそり言つた。

田崎は頷きながら、美咲を抱きしめた。

「県警に戻ると、篠原に手招きをされた。笑顔が怖いですよ。

「バカもん！管轄外の事件に首突つ込みやがつて」

低く押された声で静かに怒られた。迫力ありすぎて怖い。

「 今回は藤さんに免じてこれだけで済むが、次は始末書かせるからな」

所轄の南署に、藤堂が根回しをしてくれていた。なんて素敵な先輩なんだ。

「藤堂さん、いつもと違いましたね」

田村が篠原に言つと、篠原は曖昧に答えるだけだった。確かにいつもと違っていた。でも、篠原もあまり言いたくないようだ

し聞かないほうがいいんだわ。

席に着くと若林が、スッキリしたか？と聞いてきた。

「はい、お陰様で」

若林が、そうかそうかそれはよかつた、と言つて大量の書類を渡してきた。

「君たちの仕事が、俺たちにゼーんぶ一回つてきたんだよね。これ、完成してるやつね。あ、気にしないで！全然、全く、気にしてるから」

爽やかな笑顔で、後輩に恩を着せないで下さい。

「あはは・・・・・若わん、ほんと篠原警部に似てきましたね」

小声で言つたのに、篠原が「何か言つたかー」と離れた席から言つてきた。

地獄耳。

「じゃあ、今度飲みに行きましょう。南署の友達にも、集たがられてるので一緒に済ませます」

その後、竹下から電話があり、手柄を持つていったんだから奢れと言われていたのだ。

「修平の友達？ ほお、色々聞き出せなきやな」
若林が嬉しそうに言った。

「まずい」。

「やっぱり別で行きましょう！ 美味しいとこ探しとりますね
「ううん、一緒にいい。一緒にやなきやいやだ」

しまったー！ 竹下に口止めをしなければ。どんな生き地獄が待つ
ているかを想像し、身震いをする。脱力しながら部屋を出てトイレ
に向かった。

はあ 二人に酒飲ませて、早めに潰してしまおう。

ふと前を見ると、廊下の窓の前に藤堂が立っていた。

「藤堂さん、今日はありがとうございました」

はつとして振り向いた藤堂は、力なく笑つた。

「気にしないでいいよ 積罪だけは、何よりも赦されること
だからね」

そう言つと、避けるようにして行つてしまつた。あの人は 何かを抱えて生きているのだろうか。もしかしたら篠原や間宮が、支えになつていてるのかもしれない。だったら 僕は何も言わないほうがいい。そんな気がする。

人の気配がして、後ろを振り向くと田村が立つていた。

「おう、お疲れ。今日行くか？」

「行こう」

ふと気になつて、田村に聞いてみた。

「ところで、ウェルテルって何？」

「本だ」

「馬鹿にしているのか、本はわかるよ。どんな内容なんだ？」

『『若きウェルテルの悩み』』主人公のウェルテルが、人妻ロッテに叶わぬ恋をして自殺する話

「そつか・・・だから、自分のことウェルテルって言つたのか。・

・・・・・ん？ でもお前は、ロッテは田崎だつて・・・・」

「美山にとつて、一番大切なのは田崎なんだよ。恋心を抱いた

「彼女よりもな」

「・・・性別関係なく人として、つてことか」

「そう。掛替えのない大切な親友だつたんだよ」

大切な親友か。もしかしたら、美山は田崎の恋人だつたから美咲のことが好きになつたのかもしれない。いや、解らない。それは美山本人すら、解らないことかもしない。

急に廊下がオレンジ色に染まつた。驚いて窓の外を見ると、巨大な夕日が世界を鮮やかなオレンジ色に染めていた。あまりにも、鮮やかなオレンジ色だつたので目を見張つてしまつた。

田村も、窓の外のオレンジの世界を見つめていた。

「お前が何か悪いことしたら 俺も自首をすすめてやるよ」

田村の言葉を聞いて、なんだかおかしくなつた。

「しねーよー縁起でもないこと言つな」

「お前が言つたんだろ」

「ところで、お前はなんで『若きウェルテルの悩み』を知つてゐるんだ? 読んだのか? ひひ」

「さあな」

オレンジに染まつた街を見下ろす。

せめて この温かい色で世界が染まつてゐる間は、犯罪は起らぬいで欲しい。

誰もが幸せに暮らせるよう 祈りたい。

なんとか終わらせることができました。

全20話予定が23話になつてしましました。

この話は最初、違つ終わり方をしていました。

書き終わった後、彼らのことが書きたくなり、番外編として彼らの出会いの話を書きました。そしたら、なんだか悲しくなつてしまつて、色々悩んだ末このよつた形になりました。でも、これでよかつたと思つています。

思春期の、純粹で脆く壊れやすい部分がつまく書けたか解らないけれど、楽しんでいただければ幸いです。

読んでくれてありがとうございます。
感想、評価をいただけると嬉しいです。

せつかくの休みなのに、結局予定を入れることができなかつた。一人きりの休みなんて久しぶりだ。まあ、一人つていうのもたまにはいいか。

目的もなくブラブラとウインドウショッピングをしながら歩いていると、数人の若者が一人の小柄な女の子を囲んでいた。ショートヘアの似合う、目鼻立ちの整つた目を見張るような美少女だった。小柄な体をより小さく縮めて、今にも泣きそうな顔をしている。

イヤだねー、そんなガツガツしてるから君たちモテないのよ?苦笑しつつ、スッとその場に向かい美少女に声を掛けた。

「こんなところにいたのか、探したじゃないか。ごめんねー、連れなんだこの子」

突然現れた若林に、戸惑つている美少女の手を引いて立ち去ろうとしたが、若者の一人に肩を掴まれた。

「おっさん、邪魔すんなよ!」

間髪を入れず、肩を掴んでいる手を捻り上げ仲間たちの方へ体を思い切り突き飛ばした。彼の体に当たつて仲間たちが怯んだその隙に「逃げるぞ!」と美少女の手を引いて走つた。後ろから彼らの怒声が聞こえるが、無視して走る。

警察手帳ないし、面倒も好きじゃないから逃げるが勝ちつてね。映画のワンシーンのような逃避行を頭に浮かべながら、彼女の手を引いて街中を走つた。

「もう大丈夫」

かなり離れた場所まで来てからそう言つと、白い頬を上気させ、息を切らしながら美少女は礼を言つた。

「あ、ありがとうございました!」

頭を下げる礼を言つたの子の声は

紛れもなく男のものだつ

た。

「え？」

固まつて動けないでいる若林に、少年は照れくさうに笑つた。

「君、男の子？」

「はい。僕、ミズシマトオルつていいます。本当にありがとうございます」といひびきを

いました

そんなバカな！俺が、男と女を間違えるなんて。三十二年生きてきて、こんなに衝撃を受けたのは始めてだ。

「い、いいんだよ・・・・・気にしないで。俺、人助けが趣味なんだ・

・・・あはは、じゃあ気をつけてね」

頭の中が混乱して、彼を残してフラフラと歩き出した。早くこの場を立ち去りたい。ありえない・・・・・視力が落ちたのかもしない。忙しかつたから、仕事で疲れてるのかもしれない。きっともうだ。俺は、疲れているんだ。

おそるおそる振り返ると、既に少年の姿はなかつた。

しかし、まあ 可愛らしい顔してる子だつたな。あれじゃあ、絡まれるのもしようがないよな。

ん？いやいや、違う違う！男の子にしては可愛らしい顔つてことだ。

いきなり立ち止まり、頭を抱えて勢いよく振つたので隣を歩いていた女性が一瞬体をビクリとさせジロリと睨んできた。

自分の新しい発見なんて絶対違うぞ。ないない、絶対ない。俺は女の子が大好きなんだから。

はあ 。今日は、もう帰ろ。
仕事してりやよかつた 。

なぜ俺は、こんなところにいるんだ。

右も左も鬱蒼とした森の中、こんな死にそうになりながら。

それは、今週に入つてすぐのことだった。

「秘境の温泉に行つてみたいな」

という篠原の咳きから始まった。

そこにちょうどいた猪又が、止せばいいのに大学時代ワングル部
だつたと言つたものだから大変だ。

「よし、じゃあ、行くか！」

篠原は、すぐさま秘湯行きを決め、猪又と話し合つて始めた。
勝手に行つてきてください、と報告書を書きながら他人の振りを
していた。俺には関係のないことだ。静かになるし、いいことじや
ないか、そう思つていた。

「行くぞー、望月！」

篠原が、当たり前のよひに声をかけてくる。何故、名指しで俺な
んだ。

「なんで俺もなんですか？！イヤですよ、遠慮します！」

全身全靈を込めて拒否した。俺の行きたくないオーラが伝わつた
のか、篠原はニッコリと笑つて頷いた。

「上司命令です」

まったく伝わつてない一つ。誰だーーこの人を管理職なんかに
したのはーー出てきて謝れー！

しかも今日は、藤堂がいないので誰も篠原を止めることができな
い。暴走する暴君は、俺の方を見て意地悪そうに「ヤリと笑つた。
ちくしょう、こんな上司嫌だー」。

「田村、お前も来いよ」

額に手を当て、田村に向かつて言つと澄まし顔で「イヤだ」と言

われた。

「なんでだよ！俺たちコンビだろー」

「関係ないね」

「コイツ！目すら合わせねえ。くそう、なんてヤツだ！」

「若さーん！」

向かいの若林のほうを振り向くと、若林はペンを持ったまま寝たフリをしている。

ヒドイーッ！

篠原と猪又が、いつの間にか俺の後ろに立ち、肩を掴んで「行こうな」と有無を言わせず決定してしまった。誰だよ、この人に『秘湯100選』なんて本渡したの！

俺だ。しかも大分前に、渡したのではなく、奪われたのだ。

「じゃあ、週末行こうな。望月喜べー。土曜日休みにしてやるぞ」これっぽっちも嬉しくないです。貴方たちのお守りをするぐらいなら、仕事していたほうがいいです。言つても無駄だから、言わないけど。ため息をつき、土曜日が雨になることを心から願った。

当口は、俺の思いとは裏腹に清々しいくらい晴れやかな天気になつた。

まあ、この天気は想定内だった。

でも、このメンバーは想定外だったよ。

「つまーつ！」

溜まつたストレスを吐き出すように、山に向かって叫んだ。かなりの声量を出して叫んだのに、ちつともスッキリしない。むしろ、重苦しい気分で一杯だ。

「望月、気合い入ってるな

間宮が、俺の背中をバンバン叩いて豪快に笑つた。何故、彼がここにいるのか誰か教えて。

「おーい、登山道はこっちだぞー」

篠原と猪又が、手招きをして俺たちに呼び掛けた。この先起こる

ことが、だいたい頭に浮かぶ。きっと

過酷な山登りになる。

案の定、一番に根を上げたのは 俺だった。

三人はそんな俺を気にせず、すたすたと前を歩いていく。なんてフットワークの軽い人たちなんだ。猪又はともかく篠原たちは四十代なのに。へタレな自分に悲しくなりつつ、歩く足を止めた。

「すみません、少し休憩しましよう」

荒い呼吸で三人に声をかけ、近くにあつた石に腰かけた。

「大丈夫か？ お前若いのに、足腰弱いなあ」

間宮がそう言いながら、俺のほうに寄ってきた。篠原と猪又も近くの石に腰かけ、水を飲みだした。道が狭く、デコボコしているので足にかなり負担がかかる。しかも、片側が崖になっているので、気をつけないと足を滑らせ転落してしまった恐れがあった。体力のみならず、集中力もかなり必要な登山道だった。

「あと、どれくらいですか？」

水を飲み、少し呼吸が整つてきたところで篠原に聞いた。

「あと、一キロも歩けば山小屋につくぞ」

あと一キロか。それなら、頑張れそうだ。大きく深呼吸をし、立ち上がる。今度は、猪又が最後尾になり、再び俺たちは歩き出した。「大丈夫か？」

猪又が心配になつたのか声をかけてきた。俺を誘つたことに、責任を感じているようだ。すべて篠原の責任なのだから、気にしないでいいのに。

「大丈夫。休憩もしたし、あと一キロなら問題ないさ」
後ろを振り返り、親指を立てた。

「こんなにちは」

篠原の声で前を向くと、男性の登山客が一人降りてきた。俺たちは、崖側に寄り男性とすれ違う。

「こんなにちは」

にこやかに男性も挨拶をした。

「こんなにちは」

山では、知らない人でも挨拶をするのが普通だ。山で何かあつたとき、見ず知らずの人でも協力し合い、助け合うという一体感から始まつたものらしい。それ以外でも、山頂付近の天候などを教え合つたり、情報交換の場にもなる。その後も、何人かの登山客と挨拶を交わした。

「上はすごく天氣がいいよ」

そんなことを言つてくれる人もいた。普通に挨拶をする、それだけのことなのに気持ちが晴れ晴れして、歩く足取りも軽くなる感じだ。

「望月、もう少ししたら感動するぞ」

後ろを歩いている猪又が、意味深なことを言つた。

感動 今してゐるさ。

そして森が終わり、田の前に広がつた草原に 僕は再び感動した。

雲が近い。白い煙のような雲が、すゞい速さで流れしていく。「ひごつとした岩がところどころ転がつてゐる草原。足許では、高原植物の小さな花々が転々と咲いていた。

ここは天国か ?

初めて山に登つたが これは、いい。心が洗われるようだ。

「あと少しだ、頑張れよー」

篠原の声ではつと我に返り、山小屋に向けて再び歩きだした。なんだか秘湯に入るのが楽しみになつてきた。

「山もいいだる」

隣を歩く猪又が、流れでいく雲を見上げながら言つた。

「そうだな。こんなに感動するとは 登る前は思つてもみなかつたよ」

「だろ?」

山は侮ると怖いけどさ

やつぱりまた登りたくなるんだよな。

そう言うと猪又は、満足そうに笑つた。

「なるほどね、確かにこれは癖になるかも」

先を歩いていた篠原が、嬉しそうに手招きしながら俺たちの名前を叫んだ。

あそこにも、はしゃいでいる大人がいる。

「写真撮ろうぜ、写真！居残り組の奴等に見せてやろつ」
えー、別にいいです。という俺の意見は却下され、まず篠原と間宮がポーズをとつた。

・・・・・ああ、それ見たことがあります。北の大地に銅像ありますよね。でも、山となんの関係があるんですか？俺を指さないでください。みんな見てるから。

満足そうな篠原が、お前らも一緒に写るんだ、と俺の手からデジカメを奪うと近くにいた中年の登山客にお願いします！とデジカメを渡した。

どんなポーズにするか迷つている一人に「普通に撮りましょう、普通に！」と言つたが無視され、敬礼のポーズをとることになった。誰かこの人たちを止めて。

写真を撮つてくれた礼を言つて画像を見てみると、すごいヤル気のない自分が写つていた。

俺 顔に出るタイプなんだな。さつきまでの感動も、一気に吹き飛ぶような篠原と間宮の強烈っぷりにて、藤堂の苦労を身をもつて感じ、心底同情した。

山小屋でガイドに頼み、秘湯へむかう。

そう、今までは山小屋に向かつために山に登つていたのだ。また、山深い道に入り、ここまでする必要があるのか？！と真剣に後悔をするようになつた頃、ガイドが鈴を渡してきた。

えつ なんですか、これ。

ガイドは「熊が出るから鈴を鳴らして歩け」とあつさつと言つた。

「あははは、熊ですか。そりやー大変だ・・・・・

もうイヤ。フラフラになりながら、それでも鈴はしつかり鳴らして歩いていると白いモヤが進行方向から流れてきた。温泉の湯けむりか？！

「もうすぐですよ」

ガイドの声に安堵するが、それから三十分ほど歩いてもまだ目的地に着かない。もうすぐってあとどれくらいですか？

流石に、篠原や間宮にも疲れの表情が見て取れた。後ろを歩いている猪又も、体力を温存するためか、さつきまでのようになくなつた。

「着きましたよー。ここが、みやま深山温泉です」

さつきのこともあり、ガイドの言つこと�이まいち信じられない。早足で、ガイドの横に立つと田の前に白い湯気がコラコラと立ち上る水溜まりがあつた。

ここが 秘湯、深山温泉。やっと着いたんだー。あまりの過酷な道のりに、目に涙が滲んだ。

男五人で湯船に入ると、茶褐色の少しづめるめのお湯だったが、じんわりと体が温かくなつていいく。頭がぼつりとして、疲れがとれていくようで気持ちがよかつた。

篠原と間宮が気持ちよさそうに鼻歌を唄い、猪又と俺は湯船に肩まで浸かりつゝとりしながら秘湯を楽しんでいた。極楽、極楽。

「さあ、では帰りましょう」

ガイドの声に男四人の顔が凍り付いた。

そういえば、これから帰らなくてはいけないのだ、地上へと。

温まつた体から熱が一気に引いていくのを感じながら、誓つた。もう一度と、山には登らないと。

それでも、またいつか 山に登りたいと思つ時があるだろうか。

あの天国のよつた景色を見るために。

呆然とした様子で歩いてくる男は、まるで死神にでも会つたかのように青白い顔をして生氣を失っている。一息をただ見つめ、ようよりと力なく歩く姿は異様でもあった。

彼は、ふとショーケースに飾られたソレに目をとめた。

生氣のなかつた瞳に異様な光が宿る。込み上げてくる怒りに身を震わし、理不尽な運命に牙を剥くよつて男は憎しみに満ちた瞳で睨んだ。

「こんな いんなこと、絶対許さねえ……」

またいつものが始まつた。面倒には巻き込まれないよつて、視線を逸らす。仕事をたくさん抱えてるのだ。相手になんてしてられない。

若林や田村、他の課の捜査員たちも、何事もなかつたかのよう机に向かつて仕事をしてい。藤堂にすべてをまかせているのだろう。

「めんなさい、藤堂さん。

お願ひします、藤堂さん。

「うおおおお、いざなわんー！」

間宮が、小林に泣きついている。きつと相も変わらず、娘さんのことには違いない。

「どうした、まーさん。由美ちゃんと何があつたのか？」

小林がなだめるように言つと、間宮は涙目で頷いた。

「由美に男から電話があつたんだ。週末に会つ約束をしていたんだ」それを聞いた小林は、間宮の両肩に力強く両手を置き「まーさん！今日は一緒に泣こう」と言つて涙ぐんだ。きつと、自分にも似たような経験があるのだろう。

俺の隣に座つてゐる藤堂が「まーさん、まさか電話を盗み聞きし

たんじやないだろうね？」と咎めるように言った。

「当然だ！得体の知れない男から電話がかかってきたんだぞ！」

「藤さん、わかつてやってくれ。子供を守るのは親の義務なんだ。子供を守るために、それぐらいやらなきゃいけないこともあるんだ。何かがあつた後じゃダメなんだ」

小林が、間宮の両肩をがつしりと掴みながら藤堂に諭すように言った。藤堂は、口元に人差し指を当て考え込む。

わあ、もつともらしいこと言って、藤堂さんを言いくるめようとしてる。しかも、藤堂さんも納得しかけてる。藤堂さん独身だし、さすがに小林にはかなわないのか。篠原がいないうちに何とか一人を止めて欲しいんだが。

突然、刑事部のドアが勢いよく開いた。

「ただいまー、あれ？ またまーさん泣きついてるの？ 今度は何？ 何？」

楽しそうに篠原が小林たちのもとに近寄つていいく。隣で藤堂がため息をついた。

帰つてきたー、もうだめだ。『ごめん、娘さんたち。デートは諦めてー。若い恋人たちの週末デートの危機に胸を痛めていると、間宮が正論を言うかのように胸を張つて言い放つた。

「だから、俺も一緒について行くことにした」

何を言い出すんだ！？ このバカ親父。

危うく叫びそうになつたのを、口元を両手で押さえなんとか堪えだ。そんな俺の様子を見て、若林が肩を震わせて笑いをこらえている。

藤堂は呆れ、小林は「そうしろ！」と背中を押し、篠原がお腹を抱えて笑い転げる。誰かこの大人を止めて。

「駄目だぞ、間宮」

低い高圧的な声が、間宮を諫めた。その声に反応して、間宮の体が一瞬ビクリとする。声のした方を見ると、小林に負けないくらい厳つい体の男がゆっくりと近づいて来た。

迫力がありすぎて怖い 組織犯罪対策課の警視、高遠勇だ。

他の課の捜査員たちも遠巻きに様子を伺っている。高遠が小林を

ひと睨みした。

「小林、間宮を煽るな。こっちは忙しいんだからな」
そう言つて、大人しくなつた間宮の腕を掴んで席まで連れて行つてしまつた。間宮は借りてきた猫のように、大人しく従つてゐる。バツが悪そうに小林は鼻を鳴らし、「ふん、生意気な」と高遠の後姿を睨んだ。二人は大学は違うが、学生時代からのライバルだったらしい。藤堂がホツと胸を撫で下ろし、篠原がつまらなさそうに口を尖らせた。

よかつた。若者の青春がぶち壊されなくて。俺のホツと緩んだ顔を見て、また若林が笑つた。若さん笑いすぎ。隣の田村は、我関せずと黙々と調書を書いている。相変わらず協調性のない男だな

「イツは。ため息をつき、机の書類に目を移す。

「さて、やるか」

やつと仕事に集中できる。溜まつた調書に取り掛かつた。

その日の深夜、事件は起つた。

暴力団の準構成員が、民間人を発砲、射殺したのだ。すぐに、所轄署に捜査本部が設置された。

容疑者が、暴力団組員ということもあり捜査一課と組織犯罪対策課で捜査本部が組織された。捜査本部に入ると、一角だけやたらガタイのいい強面の男たちが固まつてゐる。組織犯罪対策課の捜査員たちだ。間宮に負けず劣らずの強面ぶりに目を逸らせてしまう。

横目で、彼らを盗み見ていたら間宮の姿を見つけた。部下に何か言つてゐるようだ。何を言つてゐるんだ?気になつて、聞き耳を立ててみると「くそつ六道組め! よりによつてこんな時に、潰してやる」と怒り心頭の様子だった。

ああ、やっぱり間宮さんてば、そんなことだらうと思いました。肩をすくめつつ、捜査会議が始まると待つた。

容疑者の谷原耕介は、拳銃を持ったまま逃走。谷原は、清和会系暴力団六道組の準構成員だつた。最初、組同士の抗争かと捜査本部は色めき立つたがどうも違うらしい。今回の銃撃事件で、六道組は谷原の単独による犯行だと主張している。その証拠に、六道組は谷原の情報を率先して警察に流してきた。拳銃の入手も、一週間前にインターネットの闇サイトで購入していたことが谷原のパソコンの履歴から分かつた。

会議終了後、部屋から出て行く怪しい集団、ではなく、組織犯罪対策課の面々を見送り席を立つ。

俺たちは谷原の家の周辺の聞き込みをするため、田村の車に乗り込む。新車独特の匂いが、鼻につく。納品されたばかりの車で、ドライブやデートに使うことなく、しかも一番に助手席に乗るのが俺なんて。あはは、愉快だ。 つて、俺も人のこと言えなかつた。

谷原の部屋に入ると、部屋の中央に布団が敷いてあり、その上にノートパソコンが一台あるだけだつた。テレビもテーブルもタンスもない。洋服が何枚か、床に散らばつているくらいだつた。

「これまたシンプルな生活してたんだな」

寝るくらいしかできないんじやないか？「ここでどんな生活していたんだ。

「パソコンがあるだろ。電腦構成員だつたのかもな」

そう言つと、田村はパソコンを立ち上げた。パソコンのデータは、既に科捜研が調べている。何を調べる気だ？

インターネットに繋げ履歴を調べるが、特にたいしたサイトは見ていなかつた。というか、アダルトサイトばかりだつた。

「電腦ね。聞き込みに行くか」

ため息をつき、田村は立ち上がつた。

近所の人間は谷原について、あまり多くを語らなかつた。暴力団準構成員ということもあって、あまり近付かないようにしていたようだ。しかも、拳銃を持って今も逃走している。下手に何か言って、

撃たれでもしたらたまたまものではない。よけっこ、顎、口を硬く閉ざしてしまったようだ。

結局、何の収穫も得ることができず、口に床に寝ることになった。

捜査本部に戻ると、藤堂と間宮がすでに戻っていた。陣内は、前で篠原と話し込んでいる。俺たちが近付いていくと、間宮は部屋から出でていってしまった。

「お疲れ、望月たちは何か収穫あつた？」

俺たちは首を振りながら、藤堂の後ろの席に座つた。

「残念ながら。間宮さん、何かあつたんですか？」

藤堂は苦笑しながら、「由美ちゃんのことどちらよつとね」と言ってため息をついた。

捜査中なのにまだ週末デートのことが気になるのか？藤堂が俺が顔をしかめたのを見て再び苦笑した。

「あの遊園地は、間宮にとつて特別な場所だからね」

遊園地　　とは、週末、娘さんがデートする縁が丘遊園地のことか？

「信じられないかもしけないけど、七年前まではまーさん、由美ちゃんが幾つなのかも知らないほど仕事人間だつたんだよ」

肩をすくめながら藤堂が言った。

まさか、あの間宮が？！

七年前？　確か奥さんが亡くなつたのも。

「八千代さんが病気で亡くなつて、自分を責めて落ち込む間宮を連れて由美ちゃんが、縁が丘遊園地に行つて励ましたんだ。9歳の女の子が、どうしたら父親が元気になつてくれるか、一生懸命考えて。自分だつて悲しいはずなのにね」

藤堂は穏やかな声で「まーさんはね、由美ちゃんに救われたんだよ」と言って伏し目がちにほほ笑んだ。

「そうか。だからあんなに殺氣だつていたのか。大切な場所だつたんだ、間宮にとつて。

「氣をつけるよ、誰だか知らないが相手の男の子。なんで娘さんも

そんな場所選ぶかなあ。間宮が少し可哀相になつた。

他の捜査員たちも続々帰つてきたところで、本日一回目の捜査会議が始まつた。間宮は、険しい顔のままだつた。

谷原の部屋から押収した診察券をもとに、病院に聞き込みに言った捜査員から谷原が末期の胃ガンだつたことが報告された。本人にも、一ヶ月前に告知していたようで、余命半年だということだつた。

ガン

余命半年。

呆然としていると、被害者と容疑者の繋がりを調べていた捜査員から思いがけないことが報告された。

谷原と被害者が同級生だつたということだ。しかも、谷原は被害者に学生時代イジメられていたそうだ。さすがに、捜査本部は騒然とした。

逆恨み

?

「拳銃には、弾が残り七発」

篠原が険しい顔で呟いた。

イジメた人間を、まさか

殺していくつもりか？！

当時の同級生たちから聞いた話では、イジメが原因で谷原は学校を退学したようだ。そのままグレード、暴力団の構成員になり、挙げ句、余命半年と診断された。

逆恨み、と簡単に済ませてしまつていいのだろうか。

もしイジメがなければ、谷原の人生は違つたものになつていたかもしれない。最期も幸せなものになつていたかもしれない。

でも、僅かな命で谷原が選んだのは、イジメていた人間を殺すこと。

十年も前のことと と、イジメた側の人間は言うかもしれない。遊びだったと言うかもしれない。

でも、イジメられた人間は 十年たつた今でも忘れないなかつた。傷ついたままだつた。だからといって・・・殺人は許されることではないが。

「あと何人イジメに加わっていたんだ？」

篠原が、苦虫を噛みつぶしたような顔で捜査員に聞いた。

「あと、一人です。もう一人は、バイクの事故で一昨年亡くなつていました」

篠原は頷き、残りの二人に数人の捜査員を警護につけることを決めた。他の捜査員たちは、引き続き谷原の捜索にあたることとなつた。

深夜の住宅街で三発の銃声が鳴り響いた。被害者は、浅野高明、腹部を撃たれ出血多量で搬送先の病院で亡くなつた。彼は、谷原をイジメていた二人のうちの一人だつた。浅野を警備していた二人の捜査員も、撃たれて重傷を負い今病院の集中治療室にいる。谷原は、その場を逃走。緊急配備が引かれ、区内全域に検問を敷いたが谷原は捕まらなかつた。

「残り一人　弾はあと4発、か」

田村はハンドルを握つたまま黙つてゐる。

「やり切れないな。イジメが原因で、谷原の人生は狂つたわけだろ？しかも残りの命はあと半年・・・」

「本人の責任だろ」

田村は、前を見ながら冷たく言い放つた。

「・・・お前ね。それじゃあ、イジメられる人間が悪いとでも言いたいのか？」

それは、あんまりじゃないか？

「違うさ。イジメは、イジメる人間と止めずに見ている周りの人間が悪い。でも、その後の人生は違うだろ？学校を辞めたつて、別の学校に入り直すことだつてできた。定時制だつて、通信制だつて、フリースクールだつてある。でも、谷原はそれを選ばず、グレード、極道に入った。自分で選んだ道だ。それを、イジメた人間の責任にするのはお門違いもいいところだろ」

田村の言つてることは、確かに正論かもしれない。でも　みんながみんな田村みたいに割り切つて生きられるわけじゃない。強い人間ばかりじゃない。冷めた目でハンドルを握つてゐる田村をじつと見つめ、視線を前方に戻した。

「俺はさ、イジメられたこともイジメたこともないから分からぬけどさ、でも、もし自分がイジメられていたらと想像すると

ワイと思つたんだ。一人に対して、集団の人間が言葉や力でねじ伏

せて、毎日毎日、徹底的に自分を否定されてさ。 そしたら、や

つぱりすぐには立ち直れない、時間がかかると思うんだよ。学校に

入り直すとか、そんな簡単にできないと思うんだ・・・」

だから谷原だつて、自分を受け入れてくれた不良たちの仲間になつたんじゃないのか？居心地良く感じたんじゃないのか？そんなことを考えていると、「・・・お前みたいなヤツばかりだったら、世の中もう少し住み安かつただろうな」ぽつりと田村が呟いた。

白い外壁で洋風の可愛らしい家。玄関には、色とりどりの小さな花が、バランス良く植えてあつた。インター ホンを押し、カメラ越しに警察手帳を開き身分を明かした。

「I県警の望月と田村です」

困惑気味の住谷一樹が出てきた。イジメをしていた最後の一人だ。朝一番で開かれた捜査会議で、彼の警護に付くことが決まった。

「中へどうぞ」

住谷に促され、家の中へ入つた。広々としたリビングに案内されると、四人の捜査員が窓の近くに立つて外を伺つていた。昨日から、警護に当たつていた所轄の刑事たちだ。

「まったく迷惑な話ですよ。十年も前のこと今さら!」

住谷は苛立ちを隠そともせらず、ソファに乱暴に腰掛けた。仕事も休みを取られ、家にも何人の人間がすかずかと入ってきたのに対して辟易している感じだ。自分が命を狙われている、ということもあまり本気にしていないかもしねり。二人も殺されているのに・・・。

俺たちは、そんな住谷に対しても答えず窓の外の様子を確認する。ふと、ピアノの上に並べてある家族写真が目に止まつた。どこの写真館で撮つたのだろう、親子三人でにこやかに写つてている幸せそうな写真。

「娘さんと奥さんは?」

所轄の刑事に聞くと、「事情を説明して、今は奥さんの実家に。ここにいると危険だから、朝早い内に移動してもらつたんだ」と返事が返ってきた。

その方がいいだろう。それに、三人より一人のほうが守りやすい。住谷は、かなり苛ついているらしく四本目のタバコに火をつけた。テーブルの上に置いてある灰皿には、タバコの吸殻が山積みになっていた。

「俺たち、外の見回りしてきます。もしかしたら死角に隠れているかもしれないし」

家に四人も捜査員がいるなら安心だ。俺と田村は、外へ出た。

金曜日の午前中ということもあって、あまり外を歩いている人はいない。新興住宅街ということもあり、住谷の家の周りには十数戸の住宅があるだけで周りはほとんど分譲地だった。隠れるような場所も建物もない。狙うなら人通りの少ない夜、か。それでも、これだけ周りに何もなければこっちも警戒しやすい。

『十年も前のこと今さら!』

住谷の言葉が頭をよぎった。

十年の間、忘れてなかつたつてことだろ。それだけ苦しんだつてことだろ。・・・・なぜ苛立つ前に、そのことに気付かないのか。谷原は、今どこにいるのだろう。何を考えているのだろう。目の前に立ちはだかる死に怯えているのだろうか。イジメた人間への憎悪に燃えているのだろうか。

「どうして治療を拒んだんだ?」

余命半年 治療をすれば、の話だ。

治療を拒んだ谷原の命は、実際はもつと短い。それに、治療をきちんとすればもっと長く生きられる可能性だつてある。それをなぜ拒んだ?なぜ、殺すことを選んだ?自分の命を投げ打つてまで

。いつの間にか立ち止まつて考え込んでいた。

「余命を宣告されたのが、一ヵ月前。拳銃を購入したのが、二週間前。その間に、谷原に何かがあつたんだろう？」

そう言つと田村は、「一旦家の方に戻ろう」と言つて今来た道を引き返した。田村の後に続きながら考える。何か・・・それは一体なんだ？絶望の中にいた彼に何があつたといふんだ？

外にいると目立つので、車の中で待機し辺りを警戒するが結局谷原は姿を見せなかつた。捜査本部からの連絡でも、谷原に関する情報は得られなかつた。前の二つの事件でも谷原は深夜に襲撃している。俺たちは、そのまま田村の車の中で待機することにした。

「相手は、警官一人撃つている。気をつけろよ」

所轄の刑事から言われて、顔の表情が引き締まつた。外に出ると、街灯の明かりと十数戸の家の明かりがあるだけで、あとは冥府へ続いているかのような暗闇があるだけだつた。闇に引き込まれそうな感じで怖くなり、慌てて車に乗り込んだ。

そうだ　　谷原はもう四人も人を撃つている。限られた命のことを思えば、もはや怖いものなどないのかもしれない。そう考えると、背筋が冷たくなつた。

今回の事件では俺たち捜査員全員、拳銃の携帯を許可されている。でも　　いくら凶悪犯だからって人なんて撃てねーよ。窓の外の暗闇を見つめながら撃たれた警官のことを考えた。

「なあ、お前、拳銃で人を撃つたことあるか？」

「ない」

田村は、辺りに気を配りながら、缶コーヒーを片手に呟つた。

「だよなあ、谷原が現れたら　　お前はどうする？」

住谷の前に谷原が現れたら　　俺はどうする？

「さあな、そのときになつてみないとわからなーいさ」

田村は、俺を横目で見ながら、「お前、無茶するなよ」と釘をさしてきた。

「しないさ」

拳銃なんて使いたくないからな。ため息をつき、住谷邸を見るとリビングの明かりが暖かいオレンジ色を放っていた。普段ならあの部屋で、家族三人団欒しているところだろう。時計を確認すると十時を過ぎている。いや、子供は夢の中か。

周りの家は、ほとんど明かりが消え、辺りはより一層静まり返っていた。寝静まる街に、街灯の明かりだけが規則的な間隔で道路を照らしていた。

「今のところ、谷原が現れる様子はないな」

買い溜めしておいた缶コーヒーを、一缶手に取りプルタブを開けた。

「警戒してるのかもな、警察が動いてるのは一件目の発砲事件でバレてるからな」

田村も缶コーヒーを手に取った。

「警戒して、考え方直してくれるといいんだけどな」

谷原には、最期を共に過ごす人間がいなかつたのか。それともそれだけ憎しみが強かつたのか。

唯一、明かりの灯つている住谷邸を見つめた。光と影 正反対の生き方をしてきたんだな、一人は。ピアノの上に飾られた家族写真と何もない谷原の部屋が頭に浮かんだ。やっぱり 遺り切れない。

車中では、田村と何かを語ることもなく、ただ目の前に広がる暗闇の先から現れるかもしれない谷原に警戒し、住谷邸をじっと見つめながら過ごした。辺りが、太陽の日の光を浴びて明るくなつてきた。朝だ、長かった。ずっと、座りっぱなしだつたので体が痛い。座つたまま背伸びをしながら、ネクタイをさらに緩めた。

今日は住谷も仕事は休みだから、このまま家に籠つてもらおう。そう思つていると所轄の刑事が、袋を持って家から出て来た。おにぎりの差し入れだった。一晩中、缶コーヒーで空腹を凌いでいたので有り難かった。

おにぎりを頬張りながら、いつまで車中での待機が続くのか心配

になった。十月ともなると、深夜の車中はかなり冷えた。これをおと何日続けるのだろうか。夏も辛かつたが、冬も辛いよ。早く谷原が捕まつてほしい。

その時、携帯が鳴った。篠原からだ。

「谷原は現れたか？」

電話の向こうでは、捜査員たちが慌ただしく動いている様子が伝わってきた。

「まだです」

「奥さんと娘さんも無事なんだな」

「いえ、一人は奥さんの実家に今行っています」

俺の言葉に篠原は息を飲んだ。

「実家の電話番号は？」

「番号？ わからん。

篠原に急き立てられ、車を降り慌てて住谷の家に向かった。住谷に奥さんの実家の番号を聞き、篠原に伝えた。

「何があつたんですか？」

隣で、住谷が心配そうに俺の様子を伺っている。

「病院付近にある写真館で、住谷家族の写真がショーケースに飾つてあるのを藤さんたちが見つけたんだ」

篠原が電話口で、捜査員に指示を出しながら言つた。

「家族写真？」

ピアノの上に飾られている写真に目を向けた。俺の視線をたどるように、みんながピアノの上の写真を見つめた。

「もしかして・・・谷原はコレを見たんですか？！」

俺の言葉に、住谷の顔が見る見る青くなつていった。

「一ヶ月前、そのショーケースのガラスが何者かに割られたことがあつたらしい」

篠原の話を、所轄の刑事や田村に伝えた。篠原から次の連絡があるまで、俺たちはこのまま住谷の警護にあたる。住谷は顔面蒼白になつて、その場に座り込んだまま動かない。

「大丈夫ですか？」

近寄つて声をかけると、「か、家族は関係ないじゃないか！」と俺の腕を震える手で掴みながら、住谷は上ずつた声で叫んだ。

「落ち着いて下さい。まだ、ご家族が狙われていると決まったわけではありませんから」

住谷の肩に手を置き、なだめるように言いながら彼をソファに座らせた。

「連絡を待ちましょう」「う

頭を抱え呻く住谷にそう言つと、手元の携帯に視線を移した。今、捜査本部にいる捜査員が奥さんの実家に連絡を取つてゐるところだ。何もなければいい。張り詰めた空氣の中、篠原からの電話を待つ。

五分経つても電話はかかるこない。確認の電話くらいすぐできそうなものなのに。まさか・・・何かあったのか?不安な思ひが頭を過ぎつた時、やつと電話がかかってきた。慌てて電話に出ると、「娘さんが　いなくなつたそうだ」と篠原が、苦しそうな声で呻いた。

「そんな!?　いつ?」

住谷が、体を震わせながら俺の横へ駆け寄つてきた。所轄の刑事や田村も、こつちをじつと見つめている。

「娘さんが、いなくなつたそうです」

そう言つと、住谷が口元を両手で覆つた。

「彩花!…どうして彩花が!…」

「ついさつきまで庭で遊んでいたようなんだが、目を離した隙に姿が見えなくなつたらしい。今、捜査員たちが全力で探してゐる。必ず見つけ出すから、お前たちは住谷の警護に集中するんだ!」

そう言つと篠原は電話を切つた。篠原の電話の内容を所轄の刑事や田村に伝え、実家へ向かおうとする住谷を数人がかりで取り押さえ、落ち着かせた。

「彩花に何かあつたら!　彩花に　」

口元を両手で押さえながら、震える声で住谷が呻いた。

その時、家の電話が鳴り住谷の肩がびくりと反応した。

「実家からかも！彩花が見つかったのかもしれない！」

表情を緩ませながら、電話に走り寄り受話器を乱暴に取り上げた。

「もしもしーー？」

だが、受話器の向こうから聞いたのは奥さんでも実家の両親でもなかつた。

「住谷、久し振りだな。俺のこと覚えてるか？」

押し殺したような低い男の声。

「あ、お前　　た、谷原か？」

見る見る表情を曇らせ、住谷は俺たちにすがるような目を向けた。

俺たちは住谷のもとへ駆け寄ると、スピーカーのボタンを押した。

「お前の娘、かわいいなあ」

スピーカーからは、粘着質な男の声が聞こえてきた。住谷は額に脂汗を浮かべながら、受話器を両手で握り締めた。

「娘を　　娘に手を出すな！」

受話器の向こうの谷原は「警察いるんだろ？お前に手が出せないから娘を殺してやるよ」と楽しげに囁つた。

「やめろー！やめてくれ！娘は関係ないだろ！頼む、やめてくれ！」

住谷は、必死で受話器の向こうにいる谷原に頼み込む。

「頼む、やめてー！やめてくれー！ひやはははは」

ふざけた口調で谷原は、住谷の言葉を何度も繰り返し囁つた。

「住谷、娘を殺されたくなかったら、縁が丘遊園地にお前一人で来い

い

「そう言つと電話が切れた。

すぐに谷原から電話があつたことを篠原に伝えると、篠原が舌打ちをした。

「住谷を遊園地前の駐車場まで連れて來い。絶対一人にするな！」

篠原からの指示を伝えると住谷は、「冗談じゃない」と叫んだ。

「一人で行かせてくれ。じゃないと彩花が殺されてしまー！」

住谷は、目を真つ赤に充血させ俺たちに懇願した。

「住谷さん。今の谷原は、何をしてもおかしくない状態なんです。貴方を撃つた後、娘さんも撃つかもしれない。そうさせないためにも、我々と一緒に行動して下さい。大丈夫、貴方も娘さんも我々が守ります」

俺の言葉に失望の色をあらわにしてうなだれる住谷を促し、田村の車に乗せた。警察と一緒に行動することが、家族にとつてどれほど恐怖か。それでも、一人で行動させるわけには行かない。

所轄の刑事たちは、別の車で後ろからついて来ている。ところが、土曜日ということもあり道が渋滞していてなかなか前に進まない。こんな時に一瞬に座つている住谷の焦りと苛立ちは、ピークに達していた。

「どうして俺たちがこんな日に……どうしてこんな理不尽な目に合わなきやいけないんだ！」

怒りに震える拳を固く握り締めた。

「谷原もそう思つただろうな、あんたたちにイジメを受けた時」運転手の田村が、前を向いたまま冷たく言い放つた。

「な、それは十年前の……」

「十年前だろうが、二十年前だろうが理不尽だと思つたんだよ、谷原は」

田村の容赦ない言葉に、住谷は動搖した。

「あんた、谷原に悪いことをしたとすら思つてないだろ？ 谷原のことも忘れてただろ」

「いい加減にしてくれ！ そんな昔のこと！ ただの子どもの遊びじゃないか！ それを今さら それに家族は関係ないじゃないか！」

住谷が、顔を真っ赤にして怒りをあらわにした。

田村……気持ちはわかるが家族を刺激するな。

「谷原のしている行為は、卑劣で許されないことです。娘さんには一切関係のない逆恨みなのだから。私も許せません。だから、谷原を必ず逮捕します。娘さんも無事助け出します」

俺の言葉に、住谷が安堵した様子でこっちを振り向いた。

「でも、住谷さん。想像してみてください。貴方の娘さんが、貴方がたが谷原にしたことをされたとしたら 貴方はどうしますか？ 子どもの遊びだからと笑つて許すことができますか？」

隣に座っている住谷の目をまっすぐ見据えた。住谷が顔を強張らせる。

「それは・・・・

「あなたは忘れちゃいけないんだよ、自分がしたことを。父親なら、なおさらだ」

言い淀む住谷に、田村が容赦なく言い放った。

episode19 - 4 家族写真（後書き）

遅くなりました。
楽しんでいただければ幸いです。

渋滞を抜け、やつとのことで遊園地前の駐車場に着くと、多くの捜査員が既に待機していた。遊園地サイドには連絡済みで、新たな来場者は入場できないようになっていた。中にいる客も少しづつ避難している。

今のところ、遊園地内で谷原と彩花らしき人物は見つかっていない。といつても、週末の遊園地には、家族連れが押しかけているので本人かどうか見極めるのは不可能に近い。

「遊園地内の場所の指定はなかつたんだな？」

篠原が、俺たちに確認してきた。俺たちが頷くと篠原は「じゃあどこに行けばいいんだ」と舌打ちした。外の遊園地の異変に、隣接されている大型ショッピングモールの客も少しずつ集まってくる。遊園地から避難させても、客がここに流れていれば意味がないではないか。

「流れ弾に当たる可能性もあるから、隣の客もすべて避難させるんだ」

篠原が何人かの捜査員に指示を出した。指示を受けた捜査員たちが、走り出そうとした時、女の子の声がした。

「パパー！」

その声に捜査員たちが一斉に振り向くと、遊園地の入口に子どもを抱きかかえた谷原が立っていた。

「彩花！」

前に飛び出そうとする住谷を制止し、庇ひように住谷の前に立つた。

「やっぱり警察を引き連れて来たな、卑怯者のお前らしいな」

谷原が顔を歪めて笑った。数人の捜査員が、谷原の周りを取り囲む。訳が分からぬ買い物客たちは、その様子を固唾を飲んで見ていた。

「谷原、子どもを放すんだ」

篠原が叫ぶが、谷原は住谷を見ただま動かない。

「みんな、動いたらこの子殺しちやうよ。展望台から見てたんだ。警察がたくさん来たから、俺から出迎えに来てやつたよ。何でか分かるか？」

谷原は、おかしそうに嗤い、買い物客の方を見た。

「だつてさ、たくさんの観客の前で住谷がどんな奴なのか披露したくて遊園地選んだのに、客がどんどん避難しちまつたからさ、こっちに来たわけ」

目を細め住谷を見つめる谷原に、住谷は震えながら子どもの名前を呼ぶだけだった。

「お前、ヒドい奴だつたよなー、俺の前にも何人もイジメてたよな。忘れるだろ？ イジメた奴らのことなんて」

谷原は、大声で周りの人間に聞こえるように話し出した。

「ムカついたんだろ？ イジメを俺に注意されて、だから俺をイジメの標的にしたんだよな。イジメてた人間を仲間に引き込んでさ」抱きかかえていた彩花に谷原は笑顔で「ヒドい奴だよねー」と言った。彩花も、笑顔に答えるように笑った。

拳銃はどこだ？

子どもの体で右手が見えない。今も、拳銃を握っているのか？ 谷原をじつと見据えながら、動くことができないこの状態に苛立ちを覚える。後ろにいる住谷は「彩花には手を出さないでくれ」と泣きながら谷原に訴えた。彼が前に飛び出さないよう、二つとも神経を集中させないといけない。

「やめてくれ！ つて叫んでもお前は嗤つてたよな」

谷原は、話しながら顔を悔しそうに歪ませた。

「お前もろくな人間になつてないと思ってたのに・・・何だよ、あの写真。 こんなのは、おかしいじゃねーか！」

谷原は吐き捨てた。

やっぱり・・・谷原はあの家族写真を見たんだ。死を宣告され

た絶望の中で、見てしまったんだ。

「お前がどんなに住谷の非道をこじこじいる人間に訴えたところで、今、お前がしていることは許されることはないんだぞ！子供に罪はない！その子を放すんだ！」

谷原は憎悪を込めた目で、遠巻きにこちらを見ている買い物客たちを睨んだ。

在りし日のクラスメイトたちのように、ただ見てはいるだけの観客たち。谷原にとつては、見てはいるだけの彼らも憎しみの対象なのかかもしれない。この騒ぎで、どんどん買い物客が集まってきている。今ここで拳銃を撃つたら・・・パニックになるのは間違いない。谷原はそれを狙っているのか？ 谷原が抱きかかえている彩花は、今の状況がわかつてないのだろう、笑いながら住谷に手を振つていった。

横目で田村を見ると、田村の横にいる間宮がこっちを見ていた。俺ではなく、泣きながら娘を放すように懇願している住谷を哀れむように見ている。

「もひ、終わりにしてひ住谷。隠れてないで、前に出て来いよ」
子どもを抱え直し、拳銃を持った右手を住谷の前に立っている俺
に向けて構えた。

見物していた買い物客からいくつもの悲鳴が上がり、辺りは騒然とする。

「やめるんだ。そんなことしたって何の解決にもならないだろー！」
前に出て行こうとする住谷を押さえながら、谷原に向かつて叫んだ。

「望月！」

田村が叫ぶが、それよりも先に拳銃が火を噴いた。

「パパア！」

女の子の叫び声と、一発の銃声が鳴り響いた。

あれ・・・痛くない。

閉じている目をおそるおそる開くと、間宮が真っ赤に染まつた左肩を右手で押さえて俺の前に立つていた。

「ま、みやさん！」

なんで・・・俺を庇つて撃たれたのか？！ふりつゝ間宮の体を、後ろから慌てて支える。

「まーさん！」

田村と篠原と藤堂が、駆け寄ってきた。谷原を睨んだまま、皆のように動かない間宮に谷原も俺も圧倒されていた。

「おい、まだ倒れないぞ。あと一発、俺に撃ち込むか？谷原、もういいだろ？お前がやつることは、住谷がお前にやつしたことよりも、もっと卑劣なことだ。お前まで腐った奴になつてどうする。その子には何の罪もない！子どもを放すんだ！」

脂汗を浮かべながら間宮が、谷原に向かつて叫んだ。谷原は、目を見開いたまま動かない。やがて、谷原の右手から拳銃が落ちた。

「・・・くそつ！ どうして、俺だけがこんな目に・・・」

谷原が悔しそうに呻き、その場に膝を折る。抱きかかえられた彩花は、泣いている谷原を見てしゃがみ込んだ。

「どうして泣いてるの？パパにイジワルされたの？大丈夫？あとで彩花がパパにめつてしてあげるね」

谷原の頭を撫でながら彩花がそう言つと、谷原は顔をあげて大粒の涙を流した。

「・・・優しい子だね、ありがと」

そう言って、優しく彩花を抱き締めた。

「お父さんがあそこで待つてたから、行つていこよ

谷原がそう言つと、彩花は一ツ口笑い、「ばいばい、またね」と言つて住谷のもとへ走り出した。

「パパー！」

座り込んでうなだれていた住谷は、顔を上げ彩花を強く引き寄せ抱き締めた。

「彩花！・・・よかつた。無事で・・・よかつた」

「うん、楽しかったよ。おじちゃんと観覧車に乗つたんだよ」

彩花が嬉しそうに言つた。

「・・・・そうか、楽しかったか・・・よかつた」

住谷は、彩花をもう一度、優しく抱き締めた。

谷原は取り囮まれた捜査員に現行犯逮捕され、警察車まで連れて行かれた。住谷が駆け寄つていくと、谷原は目を逸らせ車に乗り込んだ。

「谷原、すまなかつた」

住谷の謝罪の言葉にも、谷原は顔を歪め何も言わなかつた。車に乗り込んでも谷原は一度も住谷を見ようとはしなかつた。やがて車は発進し、谷原の乗つた車が見えなくなるまで住谷は頭を下げ続けた。結局一人は和解することはできなかつた。

十年という歳月の間、苦しめ続けた過去の記憶と心の傷。それは、すぐに消えるものではない。すべてをなかつたことになんて、できはしない。そんな簡単に、割り切れるものではない。時間が解決してくれる、というけれど・・・。彼に残された時間は、あまりにも短く儚い。

「あれほど、無茶するなつて言つただろーが！」

田村が、鬼のよつな形相で怒鳴つた。

あわわ、すまん。拳銃をむやみに使つなつてことかと思つてた。

田村に説教されている俺の横で、篠原と藤堂が間宮の傷口の応急処置をした。無愛想のまま、住谷親子を見つめている間宮はどこかホ

ツとした様子にも見える。

彼は、たぶん我慢できなかつたのだ。父親と娘が、目の前で引き裂かれそうになつてゐるのを、見ていられなかつたんだろう。俺がそんなことを考へてゐると、白いワンピースを着た女の子が駆け寄つてきた。

「パパ！・・・のばかっ！！」

息を切らして涙ぐみながら、処置を受けている間宮を睨んだ。

あれ、この子・・・娘さんか？

間宮を見ると、その言葉にショックを受けたのかがつくりと肩を落としている。ああ・・・可哀相になつてきた。

「パパに何かあつたら、私どうすればいいの？私を一人にしないで・・・もう危ないことなんてしないで」

震える声で由美はそう言つと、声を上げて泣き出した。怖かつたのだろう、硬く握つてゐる手が震えている。間宮は頭を下げ「由美、すまん」と娘を抱きしめ、一緒になつて泣きだした。篠原と藤堂は、そんな二人を見守つてゐる。

「さあ、まーさん病院行くぞ」

篠原が立ち上がり、間宮の右肩に手を置いた。

「そういえば由美、遊園地に行つてたんじやなかつたのか？」

立ち上がりながら、間宮が言つと彼女は「違うよ」と首を振つた。

「パパの誕生日プレゼント買いに、ここの中に入つてお店に買い物に來たの」

そう言つて、持つてゐた紙袋をひょいと持ち上げた。

「でも、ライオンの前で待ち合わせつて・・・」

しまつた、というように間宮は口元を手で押さえた。その様子を見て、由美が間宮を睨んだ。

「パパ！また電話、盗み聞きしたの？」

怒る彼女に「いつものことじゃないか」と篠原が、笑いながら言った。

「ライオンつて言つてもアレだよ

口を尖らしながら由美は、ショッピングモールの入口にあるライオンの銅像を指差した。なんだ・・・。間宮の早とちりじゃないか。そう思つて呆れていると「なーーーーーーーー」と、間宮が叫びながらライオンに向かつて指を差した。震える指の先を田で追うと、茶色い髪をした男の子がこつちに向かつて会釈した。

「またアイツかーつ！！」

間宮が彼のもとへ向かつて行こうとするのを、篠原と藤堂が制止し無理矢理車に押し込んだ。

「藤さん頼むなー！」

暴れる間宮となだめる藤堂を乗せた車は、そのまま病院に向かつて走り出した。

藤堂さん・・・こんな時にも。同情しながら、車を見送った。やれやれと篠原は頭を搔いていた。

「由美ちゃん、もう家に帰る？」

篠原が由美に向き直りそう言つと、彼女は頷いた。

「パパ、今日、家に帰れますか?」

由美が、心配そうに聞くと篠原は、たいした傷じやないから、す

「ぐ戻るよ」と言つて笑つた。

・こんな時にも、そのキャラは健在ですか。

「すぐ戻るから、待つてなさい」

篠原が、穏やかに笑って由美の頭に手を置いた。

うとする由美に「彼氏によろしく」と篠原が言つと、くるりと振り返り、顔をしかめて否定した。

「違います！ ただ買い物について来てもらつただけだよ！ アイツ、私より弱いし」

それを聞いて、篠原は苦笑した。

無自覚の日本一少女か。プラス娘命の鬼父。大変だな・・・・あ

の男の子も。

田村と、二人の楽しそうな後姿を見送りながら、茶髪の男の子に
エールを送りたくなつた。

episode19 - 6 ハール（後書き）

仕事が忙しくなり、なかなか更新できませんでした。
なんとかこのお話を終えることができよかったです。
今回も、展開が速くてすみません。

間宮が撃たれて、一週間が経つた。

篠原の席には、左肩を固定した間宮が机に腰掛け篠原と談笑している。胸元には、由美からの誕生日プレゼントのネクタイピンが光っていた。

朝、出勤した時に間宮がいるのに驚いた。慌てて間宮のもとに行くと、ネクタイピンの自慢を二十分ほど聞かされた。全治一ヶ月の怪我なのに、なんで安静にしてないかな。怪我をさせた負い目もあり、落ち着かないではないか。早く治つてほしいのに……。ため息をつき、書きかけの書類に目を落とすと、休みのはずの小林が部屋に入ってきた。

「あれ、こばさんどうしたの？」

篠原が尋ねると、小林は落ち着かない様子で「ちょっとな」と曖昧に返事をした。間宮の姿を見つけると「まーさん、もう大丈夫なのか？」と、席に着きながら小林が心配そうに尋ねた。

「大丈夫です。それに、由美を残して死ねませんしね」

豪快に笑うと、ネクタイピンを自慢げに小林に見せた。

「ネクタイピンなら、毎日つけられるからって選んでくれたんですねー」

「デレデレになりながら話す間宮に、小林は羨ましそう」「よかつたな」と言つた。

何だか様子がおかしい小林に、藤堂は首をかしげ「こばさん、何かあつたんですか？」と尋ねる。小林は、面倒臭そうに手をヒラヒラとさせて「何もないさ」と言つと、机に溜まっていた書類を手に取つた。

「ところで、あの男の子なんて名前なんだ？ホレ、由美ちゃんの彼氏」

篠原が、間宮のほうに向き直り、からかうように言つと「彼氏じ

やない！」と間宮が篠原を睨んだ。

「あー、そうだった、そうだった。まだ、彼氏じゃなかつたな」笑いながら意地悪く言つ篠原に、間宮は「この野郎！」と襲い掛かり、関節技をかけた。

「痛い、痛い。悪かつたつて」

篠原の体を張つたスキンシップに呆れています「望月に婿入りしてもらうんだもんな」と関節技をかけられたままの篠原が言つた。

なつーこの人は……！

言い返そつと口を開きかけた時、小林がギロリと篠原を睨んだ。
「何言つてる！刑事が婿なんて！絶対反対だ！！」

あまりの剣幕に、篠原も藤堂も呆気に取られていた。俺も、驚いて口を開けたまま固まつていた。

確かに、刑事の妻なんて並大抵の覚悟がないとできないよな。ん？てことは、俺結婚できないかもしれない？衝撃的な現実にショックを受けていると、追い討ちをかけるように間宮が言つた。

「そうか、そうだな。由美に苦労かけさせるわけにはいかん！望月、この話悪いが無かつたことにしてくれ」

篠原から離れ、一人考え込んでいた間宮が俺に向かつてキッパリと言い放つた。

ひどい！

ていうか、まったくその気はありませんでしたけど。勝手に話進めて、勝手に終わらせないで……。ガックリと頭を垂れて落ち込んでいたら「残念だつたな」と田村が一ヤリと意地悪く笑つた。

更新がかなり遅くなつてスミマセン。

「娘の相手が刑事なんて絶対反対だ。俺は認めん。まして、結婚なんてまだ早すぎる」

小林は、鼻息を荒くしてまくし立てた。間宮も大きく頷いた。

「こばさんの言うとおりだ。結婚なんてさせるか」

篠原が軽い調子の口調で、「じゃあ、できちやつた結婚なんて…。」と言いかけると、二人は篠原を睨み付け「論外だ!」と怒鳴つた。

肩を竦めて篠原は苦笑した。

「篠さん、煽るなよ」

藤堂が額に手を当てため息をついた。

「悪い、悪い。面白くてさ、つい」

篠原が楽しそうに小声で言つと、藤堂は顔をしかめて篠原を睨み、再び大きなため息をついた。

藤堂さんも大変だ、と田村を見ると、黙々と報告書を作成していく。そうだよな、関わらない方がいいよな。俺たち忙しいんだから。田村を見習い、小林たちの熱い父親論をBGMにしながら といふか、聞きたくなくても入つてくる いくつかの報告書を完成させた。有能な自分に惚れ惚れする。

「まーさん、行こう

「行きましょう」

小林と間宮は、連れ立つて食堂へ向かつて部屋から出でていった。

「やれやれ、先が思いやられるな」

「でも篠さん。こばさんの様子おかしかったね」

藤堂が心配そうに言つと、「咲希ちゃんに、彼氏でもできたんじやないか?」頭の上でを組み、椅子に深く体を沈めた篠原が面倒臭そうに言つた。

「そうかな」

「そうさ」

小林の娘は、中警察署の会計課に勤務している。確かまだ二三歳だったはずだ。小林警視の娘と知つてて、手を出す警官なんていないよ。愛娘家としても有名だしな。よっぽど惚れてなきゃ無理だよな。手が空いたので、ぼんやりと考えていると、ドアが開き、髪を肩まで伸ばしたきれいな顔立ちの女性が部屋に入ってきた。

「あれ、咲希ちゃん。どうした？」

篠原が驚いた様子で女性に話しかけた。今ちょうど話題にしていた彼女が急に現れたので驚いたのだろう。それにしても・・・娘は父親に似ないのか？間宮といい、小林といい。

「父、来てませんか？」

「来てるよ。今、まーさんと食堂に行ってるよ」

「やつぱり！」

咲希は頬を膨らませながら咳いた。

「咲希ちゃん、なにか合つたの？」

心配そうな藤堂に、咲希は恥ずかしそうに照れ笑いをした。

「会わせたい人がいるから家にいてね、って言っておいたのに逃げたんですよ」

篠原と藤堂は、顔を見合せた。

「おめでとう」

最初に言葉をかけたのは、藤堂だった。

「相手は？」

「今、廊下にいるんですよ。篠原さんたちも知つてると思ひナビ、中警察署の捜査一課の坂下登さんです」

凍りつく空気。他の課の刑事たちも一斉に廊下へ目を向けた。篠原が、さすがに困った顔をして藤堂を見た。藤堂も、なんて言つたらいいかわからない様子だ。そりやそうだ。さつきまで、あれほど刑事はダメだ、と小林が言つていたのに、娘が選んだ相手が刑事だつたのだから。

「さて、田村。仕事も一段落したし・・・食堂行くか

この場にいるのは危険だ、と感じ田村に声をかけると、「そうだな」とすぐ返事が返ってきた。一人で席を立つた時、咲希が新たな爆弾を刑事部に投下した。

「実は、子供ができたんです」

極寒の世界に放り出された俺たち。ぞろぞろと他の課の刑事たちが、逃げるように部屋から出て行つた。俺たちが絶句していると、咲希が頭を搔きながら「えへへ」と笑つた。篠原も藤堂も顔を見合わせ、首を振つた。

「咲希ちゃんわあ、もう少し、こばさんのこと考えよつよ」

額に手を当て篠原がため息をつくと、咲希は「面田ありませ」と申し訳なさそうに謝つた。

「しようがない、めでたい事だしな。一肌脱ぐか！」

咲希の頭をぽんぽんと叩きながら眞づ篠原に、彼女は嬉しそうに揉むポーズをした。遠慮はいらないよ、と言わんばかりに胸を反らせ、「じゃ、藤さんお願ひね」と藤堂に丸投げする篠原。ほんとこの人、質が悪いよ。

藤堂はいつものことなのか、そんな篠原に何かを言つわけでもなく、咲希の肩を大事そうに抱えて、ソファに座らせた。

「赤ちゃんのためにも、安静にしてないけないよ」

咲希は声を詰まらせながら「「ごめんなさい」と謝った。

「私に謝ることはないんだよ」

「お父さん、怒るかな」

「「いばさんは、咲希ちゃんのこと本当に大切に思つているからね。咲希ちゃんだつて分かつているよね」

咲希は頷き、目を伏せながら呟いた。

「悲しむ、かな・・・」

「どうして？結婚も出産も喜ばしいことじやないか。ただ、順番が少し変わつただけだよ。」「いばさんだつて、喜ぶぞ」

藤堂は穏やかな口調で言つと、咲希の頭を優しく撫でた。

「娘を奪われた！つて悲しむけどな。父親なんてそんなもんさ」

急に割り込んできた篠原の言葉に「うん」と咲希は頷き、ハンカチで涙を拭つた。

三人の様子を見ながら、廊下で一人緊張しているであろう坂下を思つと居た堪れなくなつてくる。坂下は、若林の同期で俺も何回か一緒に飲みに行つたことがある。若林ほど整つてはいないが、それでもモテる部類に入る顔立ちをしている。性格も穏やかで、藤堂に似てゐるな、と何度か思つたことがある。遊びで女性と付き合つような男ではない。それは、篠原も藤堂も分かつてゐるだろう。藤堂さん、お願ひします。すべてを藤堂に託し、俺たちは部屋を出た。廊下に出ると、ガチガチに緊張している坂下と目が合つた。坂下は、照れくさそうに笑つて「やあ」と手をあげた。

「思い切つたことしましたね、坂下さん」

彼は肩を竦めて「好きになつた人の父親がたまたま小林警視だつたつてだけさ」と言つた。いやいや、すごいことしましたよ？

「今、小林警視は間宮警部と食堂に・・・」

廊下の向うから歩いてくる小林と間宮が目に入り息を呑んだ。

「おう、坂下じゃないか。久しぶりだな。望月たちに何か用か？」
にこやかに坂下の肩を叩き、間宮と部屋に入つていつた。

「あ、じゃあ」

坂下は、二人の後を追つて部屋に入つていつた。健闘を祈りながら、早足で食堂へ向かうと、「ふざけるなああ」と小林の泣き叫ぶ声が廊下に響き渡つた。

俺と田村は顔を見合わせ、大きなため息をついた。

episode 20 - 3 小林の災難3（後書き）

「EQUATION」の長編小説を書いているので、しばらくお休みさせていただきます。
もうひとつのお話は、更新していくつもりなので読んで möchtenべるとおれしいです。

パラリラパラリラ、パラレル（前書き）

小説ではなく・・□語文中心の文章です。
読みづらかつたら、じめんなさい。

パラリラパラリラ、パラレル

ある学校の日常を書いてみました。

質問編

「篠原先生、質問いいですか？」

「おう、望月。質問の受付は終了しましたー。じゃ」

「あ・・・そ、うですか」

「若林先生、質問いいですか？」

「ん、望月。先生は、女子の質問しか答えないが、特にT.O.P.Sのチョコレートケーキで答えてあげようじゃないか」「やめときます」

「里見先生、質問いいですか？」

「え、あ、はい、望月君。あの、えっと、何かしら?」

「あ、いえ。やっぱりいいです」 意気地なし

「田村先生、質問いいですか？」

「質問するほどの難問あつたか?」

スタスタスタ 立ち去る音

ドスドスドス 壁を殴る音

保健室編

ガラッ。

「藤堂先生、気分が急に悪くなりました」

「大丈夫かい?」

「満室だ」

腰にサロンバスをはつてベットで呻く篠原先生。
「失礼しました」

ガラッ。

「藤堂先生、気分が急に悪くなりました」

「大丈夫かい？」

「おやおや、大変だねえ」

藤堂先生とまつたりと「コーヒーを飲んでいる若林先生。

「あれ、先生、授業は？」

「んー、自習」

「・・・先生」

ガラッ。

「藤堂先生、気分が急に悪くなりました」

「大丈夫かい？」

「も、望月君大丈夫？」

フランフランとベットから起き上がる里見先生。

「里見先生こそ、大丈夫ですか？」

「ええ、怪我した生徒の地を見たら気分が悪くなつたの。今、どくわね」

「いえいえ、先生の使つた後・・・じゃなくて先生のほうが大変そうだからいいです！」 意気地なし

ガラッ。

「藤堂先生、気分が急に悪くなりました」

「大丈夫かい？」

「ＺＺＺＺＺＺＺ」

ベットで爆睡する田村先生。

「田村先生・・・の授業だったのに。今。しかも、自習だった」

「修学旅行だが、夜中に部屋から出た奴は・・・わかるよな
ニヤリと笑いボキリボキリと指を鳴らす篠原先生に、みんな「ゴクリ
と息を飲む。

「修学旅行だが、寂しくて眠れない女子は先生のところへ来なさい。
男子は羊でも数えてなさい」

若林先生の言葉に、クラス全員の女子が盛り上がる。
若林先生がいる限り、俺たちに青春はない。

「修学旅行だけど、何かあつたら先生のところに来なさいね
里見先生の言葉に、クラスの男子が盛り上がる。
「篠原先生がいらっしゃるから、大丈夫よ
みんなゴクリと息を飲む。

「修学旅行だが、俺は9時に寝る」
「え、田村先生。あの・・・」
「寝る」
「あ、はい。わかりました」

「暑いー」

「ん、望月。若いくせに軟弱だな。よし、女子は先生とプールへ行
くか。あ、男子は教室で自習でもしてて」

「先生・・・」

「暑いー」

「あら、望月君。大丈夫? もしかして、熱射病? 日射病? 新種のウ
イルスかも。どどどどうしましょ。救急車呼びましょう」

「あ、いえ、大丈夫。ほんとに。落ち着いてください」

「暑いー」

「つるさいぞ」

「田村先生は、暑くないんですか?」

「暑い」

「暑そうに見えません」

「ふつ」

小馬鹿にしたような笑みを浮かべる田村先生。

スタスタスタ 立ち去る音

ドスドスドス 壁を殴る音

悩み相談編

「篠原先生、俺、悩み事があるんですけど」

「ほー。そういう時はな、誰かに相談するといいぞ。じゃな」

「・・・相談、する相手間違えたな」

「若林先生、俺、悩み事があるんですけど」

「お、望月。どんな悩みだ? 恋の悩みか? 全校女子生徒の事ならす
べて把握してるから何でも聞いてくれ」

「恋の悩みができるても、先生には絶対に相談しません」

「里見先生、俺、悩み事があるんですけど」

「まあ、望月君。大丈夫よ、悩みは誰でもあるものよ。先生に話してみて」

「先生もあるんですか?」

「勿論よ。私、教師をこのまま続けてもいいのだらうか、と毎日悶々と悩んでいるわ。望月君、私、教師としてどう?正直に言つて。」

「え、あ、素晴らしいと思いますよ。大丈夫ですよ。じゃあ、その、失礼します」

「田村先生、俺、悩み事があるんですけど」

「それで?」

「え、あの、聞いてもらえますか?」

「聞くだけなら」

「・・・はあ、やっぱりいいです」

「人に話すだけでも楽になるぞ。言つてみろ」

「そうですか?」

田村先生は頷く。

「先生、俺、初めて先生が教師らしく見えました」「やつぱり聞くのやめた」

テスト編

「テストで赤点取つた奴は・・・わかるよな。先生は暑い教室も居残りも追試の問題作成も好きじゃないぞ」

ボキリボキリと指を鳴らす篠原先生に、「クリと息を飲み、必死に問題を解く生徒たち。

「よおし、赤点取らなかつたら、先生が頭をなでなでしてあげるか

らな

「若林先生」

「ん、なんだ、望月」

「男子もですか？」

「え、男子？」

「・・・はなから、女子だけの話なんですね」

「赤点を取るつてことは、先生の教え方が悪いつてことよね。『めんね、先生、教え方が悪くて。だめね、私。こんな私が・・・（続いてます）』

ずつしりと重い空氣の中、みんな必死に問題を解く。なんか、先生が今にも飛び降りそうな勢いだから。

「授業聞いてさえいれば、誰でも解ける問題ばかりだ」

「あはは、それでも赤点取つたらどうします？」

おどけながら言つと、田村先生が一囃りともせずに言つた。

「・・・馬鹿でも解ける問題だと言つたよな」

「あ、でも」

「追試なんて必要ないよな。俺の中に、追試といつものはない」

本氣の田村先生に、生徒は死ぬ氣で問題を解いた。留年は避けたい。

episode 21 - 1 ある夜の一人

「えっ！若さん、初恋って大学の時だつたなんですか？」

華やかな雰囲気のダイニングバー。

周りを見れば女性たちがカクテルを飲みながら楽しそうに談笑し、恋人達は自分たちの世界の中で幸せそうに語り合っていた。

「うん。そう」

若林は美味しそうにカクテルを飲みながら頷いた。

唚然としながら美味そうにカクテルを飲む若林につられて、ジントニックを一口飲む。

「意外です。若さんつてもつと早熟な学生生活を送つてると思ってました」

「え、早熟だつたよ」

「はい？」

意味が分からぬ。首をかしげる俺に若林が苦笑した。

「初めて人を好きになつたのが、彼女だつたんだ」若林は懐かしそうに眼を細め、「彼女のこと考えて悶々と夜を過ごしたこともあつたなあ」

じゃあ、それまでの彼女たちは？とは聞かぬことにした。意外でもなんでもない。やはり若林は若林だつた。

それにしても、そんな若林が恋に落ちる女性つてどんな人なんだろう。一度見てみたい、と興味がわいた。

「どんな女性なんですか？」

「なんだろなあ。じゃじゃ馬？暴れ馬？闘牛、うーん。暴走特急？そんな感じかなあ」

カクテルのグラスを傾けながら若林が呟いた。

「……。手に負えないって感じですかね」

「そうそう、そんな感じ」若林が可笑しそうに笑い、「規格外つて

いうか、枠に嵌つてないつていうか。もつめぢやくぢや。よく彼女に振り回されてたよ」

「なるほど。今までにないタイプなのが逆に良かつたんですね」

「そうそう。そなんだよ。　　氣づいたら、好きになつてた」

頬杖をつきながら、若林がポツリと呟いた。

「じゃあ、結婚が決まってショックですね」

「月末、その女性が結婚をするらしい。」

今日俺を飲みに誘つたのも、寂しさを紛らわすためだつたのかもしれない。胸が締め付けられるような思いでいると、若林がきょとんとした顔つきで俺の方に顔を向けた。

「全然」

あつけらかんと若林が呟く。

「なんですか？！初恋の女性なんですよね？」

「そうだよ」

聞けば、新郎と新婦が付き合つかけをつくつたのが若林だと言つ。意味が分からぬ。どうして好きな女性を友達に譲ることができるんだ？

頭を抱えている俺の肩に、ぽんぽんと若林が手を置いた。

「彼女に幸せになつて欲しかつたから。アイツの方が一〇〇倍、俺より彼女を幸せにできると思つたからさ」

そう言つて若林が笑つた。幸せそうな笑顔で。

「理解できません」

呆れながらそう言つと、「そつか？」と若林は不思議そうな顔をした。

「俺なら、それ以上に彼女を幸せにしてやる、と思いますけど」

「なんだか悔しくなり、勢いよくジントニーチクを飲み干した。」

若林なら、その新郎に負けないくらいその女性を幸せにできるはずだ、と思うから。

「……そつか。そういう考え方もあるんだな。　　でも、やっぱり

俺よりアイツと一緒にいた方が彼女は幸せなんだよ。ありがとな、

修平

不満そうな俺に若林がにっこりとほほ笑んだ。

「若さんは、その人の事も好きなんですね」

俺がそう言うと、若林は目を細めた。

「大切な親友だ。だから、一人には幸せになって欲しいと思つてゐる」

episode 21 - 1 ある夜の一人（後書き）

久しぶりの更新。

つわりも無事終わり、安定期に入りました。
やっと続きが書けた喜びでいっぱいです。

楽しんでいただけるとありがたいです。

episode 21 - 2 怒る男

「あの男！毎晩！毎晩！べつたりくつつきやがつて！」

苛立ちのあまり、机を足で蹴ると、隣の席の後輩が目を見開いてこっちを振り向いた。

「先輩……何かあつたんですか？」

「ああ？」

「あ、いえ。何でもないです」

後輩は愛想笑いを浮かべた。

五日前、久し振りに修と飲みに行こうと、県警前で待っていたら、同僚らしいヤツと県警から出てきた。仕事の打ち合わせでもするのかと遠慮して声をかけるのをやめた。

翌日も、その次の日も……毎日かよー！

「なんなんだよ、あの仏頂面の男！」

腹ただしくなり舌打ちすると、隣の後輩がビクリと体を震わせた。それにムカついて、また舌打ちをする。

「まさか！？」

ゲイか？あの男。

「いやいや、まさかそんな。はは

頭を振りながら、「けど……」と机の引き出しから数枚の紙を取り出す。

「田村恭一、か」

県警記者クラブにいる同僚から仕入れた資料だ。口口口口相棒が変わっているのに、修とは一年続いている。

一年続いたのは、修の性格のせいだと思っていた。昔から、あいつはお人よしだった。面倒見がいいもんだから、毎回、貧乏くじを引かされるのだ。

「まさか、な」

大きな溜め息を漏らした時、「本木ーーちょっと来い！」とテス

クが手招きをした。

「へいへい」

のつそりと立ち上がり、デスクのもとへ行くと、「進捗は?」と

急き立てるように聞かれた。

「あとは、彼次第つてとこでじょうか」

「大丈夫なのか?」

「はい」

「よし、一面開けとくからしひぐじるなよ

「はい。ところで、榊さん

「なんだ?」

榊は本木を見るにとなく、大刷りに田を通しながら返事をした。

「例の件どうなりました?」

「なんだっけ?」

「異動の件です」

「お前なあ。今、それどこのじやないだるーが!」

「半年前から言い続けてんんですけど」

榊は渋面をしながら、「まあ、そうだが。本木よ、お前折角社会

部のエースはつてんのになんでまた県警記者クラブなんだ」

「興味があるからです。この件が終わつたら、お願ひしますよ」

「きつぱりと言い捨て、自分の席に踵を返す。うしろから榊の溜め

息が聞こえたが、聞こえないふりをして無視をした。

初めて書いた長編小説です。

文学賞には落選してしまいましたが、監修さんの「J意見や「J感想が
いただければと思い、掲載いたします。
楽しんでいただければ、幸いです。

縦書きで書いたものなので、横読みは少し読みづらいかもしだ
せん。
「Jアーティсты」

- 1章 -

「私の邪魔をする人間は いらないわ」

女は憂いた。

女と男が佇むすぐ横の巨大な竹林が、まるで女の心の内を表すよう騒ついた。

「それは、誰もが望むことですよ」

男は言った。

「そんな言葉が欲しい訳ではありません」

「困りましたね」

まるで困った様子もなく男は言った。そんな男の態度に女は淋しげな表情を見せる。

「望むだけでは嫌なんです」

「と、言いますと？」

女は男を黙つて見つめた。黒く大きな瞳が男を捉える。男は動じることもなく、ただ静かに女の視線を受け止めていた。

「迷う必要はないでしょう。貴女が望む世界をその手で築けばいいではないですか」

男は無表情のまま女に答えた。

女は男の感情を読み取ることができない。しかし、男の言葉に満足そうに微笑した。

「ふふ、貴方にお話してよかつたわ」

女は竹林に視線を移した。その横顔からは、もう憂いの影は消えていた。

ブログでもランディングに参加しているので、よければ覗いてみてください。

一〇〇八年一月十一日。

愛知県警刑事部刑事総務課の犯罪情報分析係の結城は、奇妙な感覚に囚われていた。

先日、発生した殺人事件。その容疑者である少年のパソコン記録から、Q&Aサイトと呼ばれる掲示板を閲覧していたことが判明した。

最近は犯罪者による掲示板への書き込みが増えており、案の定、少年の書き込みがそのサイトからいくつか見つかった。犯行の動機を知る上で重要な手がかりとして、捜査本部はすべての拾い出し作業を行つた。

今後も掲示板への犯行予告や犯行の動機に繋がる書き込みなどが増えることを想定し、それらをデータベース化する作業に結城はこの数日追われていた。

その時だった。

既視感。

パソコン画面を見つめながら結城は首を傾げる。なんだ、この感じは。何かが引っかかる。唸つていると、「何か悩みでもあるのか？」と隣の席の佐竹が声をかけてきた。

「悩み？いや、特にないけど」

「だつて、食い入るように見てただろ？」佐竹は俺のパソコン画面を顎で指す。「悩みでもあるのかと思ったのに。残念」

何が残念だ。

結城は佐竹をひと睨みし、「南区の事件の、例の容疑者の書き込みを見てたんだ」とここ連日のオーバーワークのせいで筋のようないきなり硬くなつていた肩を解しながら言った。

「なんだ、つまんねえな」

佐竹は笑つて椅子の背にもたれ掛かった。

メタボリック氣味の佐竹の体を支える椅子は、ギイッと軋む音を立て、まるで悲鳴を上げているようだ。佐竹、人のことは言えないが少し痩せた方がいいぞ。椅子が憐れだ。

「こんなところに書き込むくらいなら誰かに相談するぞ。」
「う見え
て友人は多いんだ、俺」

「はつ」佐竹は鼻で笑つた。「よく言つよ。いつも俺としか飲んでないじやねーか。それに、知り合いには言い難い悩みとかだつてあるだろ? 言つとくが女の相談なら受けたやつてもいいが、借金の相談はお断りだ」

「安心しろ。そんな相談、誰もお前にしないさ」

結城が呆れて言つと、佐竹は大げさに首を振つてみせた。

「俺の魅力を解つてねえなあ」

「お前こそ、自分のこと解つてねえなあ」

「ほつとけ。お前よりかは、まだつての」

メタボリックの奴に言われたくないな。

結城は佐竹の真似をするように大げさに首を振り、「俺は既婚者、お前は独身。ご愁傷様」と胸の前で手を合わせた。

「腹立つ奴だな。心配してやつてるのによ」

さつき残念とか言つてなかつたか。

「そりや悪かつたな。でも顔も名前も判らない人間に相談して、まともな返答がくるとは思えないんだよな、俺」

佐竹の椅子は相変わらずギイギイッと悲鳴を上げて耐えている。いつ壊れてもおかしくない椅子に、子供が小さい頃に一緒によく遊んだ 黒ひげ危機一髪 のスリルに似ているな、と結城はつまらなことを思つた。

「馬鹿だな。顔が見えないからこそ、遠慮も建前もなしに氣兼ねなく会話ができるんじやないか」

結城の心配をよそに佐竹は一層椅子の背にもたれ掛かり、気持ちよさそうに伸びをした。

「そういうものかね」

「そういうものなんだよ、今の世の中。お気軽、お手軽。それが一番」

「確かに情報を得るには手軽で便利だけだ。でも俺は、こういう顔の見えない繫がりはあまり好きになれないな」

佐竹は、「古いな、お前」と苦笑した。

「古くて結構。お前みたいに新しもの好きじゃないんだよ」「こんな仕事選んでおいて苦手ってのはどういうことかね」すぐに佐竹は首を傾げた。「でもお前、普通にネット利用してるじゃん。さつきだつて調べものしてただろ？それを載せてるのも顔の見えない赤の他人だぞ」

「あー、説明が難しいんだよな」結城は少し考え込み、「えーとな、俺の中では辞書で調べるとウェブ上の情報を検索するのは士俵は違えど行為は同じなんだよ。もちろん辞書と違つてウェブ上にある情報は、素人が俄知識で載せてるものも多いから選別しなくちゃいけないけどな。俺にとつては大容量の電子辞書を引いている感覚なんだ。だから、ソレは大丈夫なんだよ。俺が苦手なのはインターネットコミュニケーション。掲示板だのSNSだのっていうアレだ」

佐竹は腕を組んで唸り声を上げた。

「さつぱり解らん。そのQ&Aサイトだつてお前の言つ辞書にならないか？これだつてインターネットコミュニケーションだぞ？」

「だから俺もうまく説明できないんだよ。すべてを否定している訳じゃないし。漠然とした不安みたいなものがあるんだ。この仕事をしてるとさ、他人よりネット世界の陰の部分がよく見えるだろ？人の悪意とか邪な欲望とかさ。だからかもしれない。怖いんだ。……なんかさ、底なしの闇に引きずり込まれそうな得体の知れない不安に襲われるんだ。お前は感じないか？」

佐竹は顎を摩りながら、しばらく黙考する。結城は佐竹の答えを静かに待つた。

「まあ、この仕事してりや人間の腐つた部分や誘惑に負けて堕ちた

人間を嫌でも目の当たりにするからな。個人を特定されかねない情報をお垂れ流してゐる奴とか見つけると、怖いもの知らずだな、とは思つたりするけど俺自身はあんまり感じたことはないなあ

「……そうか」

オプティミストの佐竹らしい。

「神経質になり過ぎなんだよ」

「危機回避能力が優れていますと言つてくれ」

「はいはい」

おざなりに返事をしながら、佐竹がパソコン画面を覗き込んでいた。内容が気になつっていたのだろう。しかし、すぐになんともいえないと顔になり大きな溜め息を漏らした。

「なんだこれ。そんなことまで自分で決められないのか？」

「みたいだな」

「あほらし。仕事しよ」

佐竹はそう言つて自分のパソコン画面に向き直つた。

彼が呆れるのも無理はない。書き込みの内容は、自分はどこの大学に入学したらいいか、というものだった。そしてどの大学が人気が高いか、単位が取りやすいか、そんな薄っぺらな内容がダラダラと書き込まれていた。

こんなところに書き込むよりも、学校の進路指導室に行つた方が手つ取り早いだろに。まあ、この少年の場合は、大学に何をしに行くつもりなのか、まずはそこから考えるべきだらうけれど。

少年の書き込みに対し、ほとんどのコメントが少年の考え方の甘さを諫め、結城と同じように進学することの意味を考えた方がいい、と助言していた。それらのコメントに少年は返信をしていない。自分の欲しい返事がなかつたからか、返信すること自体が面倒だつたからかは判らないが、コメントに返信をするのは最低限のマナーだ。それすらできていない彼に、結城は顔を顰める。

少年はその後も何度も書き込みをしていたが、相変わらずコメントに返信することはなかつた。そんな彼の書き込み内容が一変した

のは、一月の中旬頃だった。

センター試験を終えたその夜、今まで進学を賛成していた両親が

急に経済的な理由から進学を諦めるように少年に言つてきたそうだ。

「青天の霹靂とはまさにこゝのことだ」と彼は書き込んでいる。

それに対し「お金を出すのは両親なのだから諦めるべきだ」「進学はいつでもできる」「そこまで勉強がしたいのなら独学すればいい」といったものから、少年に対しても同情を寄せるコメントがいくつか寄せられていた。

その中で、少年からの返信がついているコメントがひとつだけあつた。

その青年 実際、本当に青年かどうかは判らないが は奨学金制度について解り易く説明し、両親を説得することを勧めていた。最後は「頑張れ」と励ましの言葉で締め括られており、奨学事業を行っているいくつかの団体のURLも添付してあつた。

その青年に対してのみ、少年は返信をしていた。「ありがとう」と。

その後も、少年と青年とのやり取りが毎日のように続いていた。青年のコメントは的確で、他のコメントのようにブレがない。丁を追つ毎に、少年が青年に信頼を寄せていくのが彼の書き込みからも見て取れた。

結城自身も、この青年に好感を抱き始めていた。さつきまであれほど怖いだの言葉だけでは信用できないだのと言つていたのに、と自分でも不思議に思うのだがやはり上手く説明できない。

考えれば考えるほど絡まつた糸のよつに頭の中が混乱し、訳が判らなくなる。だから、いつも考えることを放棄していた。こんなことを言つたらまた佐竹に飽きられるな、と結城は肩を竦めてみせる。彼らの最後のやり取りは、両親はどうして進学をさせてくれないのか、といつ少年の嘆きに変化していた。こんなに自分は進学を望んでいるのに、と少年は悲嘆に暮れている。

青年はそんな少年に、諦めてはいけない、と励ました。望みを捨ててはいけない、と。両親だつてきっと解つてくれる。だから夢を諦めてはいけない、と励まし続けた。

そのやり取りの翌日、少年は両親を刺殺して逮捕された。

なんとも後味の悪い事件だ。少年は逮捕後「俺は両親に愛されていなかつた」と答えている。自分の望みを否定した両親。自分のことを愛していないから進学を反対したのだ、というあまりに短絡的な考え方で彼は両親を殺したのだ。

青年のことを結城は考える。

すべてが無駄に終わった。きっと青年は、少年からの書き込みがなくなつたことにあまり深く疑問には思つていないだろう。結果がどうなつたのかが気になるくらいで、よもや両親を殺して逮捕されたとは考えもしていなはずだ。当然だ。知らなくていい。知らない方がいい。

ふと、その青年のハンドルネームを見て、結城はまた既視感に襲われた。

Michael

前にも見た覚えがある。

まさか。

結城は、これまでに集めたデータに急いで目を通した。まさか、そんなことがあるわけない、と心の中で自分に言い聞かせ、カーネルを動かしていく。

「そ、んな……」

結城は絶句し、パソコン画面から視線を逸らすことができなかつた。ゾクリと背筋に悪寒が走る。

数人の容疑者の書き込みに、Michaelからコメントがついていたのだ。

しばらくパソコン画面を呆然と見つめていた結城は、書き込まれているのがすべて同じQ&Aサイトだということに気づき、安堵の表情を浮かべる。

なんだ、驚かせるなよ。同じサイトなんだから、Michaelのコメントがあつても別におかしくもなんともないじゃないか。ホツと胸を撫で下ろしつつ、結城はMichaelのコメントにもう一度目を通す。別段、不審な点は見当たらない。親殺しの少年の時と同様、Michaelは彼らの書き込みに真摯にコメントしていた。

画面に表示されたMichaelのコメントを見つめながら、結城は目を細める。

もしMichaelが真実を知つたとしたらどう思つだらう。驚愕。苦悩。絶望。もうこの掲示板に、このネットの世界に、足を踏み入れなくなるだろうか。

「どうした、難しい顔して」

佐竹が体を結城の方に向けたと同時に、ギュイーンと椅子がおかしな音を立てた。もう限界が近いのかもしれない。

「あれ?」

「なんだ?」

「椅子、壊れそうだぞ」

「ん、そうか?」

佐竹はあまり氣にならない様子で椅子を左右に動かした。そのた
びに椅子はギイギイ悲鳴を上げる。

「そりかって……すごい音出してるだろ」

「まだ大丈夫だろ？ 壊れてないし」

俺は物持ちがいいんだ、と佐竹は笑った。椅子が嫌がってるんだ
よ、と結城は思つたが口に出すのを止めた。何を言つても無駄な氣
がする。

「なんだよ、そんなことで難しい顔してたのか？ 暇だな、お前」
「んな訳ないだろ。 実はさ」

佐竹に、Michaelについて意見を求めることにした。俺よ
りも「コイツの方がこうこうことには詳しい。

少し考えてから佐竹は、「偶然だろ。ただの世話好きな奴なんだ
よ。まあ、結果がコレってのは可哀想だけどな」と顎でパソコン画
面を差した。

「だよな」

結城はホッと胸を撫で下ろす。

「それにも、真面目な奴だな。 天使を名乗るだけあるな
「……何つて？」

彼の口から不釣り合いな言葉が飛び出した。

「だから、天使。エンジエルだよ」

聞き間違いではなかつた。結城は口を開けたまま佐竹を見つめる。

「あれ、知らないのか？ 大天使ミカエル。天使の中で一番偉いんだ、
確か」

「違つて」

「……なんでお前がそんなの知つてるんだ？ 気持ち悪い」
「失礼な。これくらい常識だよ、常識」

「女か？」

「違つて」

その話はやめやめ、とでも言つよつて手をひらひらと振り、彼は
自分の仕事を再開させた。やっぱり女か、とニヤリと笑い、結城は
Michaelのコメントに視線を戻した。

確かに、悩める者に救いの手を差し伸べるMichaelは天使そのものだ。現実の世界で聖職者でもやっているのか。それとも神学校の学生か。坊さんつてことはないよな。

結城は、この奇特な青年に興味を持ち始めていた。混沌としたこのネット世界を、Michaelがどんな風に見ているのか知りたいと思った。もしかしたら、自分の中にあるこの得体の知れない不安も消えてなくなるかもしね。そんな思いが自分の中に生まれていた。

「書き込んでみようかな」

パソコン画面を見つめながらボソリと呟く結城に、佐竹が訝しげな顔をした。

「嫌いなんじやなかつたか?」

「好きじやないだけだ」

「同じだろ」

「つるわー。セーフじやなくして、このMichaelに興味があるんだ」

佐竹は少し考え、「コメントせせるのか?」と訊いてきた。

「そう。Michaelと少し言葉を交わしてみたい」

「へえ、面白そうだな」佐竹が楽しそうに笑いながら身を乗り出しつきた。「俺も手伝つてやるよ。で、どんなことを書き込む?」

「そうだな……コメントしやすい内容の方がいいよな。よくある話。色恋の話とか」

「お前に縁のない話だな。書けるのか?」

佐竹が失笑する。

「お前に言われたくないよ」

「つるわー。お前よりは数をこなしてるわ」

「ああ、天使の彼女か」

「えーと、何にしようか? 嫁さんが小遣いをケチるとかどうだ? よくないか?」

佐竹が慌てて話題を変えた。図星か。これは面白いな、と結城は

含み笑いする。と、ここで

「それ、うちの話じゃないか」

「お前んとこ、恐妻家で有名だもんな」

ひひ、と佐竹が笑う。さつきの仕返しらし。

「ほつとけ」

「いいじゃねえか、本当に相談してみれば。これを機に見方が変わるかもしれないぞ。小遣いアップの情報も手に入るし一石二鳥だろ？それにQ&Aサイトなら、他の掲示板よりソフトなコメントが多いからお前でも大丈夫だつて。じゃあ、小遣いの話で決まりだな」

そう早口で捲し立てた佐竹は両手を胸に当てて体をくねらせた。「青年に解るかなあ、この切ない気持ちが

「気持ち悪い動きをするな。お前だつて解らないだろ」

「ふふん、楽しみだな」

一やりと笑う佐竹に、結城もつられて笑みを浮かべた。

囁くもの（3）

家に帰ると結城は早速書斎に向かった。机の上のパソコンを立ち上げ、鞄からメモを取り出す。

掲示板を利用するのは初めてだった。少し緊張しながらMicheleが利用しているQ&Aサイトに登録をする。

ハンドルネームは、佐竹が考えた「杞憂の人」。結城のフルネーム「結城仁」をもじって作ったものだが、自分の性格すばりそのもので驚いた。何か宿命的なものを感じ、余計に落ち込みそうになる。気が重くなる中、結城は掲示板に佐竹と二人で考えた文章を打ち込んだ。

小遣いのやり繰りについて

はじめまして。

毎月三万円の小遣いで過ごしている杞憂の人と申します。みなさんの小遣いのやり繰り方法を教えていただけませんか？ちなみに私の小遣いの内訳は、

コーヒー代

昼飯代

交際費

雑費

煙草は結婚を機に止めました。頑張つてやり繰りしているのですが毎月厳しい日々を送っています。

妻は専業主婦で、昔は弁当を作つてくれましたが今はほとんど食堂やコンビニ弁当の日々です。今一年、中学生になる息子が一人おり、色々と物入りになるので今の小遣いの範囲内でやり繰りしたいと考えています。
よろしくお願いします。

改めて読むと、あまりの中身のない文章に恥ずかしくなった。家の内情を曝け出すようで書き込むのを躊躇する。

あの少年のものよりひどいではないか。よくこんなのを考えついたな、と結城は自分に呆れた。

こんなふざけた書き込みにMicheleはコメントしていくだろうか。逡巡しながらも結局、結城は書き込みをする。

どうせ誰からのコメントもつかないだろう。結城はアホらしくなつて立ち上がり、隣のリビングでテレビを観ている妻の許へ向かった。

「遅かつたわね、ご飯は？」

「食つてきた」結城はソファに腰を下ろし、ひと息つく。「隆也は

？」
「塾

壁の時計に目をやると午後十時半を回っていた。

「遅くないか？」

「いつもこれくらいの時間よ

妻は気にする様子もなくテレビ画面を観ている。

「そう、か。迎えに行こうか？」

「友達も一緒だから大丈夫よ

「でも今は物騒だし」

先月、隣の区で女子高生が通り魔に襲われた事件があつたばかりだ。

「大丈夫よ」

妻の返事に被さるように「ただいま」と玄関から息子の声が聞こえた。

「ね、大丈夫だったでしょ？」妻はちらりと結城を見てから、「隆也一部屋に行く前にお風呂に入りなさい」

「はーい」

元気な声が返ってくると、妻は再びテレビ画面に視線を移した。

画面の中ではイケメンと呼ばれている若手俳優が殺人事件を颯爽と解決しているところだった。新聞を見ると 警備員の事件簿 5 施錠されたビルの屋上で殺人事件発生！ とあった。

「くだらない…… 実際に民間人が事件捜査なんてできやしないのに。しかもシリーズ化しているのか、コレ。

結城は「都合主義のドラマに辟易し、新聞をテーブルの上に投げ置いた。ひと息つき、隣の妻に話しかける。

「なあ」

「何？」

「小遣い上げてくれって言つたら上げてくれるか？」

「五百円くらいいなら」

あまりの少額に冗談かと思つたが、彼女は何事もなかつたようにテレビ画面を観ている。

本気なのか。

「お前な……俺は小学生か」

「だつて今年は隆也だつて中学に上がるし、出費が多いからお父さんに回せないのよ」

不満そうな顔で結城を睨み、家計の苦しさを訴えてきた。いつもこれだ。

「それにしても五百円は少な過ぎるだろ」

「五百円でも上がるだけ感謝してよ。あなた、隆也のことが大事じゃないの？」

「わかつたよ」

結城は撫然としてソファから立ち上がる。まだ何か言いたげな妻の前を通り過ぎ、キッチンの冷蔵庫から缶ビールを一本取り出した。いつも子供のことを出されて話は有耶無耶になつて終わるのだ。

そんなに生活が苦しいのならお前だつて働けばいいのに そう思うが言わない。自分の収入の少なさについてグダグダ言われるのがオチだからだ。

リビングに戻る気もしなかつたので、もやもやした気持ちを抱え

たまま結城は再び書斎に向かつた。

騒ぐもの（3）（後書き）

ブログでもランキングに参加しているので、よろしければそちらの方も投票していただけすると嬉しいです。よろしくお願ひいたします。

パソコンの前に乱暴に腰を下ろし、ビールを一氣に呷る。そして田の前の壁を見つめながら結城は佐竹の言葉を思い出す。

「切ない、か」

解つたようなことを言つていただが、アイツにこの気持ちは解りはない。結城は自嘲気味に笑つた。

家族の為　　その一心で、朝から晩まで働いてきた。結婚してからは家族との時間を確保する為に趣味の釣りを止めた。煙草も止めさせられた。毎日遅くまで残業し、休日は疲れた体に鞭を打つて家族サービスに専念する。少ない小遣いで毎日やり繰りしながら、時々、佐竹と飲みに行くのが唯一の楽しみだった。

漫然と日々を過ぐし、平穀ながらも安定した生活を送つてきた。けれど、時折思うのだ。

家族にとつて自分は何なのだろう。

そう思うたび、結城は呼吸するのが苦しくなるほど胸が締めつけられた。ブリザードのような淋しがが心に吹き荒び、訳もなく泣き叫びそうになることもあった。

昔のように息子と会話をすることもなくなつた。最近では顔を合わさない日もある。妻とも会話をすれば喧嘩ばかり。それでも一緒に暮らし、毎日が過ぎていく。

いついたい家族とはなんだ。自分はなんの為に

「くそつ！」

結城は苦しげに顔を歪め、乱暴に髪を搔き亂つた。

小遣いが少ないから切ないんじゃない。恐妻家だから切ないのでもない。なんの為に自分が今ここに存在しているのか、判らなくなっていることが　　切ないのだ。

「独身のお前が羨ましいよ、佐竹」

結城は手許の缶ビールに視線を落とした。ぽんやりと空っぽにな

つた缶を見つめ、氣怠そつに顔を上げると諦めたように首を振った。考えることを放棄する。これ以上、虚しい気持ちになるのは嫌だつた。それに、何より考えるのが怖かつた。

「……怖い？」

一瞬考えるが、すぐに首を振る。そして氣を取り直す為にさつき書き込んだ画面を開いた。

「あつ」

思わず声が出る。自分の書き込みにいくつかのコメントがついていたのだ。

まだ書き込んで三十分も経っていないのに。不安になりながら、おそるおそる書き込まれたコメントに目を通す。

そこに書き込まれていたのは、同じように少ない小遣いで苦しんでいる人たちからのやり繰りの方法や励ましの言葉だつた。その中には自分よりも少ない小遣いでやり繰りをしている人からの励ましもあつた。

何より驚いたのは、妻の立場である女性からの意見がいくつもあつたことだ。しかも批判的なものではなく、主婦としての節約方法、自分の亭主のやり繰りの方法などを紹介してくれていた。

結城はしばらくの間、黙つてそれらのコメントを見入つていた。そして、おもむろに目頭を押さえ、「情けない」と呟いた。

彼らの言葉が有難かつた。救われたと言つてもいい。たとえ氣休めだと解つても、彼らの言葉を素直に受け入れることで折れかけていた心が楽になることができたのだから。

結城は気合いを入れるように頬を数回叩き、再び画面に目を向ける。すると新しいコメントがついていた。

Michaelだ。

結城は画面に顔を突き出し、Michaelのコメントに目を通す。

はじめて。

小遣いのやり繰りですが、円三万と括るのではなく、一日に使う金額を決めておくといいと思います。

そうすれば残りを交際費や雑費に充てることができる、急な出費にも対応できるので。

参考になればいいですが。

では、失礼します。

「なるほど」

結城は思わず呟く。これならば実行できそうだ。他の人もそうだが、皆色々と工夫をしていることに感嘆する。何もしないで文句を言つていただけの自分が恥ずかしく思えた。

「みんな、頑張つてんだな」

ポツリと呟き、結城は天を仰いだ。何を考える訳でもなく、ただぼんやりと黄ばみがかつた天井を見つめた。そして深く息を吐き出すとパソコン画面に視線を戻した。すると、Micheleからコメントがついていることに気付いた。

#9です。再度失礼します。

小遣いを増やしたい、ではなく家族の為に今の小遣いで上手くやり繰りしようとしている杞憂の人さんは優しいお父さんなのでしょうね。

弁当のこと、奥さんにもう一度頼んでみてはいかがですか？

Micheleのコメントに田を通した結城は田を伏せ、口許を歪ませる。

やはり、彼にも無理だつたようだ。自分のこの苦しみは、誰にも分かってはもらえないのか。

突如、襲ってきた孤独感に押し潰されそうになつた結城は、乱暴に髪を搔きると机に思い切り拳を叩きつけた。

自分ばかりがどうしてこんな思いをしなきやいけないんだ。アイ

ツは主婦連中とランチやなんやで好き勝手しているの。元結城は苦々しげに舌打ちをする。

今度、頼んでみます。でも無理だと思います。うちは恐妻家なので私の意見はなかなか聞き入れてもらえない。なので、私は優しい訳ではありません。

ありがとうございます。

また、もやもやとしたものが腹の底に溜まり始めていた。自虐的な文章をMicheleに返信し、結城は椅子の背に深くもたれ掛かる。

もう何も考えたくない。今日はここまでにしておき。画面を閉じようとした時、再びMicheleからコメントがついた。

#9です。何度も失礼します。

夫は家庭を支える為に外で働き、妻は家を守る為に強くなると言いますよね。

けれど夫婦が対等の関係でなくなれば、その強さは 暴力 になると思いませんか？

鬼嫁 恐妻（家）は普通に世間に定着しているけれど、夫が同じ行為をすれば DV という犯罪として扱われかねない。それがどうも納得できないのです。男であれ、女であれ、傷つかない人はいないはずです。家族といえど 思いやり を忘れてしまえば関係は破綻してしまいます。

奥さんと話し合ってみてはいかがですか？逃げ腰になるのは得策とは思えません。

生意気なことを言つて、すみません。

結城はパソコン画面をじっと見つめ、噛みしめるように何度もMicheleのコメントに目を通す。腹の底に溜まっていたもやも

やとしたものが、雪が解けるまゝじきわざと溢えてこゝのを感じた。

結城はキーを叩いた。 Michaelに返信する為に。

■ ぐもの（3・1）（後書き）

ブログの方でもランキングに参加しているので、よければ投票していただけますと嬉しいです。

囁くもの（4）

辺りは静寂に包まれ、空にはヴェールを纏つたようにぼんやりとした月が浮かんでいた。

名古屋市緑区の東側に位置する新興住宅街、桜花台。

名前の通り、春には住宅街の中央にある公園の桜が満開になり、辺りは桜色に染まる。地元でも有名な花見の名所になつており、春になると多くの人で賑わいをみせる。

その住宅街を少し東に進むと、隣接する東郷町との境界にもなつてゐる巨大な竹林が姿を現す。その竹林の脇にある細い県道に等間隔に置かれた古びた街灯は、その役割を半分も果たしてはいなかつた。

薄暗い明かりは道を仄かに照らすのみで今にも夜の闇に取り込まれそうになつてゐる。ぼんやりとした明かりが浮かんでいるその先は、まるで冥府にでも繋がつてゐるのではないかと思わせるような不気味さがあつた。

「最高」

つゝとりしながら呟くと、道路脇にある一軒の家をライトが照らし出したのが目に入った。竹林に囲まれ、ぽつんと一軒だけ建つてゐる家。

山口は「いんな場所に?」と一瞬訝しがすくに意識は車に戻つた。

やつと手に入れた車、BMW3シリーズのカブリオレ。

狂おしいほど完璧で纖細なボディ。初めて見た時から絶対に手に入れてやると心に決めていた。その願いが今日叶つたのだ。征服感に酔いしれながら、手に入れたばかりの愛車の乗り心地を堪能していると急に目の前の人があが飛び出してきた。

「おいつ！」

慌ててブレーキを踏み、素早くステアリングを左に切る。衝撃と

共に、ガリガリッという今この世で最も聞きたくない鈍い音が耳に届いた。

「嘘だろ？！」

山口は慌てて車から飛び出し、辺りを見回すが人影はなかつた。祈る気持ちで車体を覗き込むと、頭を抱えてその場にへたり込んだ。車体側面は見る影もない状態で擦れた痕にガードレールの白い塗料がこびりついている。バンパーは無残にひしゃげ、ヘッドライトやフォグライトのプラスチック片が粉々になつて辺りに散らばつていた。

「くそつたれっ！」

数時間前に納車されたばかりの愛車。酔いしれた至福の時は、一瞬にして悪夢へと変わつた。

「逃げやがったのか？！ふざけんな、出てこいよ…ばかやろう…ていうか、こんなところにガードレールなんか付けてんじゃねえよ…」山口は悔しさのあまり大声で叫び、ガードレールを思い切り蹴飛ばした。「畜生！なんなんだよ…」

乱暴にジャケットのポケットから山口は携帯を取り出すると、さつき登録したばかりのBMWのスマートフォンシーサービスに電話を入れる。

こんなことつてないよ、神様。嘘だと言つてくれ。

山口は吐きながら天を仰ぐ。すぐにオペレーターと電話が繋がつた。

「えーとですね、事故りました。今日、納車だつたんですけど保険つて適用されますよね？」

オペレーターの質問に答えながら、山口はライトに一瞬浮かび上がつた女の顔を思い出す。

あれは 本当に人間だつたのだろうか。

一瞬ライトに浮かび上がつたのは、血の氣のない、まるで人形のように整つた顔立ちをした女だつた。

「平和だね」

「平和ですね」

「ほんとだな」

まるで縁側で日向ぼっこしている老人のよつたな会話だが、ここは愛知県警本部の刑事部の一角に設けられたコーヒー飲み場で、俺たちは刑事だ。

「なんか、じじ臭いな。俺ら」

「ほんとだな」

さつきと同じ言葉で返すのは、一課の猪又。

実はこの男、俺が異動してくる少し前まで捜査一課強行犯捜査係の篠原班で田村とコンビを組んでいた。田村と反りが合わず結局二ヶ月で他部署に異動していったのだが、半年前、再び捜査一課の刑事として戻ってきた。だから未だに田村とは仲が悪い。というか、一方的に田村を毛嫌いしている。

「いいんじやない、刑事が暇なのは喜ばしいことだよ」

班の先輩である若林は、そう言つてコーヒーを美味そうに飲んだ。目鼻立ちが濃く、男性的な顔立ちの猪又とは対照的な甘いマスクの持ち主の若林。忙殺される日々の中でも人一倍身なりに気を使う、女の子が大好きな人間で県警一のタラシでもあった。

「でも、書類は山のように溜まっていますけどね」

書類が山積みされた自分の机をげんなりと見つめる俺、望月修平。四月に篠原班に配属されたばかりの新米刑事だ。

そして俺の隣の席で机にうつ伏せになつて寝ている奴が、俺がコンビを組んでいる田村恭一。端正な顔立ちをしているが、いつも無表情で何を考えているのか解らない男。それにしても毎回思うのだが、寝ているアイツに誰も何も言わないのは何故だ。今、仕事中のはずなのに。

「お前、溜め込んだなあ」

呆れる若林の隣で猪又が、「田村の机に黙つて置いちゃえよ」と田村の背中を顎で差した。

「それ、前にやつた。しかも無視されてあとで痛い目にあつた」「経験済みか」若林が苦笑した。「まあ、溜め込むお前が悪い」「警部が俺の机に自分の書類を紛れ込ませるんすよ。つて俺も人のこと言えないので」

俺は肩を竦めてみせる。

「あ、それ俺も昔やられたなあ。まだそんなことやってたんだ、あの人」

「そうなんすか? どう回避しました? 無視したら駄目ですか?」

俺も必死だ。

「新人が来るまでは続くな。あの人も無視し続けるから質悪いんだよな」

「そんな。……新人つていつ来ますかね?」

「お前來たばかりだし当分ないだろうな。頑張れ」

若林が親指を立てた。満面の笑みでいかにも楽しんでいる様子だ。他人事だと思つてひどいな、と唇を尖らせた時、あることに思い至る。若林も被害に遭つたということは

「じゃあ、田村も同じ目に?」

「ああ、いや」若林は、くつくつと思いついたように笑い出した。

「アイツはお前の時みたいに無視し続けたのさ。あれは笑えたなあ。さすがに業を煮やした警部が慌てて書類片づけてたよ」

「……田村、すごいな」

あの篠原に勝つたのか。

「ふん、そのまま異動させればよかつたのに」

実直そうな太い眉毛を歪めながら、猪又は面白くなぞつて「一ヒーカップを口に運ぶ。

無茶を言うな。どう考へても田村は悪くないだろ。

「猪又も執念深いなあ、面白いけど」

若林が肩を揺らして笑つてゐると、「おーい、その暇そうな御三家」と声がした。振り向くと、今話していた俺たちの上司である篠原が、ニヤニヤしながらこっちを見つめている。俺たちのことか。けど御三家つて。いつの時代だ。

「なんですか、警部」

「おう、望月。特に用はない」

「用はないって、そんな。じゃあ、なんで声をかけたなんですか

思わず情けない声が出た。

「暇だから」

「……そうですか」

「とこりで、お前ら仲いいな」

「普通ですよ」

「お前ら見つけると昔の俺らを思い出すな」

間宮が篠原の机に腰かけながら、あの頃は楽しかったなあと懐かしむように手を細めた。

坊主頭で眼光の鋭い間宮は、さすが暴力団を相手にする捜査四課のはずなのに毎日のように机に来ているのは何故だ。にいるだけあって迫力がある。県内でも屈指の柔道家なのだが娘命のバ力親でもあり、よく娘のことで同じ愛娘家である捜査一課長の小林警視に泣きついていた。

そんな間宮をよくからかつてゐるのが篠原だつた。利己主義の篠原に間宮だけでなく俺たちも毎日のように振り回されていた。頭の回転の速さと巧みな話術を持ち合わせており、それを自分の為に余すことなく使う人である。

「まーさんや篠さんはいいよ。好き勝手やつてたんだから」

テノールの穏やかな声でそう言つのは、俺がもつとも信頼を寄せており先輩刑事の藤堂だつた。彼は無造作に伸ばした前髪をかき上げながら、「周りがどれだけ大変だつたか」と大きな溜め息をついた。

篠原たち三人は、中学から大学までずっと一緒に過ごしてきたそ

うだ。そのまま職場まで同じなんて仲良過ぎるにもほどがあるだろう、と初めて聞いた時には呆れたものだ。きっと、これまでにこの二人は藤堂に多大な迷惑をかけてきたのだろう。今の彼の大きな溜め息がそれを物語っている。

そしてこの三人を警察に誘つたのが、何を隠そう大学の一年先輩で柔道部主将だった小林捜査一課長だった。恐ろしい話だ。普通のテニスサークルでよかつた、俺。

「藤さん、好き勝手していたのはまさんだけ俺は違うぞ」

篠原が短く刈上げた頭を撫でながら心外そうに反論した。

「馬鹿言え、お前の方がよっぽど酷かつたじゃねえか。高校の文化祭でお前が何をしたか、忘れたとは言わせんぞ！」

今にも飛びかかりそうな勢いで間宮が篠原に食つてかかった。どうでもいいが高校の話を未だに持ち出すのもどうかと思う。四十過ぎているというのに。

「忘れた」

「お前っ、このやう！」

篠原と間宮は、お互いの学生時代の悪さを罵り合い始めた。よく警察官になれたな、と本気で呆れていると、藤堂が額に手を当て、手に負えないと言うように小さく首を振つた。

「俺ら、あんな感じなのか？」と不安げな猪又。

「なろうとしても無理だろ」

その内の一人が上司だなんて悲しすぎる。

「だよな。それにしても藤堂さんつて本当にす」「よな」

悪ふざけが過ぎた二人を窘めている藤堂を見つめながら、俺たち三人は頷いた。

さて仕事に戻るか、とカップを置きかけたその時、席を外していった小林が部屋に入つてくるなり篠原の名を呼んだ。 その瞬間、今まで和やかだった空気が独特の緊張感に変わる。

席に座る小林の横に立つた篠原は先ほどとは別人のような真面目な表情で、時折、相槌を打ちながら小林と何か話し込んでいる。

おそらく、捜査本部の設置が決まったのだろう。やっぽりな、と俺は心の中で呟く。

「緑署に行くぞ」

小林の席から戻るなり、篠原が俺たちに告げた。

あ。

ほんの一瞬だけ見せた藤堂の悲しげな表情を俺は見逃さなかつた。前にも何度か見たことのある表情。

「また書類が山積みされへくな」

若林と猪又が面白がるようになつた。二人は藤堂の表情に気づいていないうつだつた。

「山積みのチヨコだつたらよかつたのにな。そういうや、お前チヨコもらつたか？」

笑い合つて一人を恨めしく睨みつけ、いつの間に起きたのか上着を片手に部屋から出ていく田村のあとを追つて俺は廊下に走り出た。うしろから若林もついてくる。

俺たちは県警本部の地下駐車場へと向かう。

「やつぱり殺しだつたな」

若林が言つた。

「そうですね」

地下駐車場に着くと若林はビートルに乗り込み、俺は田村の「ミオに乗り込んだ。シートベルトをかけながら、「また、いつもの始まりだな」と運転席に座る田村に声をかける。

「さつやと終わらせるさ」

田村はエンジンをスタートさせ、俺たちを乗せたミオは地上へと向かつて走り出した。

囁ぐもの（6）

名古屋市緑区にある緑警察署の講堂に設置された捜査本部。

入口には「ピアニスト殺人事件捜査本部」と筆書きされた看板が取りつけられ、緑署の職員たちが準備のため忙しなく動き回っていた。

俺は手許の捜査資料を見ながら、「なあ、そんなに有名なピアニストだったのか？」と田村に尋ねた。

母親がピアニストで田村自身もピアノが趣味だと前に言っていたから、知っているかもしれない。

「数年前の浜松国際ピアノコンクールの入賞を皮切りに、国内外のコンクールで上位入賞を果たしていた実力派だ。遅咲きのピアニストとも言われていた。少し前に大きな国際ピアノコンクールで金賞を取つて凱旋帰国したニュースがあつただろ。年齢も年齢だつたら大きく取り上げられていたじゃないか」

捜査資料に目を通しながら田村は言った。やつぱり知っていたか。でも、そんなん言われてもさつぱり解らんよ。

「あー、そういうば、あつたな。そんなニュースが。確か、コンクール後のコンサートチケットが数秒で完売とかなんとか。けど彼女が名古屋に住んでいたとは知らなかつた」

ちょうどその頃、大きな事件を抱えていてニュースを観てている暇などなかつた。田村は観ていたみたいだが、そこは深く考えるのはよそう。

「演奏する時くらいしか表に出でこなかつたからな」

「へえ。気難しい人だつたのか？」

住宅街から離れた一軒家に住んでいたと聞いている。ピアノの音を気にしてのことだと勝手に想像していたが違つたのか。考えてみれば防音設備くらい整えているか。口に出さなくてよかつた。

「さあな。それに」

急に田村が言葉を止めた。もう会議が始まるのかと思ったが、まだデスク席では篠原たちが頭を寄せ合っていた。

「それなんだよ」

肘をつきながら田村はちらりと俺の顔を見た。

「数年前に左耳の聴力を失っていたから、それもあるかもな」

「……それで演奏なんてできるのか？」

「努力したんだろうな」

田村は短く答えた。

「そうか。 と、始まるようだな」

捜査本部の指揮官である篠原が正面の席に座るのが見えた。その隣に小林課長、そして緑警察署長ら幹部が並ぶ。ようやく捜査会議が始まるようだ。

篠原から任務編成が呼び上げられる。俺と田村は地取り班 現場周辺の聞き込み担当 になつた。

次に、緑署の刑事課長である笹島警部から事件の概要が説明された。

殺害されたのは、佐伯美奈。三十一歳。彼女は全焼した家に一人で暮らしていた。他に家族は、瑞穂区柏木町に住む祖母の佐伯馨と失踪中の双子の妹である美和の一人だけ。両親は二十年前に交通事故で亡くなつていた。

「消防本部の通信指令室に最初に通報が入ったのは、二月十六日の午前一時十四分。火災原因は、窓際に置かれた石油ストーブからカーテンに引火したものと思われる。死亡推定時刻は、二月十五日の午後九時から午前十一時の間。司法解剖の結果、気管部分に煤の付着は見られず、鈍器で殴られたことによる脳挫傷が直接の死因だと判明した。凶器については未だ特定できておりらず、現場周辺の捜索も行つたがそれらしいものは今のところ見つかっていない」

今回の事件は、駆けつけた消防隊員が焼け跡から頭部に不審な傷のある焼死体を発見したことから始まった。

検視では、床に接していた為、炭化をわずかに免れていた皮膚に

紅斑がなかつたことから、火災前に頭部の裂傷により死亡したと判断された。しかし遺体の損傷が激しく、ピアノの横で倒れていたこともあり、事故か殺人かどうかの判断が難しかつた為、司法解剖に回された。そして解剖の結果、殺人と断定されたのだ。

続いて、初動捜査にあたつた機動捜査隊から報告が始まる。

「火災発生の一時間ほど前に現場付近で物損事故が起きました。運転手から一月十五日午後十一時十分に通信指令室に通報があり、緑署の交通課員が現場で事故処理をしています。担当した警官が佐伯家の明かりが点いていたのを覚えていました。事故処理は三十分ほどで終わり、その間、付近で不審な人間は確認していないそうです」

「偶然にしてはタイミングが良過ぎじゃないか？被害者との接点はないのか？」

篠原が訝しそうに尋ねる。

「今のところありません。運転手は豊明市在住の会社員で納車されたばかりの車を運転中、ハンドル操作を誤つてガードレールに衝突したそうです」

「そりや災難だ。そんなに見通しの悪い道なのか？」

「緩やかな上り坂になつていますが、まつすぐに伸びた一本道です。ただ辺りは竹林に囲まれてるので夜になると視界はかなり悪いです」

「そうか」篠原は隣の笹島に顔を向け、「ところで失踪中の妹からまだ連絡はないのか？」

「笹島は頷き、「二コースを見て連絡してきてもよさそうなんだが」「そうだな。殺されたとなれば普通は連絡くらい寄こすもんだ。国外にいる可能性も視野に入れて動いてくれ」

「現在、美和の出入国記録を確認中だ」

篠原は頷き、その後も所轄の捜査員からの報告が続けられた。捜査会議が終わり、捜査員たちが続々と講堂から出ていく中、一人の警察官が血相を変えて駆け込んできた。

「おい、どうした？」

笛島が声をかけると、その警察官 どうやら交通課長のようだ
は顔を引き攣らせながら、「運転手の山口が、女が飛び出して
きたから事故を起こしたと言った」と告げた。

講堂内が騒然となる。笛島に至つては「なつ」と声を上げ、その
場に固まってしまった。

俺は田村と顔を見合わせる。もしそれが事実なら、その飛び出しが
てきた女が事件に係わっている可能性が極めて高い。初動捜査時に
その運転手にも話を訊いたはずだ。これは初動捜査を行つた機動捜
査隊と所轄署の失態と言われても仕方がない。

「なんで、今頃そんなことを言い出したんだ！」

笛島は顔を真つ赤にして怒鳴り声を上げた。

「それが運転手は……その、人間とは思わなかつたから黙つていた
と言つていて」

今度は捜査員たちの間に「大丈夫なのか、そいつ」という空気が
漂つ。

「その運転手は薬でもやつっていたのか？」

篠原が呆れたように尋ねると、「いいえ、前はありません。事故
当時、飲酒していなかつたのも確認しています。まして薬をやつて
いたのなら、うちの部下が見逃すはずありません」と交通課長はキ
ツパリと否定した。

うちに落ち度はない、と言い張る交通課長を笛島は呰々しそうに
睨みつけた。

「まだ署内にいるのか？」

篠原が尋ねる。

「はい。うちで待たせています」

「じゃあ、連れてきてくれないか

篠原は頭を搔きながら煩わしそうに言った。

講堂から出ていく交通課長を田で追っていると、「若、望月、田

村ちょっと来い」と篠原に呼ばれた。

「望月たち地取りだる。他の地取りの奴らはもう外に行つちまつたから無線で知らせるとして、お前らだけでも当事者の話を聞いてその女について現場で聞き込んでくれ

「はい」

しばらくして刑事課の部屋に現れた山口は、居心地悪そうに長椅子に座るとキヨロキヨロと不安げに辺りを見回した。そして篠原と目つきの鋭い笹島が向かいに座ると顔を強張らせ、「す、すみませんでした!」と勢いよく頭を下げる。

「あの、のこと黙つてたからここに連れてこられたんですね?」
山口はおそるおそる顔を上げる。

「ええ。あなたにその女性のこと伺いたくて、こちらに来て頂いたんですよ」

篠原が穏やかな口調でそつと山口は頬を引き攣らせた。

「さつき、交通課のおまわりさんに飛び出してきた女の話をしたら、ものすごい勢いで怒鳴られたんですよ。偉い人まで出てくるし。あの、もしかして俺このまま逮捕されるんですか?」

お前が悪いんだろ、と言つように笹島は山口を睨んだが篠原は、「はは、逮捕はしませんよ。安心して下さい」と笑つて否定した。しかし、山口はまだ不安そうに顔を強張らせていた。業を煮やした笹島が口を開きかけたのを篠原が制した。

「それにしても納車されたばかりなのに災難でしたね。車は大丈夫でしたか?」

篠原が尋ねると、「修理にかなり時間がかかるそうです。アレを手に入れる為に今まで頑張つてきたのに……」と山口は力なく答えた。
「車、いいですよね。私も車が好きでしてね。よく休日に乗り回してますよ」

篠原の車好きは本部でも有名だ。よく小林と愛車の話で盛り上がり解らない。

「そうなんですか？何に乗ってるんですか？」

山口は引き攣った頬をわずかに弛ませた。

「RX 7です」

「ああ、格好いいですよね。でも維持費、かなりかかりますよね？」

「ふつ」篠原は鼻で笑い、「この手の車に乗るのなら、それは織り込みずみのことでしょう？それでも難癖をつけるなら乗らなければいい

いい」「す、すみません」

山口はビクリと肩を震わせた。篠原を怒らせてしまったと思つたのだろう。

「まあ、確かにこの車ほど燃費が悪く、メンテナンスを頻繁に必要とする車はないですね」篠原はニコリと微笑む。「でも気持ちいいですよ、本物のスポーツカーは。ロータリーについては言つまでもないですが、あの排気音は痺れますよ。それに他の追随を許さないエクステリアは秀逸と言つていい。社外パーツが多いから妥協せず自分好みにカスタマイズできるのもいいですし、重量バランスも完璧。ああ、ただ難点を言えば低ブースト時のトルクが細過ぎることとボディ剛性の弱さ、特にフロント部分。あと後方の視界が悪すぎることですかね。インテリアがいまいちだけれど、それは走りに特化しているからしょうがないですね。金のかかる美女と付き合つている感じに近いかな」

気持ち良さそうに愛車について語る篠原に、笠島が咳払いをした。

「おつと、すみません。関係のない話を長々と申し訳ない」

そうは言つが、篠原に悪びれた様子はない。

「いえ、勉強になりました。刑事さん、本当に車が好きなんですね」

「ええ、その中でもFDは最高です。色々乗りましたが、あれを超えるものはないですね」

篠原が満足そうに言うと山口は羨ましそうに笑つた。

篠原と山口が打ち解けているその隣で、 笹島はずつと不機嫌そうにしていた。何、呑気に車の話なんかしているんだ、と思っているのだろう。山口の突然の証言のお陰で所轄署は面目を潰されたのだから、苛立つ 笹島の気持ちも解らなくもない。

「さて。お手数ですが、事故当日のあなたの行動についてもお訊きしたいので、もう少しお付き合い下さい」

篠原の言葉に山口は急に顔色を変えた。

「俺、何もしてないですよ！車で通つただけだし、殺された女性だつて知らないし！」

自分が疑われているのではないかと山口は思つたらしく、興奮しながら長椅子から立ち上がつた。

「落ち着いて下さい。あなたを疑つてゐる訳ではありません。すべての関係者の方にお訊きしてることなので」「理解下さいよ」

山口はホッとしたように長椅子に腰を下ろした。そして、だいぶ緊張もほぐれてきたのか饒舌に当日の行動を話し出した。

ディーラーから車を受け取ると嬉しさのあまり何軒かの友人宅に自慢して周り、その後、午後十時半頃まで緑区に住む会社の同僚と食事をしてから、東郷町に住む彼女の家に行く為にあの道を通つたのだという。初めて通つた道だつたらしく、竹林の脇に一軒だけぽつんと建つ佐伯美奈の家を不気味に思つたそうだ。その直後、女が飛び出してきて事故を起こしたらしい。

「その女性は、どこから飛び出してきたか覚えてますか？」

「事件のあつたの方からです。運転席側から突然飛び出してきたから、間違いないです」

自信満々に話す山口に篠原が無言で頷いた。

「飛び出してきたのはどんな女性でしたか？」

「それが、すつごく綺麗な女だつたんですよー容姿端麗、眉目秀麗、八方美人、なんかこんな言葉ありましたよね。そんな感じです。あ

つ、でも見惚れたせいで事故った訳じゃないですよー。」

山口は興奮気味に捲し立てた。

言いたいことは理解できる。いくつか用法が違うけれど。しかし誰もそれについて突つ込みはしなかった。

「判つてますよ」篠原は頷く。「何か他に特徴はありませんでしたか?」

「特徴、ですか?一瞬だつたしな。えーと、背は低かつたと思います。あと髪は短かつたかな。ジーンズを穿いていてTシャツ……だつたような」

山口は頭を少し傾け、記憶を辿りながらぽつりぽつりと答える。どうも意識はすべて顔にいついていたようだ。

「では、その女性がどの方向へ逃げていったか覚えてますか?」

「えー、車のことでの頭がいっぱいだつたからなあ。それに車から降りて辺りを見回したけど、もう影も形もなかつたし。だから幽霊かと思つたんですけどね」

山口は肩を竦めてみせた。

幽霊つて。篠原もさすがに苦笑いを浮かべてゐる。その後もいくつか質問を続けたが、彼からほそれ以上の情報を引き出さうとはできなかつた。

「ありがとうございました。事故は災難でしたが怪我がなくて幸いでしたね。また何か思い出した時は報せて下さい」

山口は、やつと帰れる、と大きく息をついて立ち上がると、「ほんつと、災難つすよ。やっぱり神様なんていないんですね」と言って部屋から出ていった。

俺たちは少し離れた場所から山口と篠原たちのやり取りを見ていたが、話を聞く限りでは彼が嘘をついているようには見えなかつた。もちろん山口の当日の行動と彼と被害者との関係も調べることになるが、彼は事件とは関係なさそうに思えた。それよりも

「神様ねえ」

笛島が呟いた。いい歳して何言つてんだ、と言いたげだ。

「存在しないってことが解つただけでもよかつたじゃないか」

篠原は立ち上がり、興味なさそうに言つと大きく伸びをした。期待していたほど情報が得られなかつたこともあり、少々ご機嫌斜めだ。

「若さんは相変わらずですね」

顎に手を当てながらニヤニヤしている若林に向かつて俺は言つた。

「女の子、大好きだから」

「でもその女が犯人かもしけりんですよね。もっと特徴があれば

聞き込みも楽なんだけな」

「犯人かどうかはまだ判らないさ。限りなくクロに近くてもな。あと 容姿端麗な女 つてのも結構な特徴じゃないか。頑張つて行つてこい」

「うつす。ところで里見さんは？」

「今こっちに向かつているそうだ。夜の会議には間に合つだろつ」
法事で北海道の実家に帰郷中の捜査一課で唯一の女性刑事である里見は、同期の若林と 最初は年下だと思っていたが コンビを組んでいた。かなりの美人なのに若林は女性として見ていいらしい。さすがに公私の別を弁えてはいるようだ。

ふと目をやると、田村が無表情でこっちを見ている。早く捜査に行くぞ、という無言の圧力をかけているのだ。解つてゐるよ。睨むな。

「じゃあ、行つてきます」

田村と部屋から出ようとした時、女性警官がちょうど部屋に入ってきた危うくぶつかりそうになる。慌てて避けると、彼女は俺たちに軽く一礼してから篠原たちに声をかけた。

「佐伯美奈さんの」家族の方がお見えになりました

心なしか彼女の頬が赤く染まっているように見えた。

「ああ、入つてもらつて」

祖母である佐伯馨が緑署に来ることになつてていたのだ。 笹島と話をしていた篠原がそう声をかけると、女性警官は頷いて部屋から出ていった。 入れ替わるように部屋に入ってきた人物に、誰もがいや、田村はいつもの無表情のままだつたが 息を呑んだ。

陶器のような艶やかな白い肌。 長く伸ばした前髪から覗く、憂いを帯びた漆黒の瞳とバラのつぼみのような小さな唇。

聖女 とは、この少女のことをいうのかもしれない。

田の前に佇むビスクドールのような美少女を見つめながら俺は思つた。 そして、あの女性警官の頬が赤く染まっていたのはこの美少女のせいだつたのかと納得した。

あどけなさの残る可憐な美少女は俺たちに向かつて小さく一礼して顔を上げると、何かに気づいたようにこつちに向かつて駆け寄つてきた。

「刑事さんだつたんですね。あの時はありがとうございました。あの、僕のこと覚えてますか？」

顔を引きつらせた若林に美少女が声をかけた。

驚いたのは俺だけではないはずだ。 篠原や笹島があんぐりと口を開けて呆けているのだから。 人並の感情表現を持たない田村は別として。

いやいや、今問題にするべきはそんなことではない。 俺は若林たちに視線を戻した。 すると美少女改め、美少年は再び憂い顔になり、「あの、姉の事件についてなんですが……」と口を開いた。

俺は彼の言葉に違和感を覚える。 いや、もつと早くに気づくべきだつた。 佐伯美奈には失踪している双子の妹と祖母しか家族はいな

いはずだ。それに、美奈は世間一般でいう美人の部類には入るが、彼とはまるで次元が違う。

もちろん篠原たちも気づいていたようで、彼を長椅子に座らせるとそのことについて尋ねた。

「姉とは父親が同じなんです。僕は認知されていないので戸籍上は他人ですが。失礼しました。僕は、水島透といいます」

そう言って、水島は緊張をほぐすように大きく深呼吸をした。

俺は横目で隣に立つ若林を見る。若林は困惑した様子で水島たちのやり取りを眺めていた。

まさか若さん、男もありですか。

俺の戸惑いに気づいたのか、呆れ顔の若林は俺の頭を軽く小突いた。

「そんな趣味はない」

「じゃあ、ナンパしちゃつたんですか？」

「違う。男たちに絡まれていたのを助けただけだ」

そう言って若林は大きな溜め息をついた。

「……間違えたんですか？ 女の子と」

若林は唇をすぼめ、「そうなの。俺の人生最大の汚点だ」と情けない声を出した。

囁くもの（7）

「……通報もせずに逃げ出したりして……すみませんでした」

水島は深々と頭を下げた。

山口の車の前に飛び出してきたのは彼だった。それについては、彼が部屋に入ってきた時から誰もが気づいていたこともある。

水島透。市内の大学に通う学生で現場の近所に住んでいいると
いつ。

識鑑班　　被害者の関係者の聞き込み担当　　である若林は彼の話を聞く為に残ることになり、望月たちは聞き込みに向かった。若林は壁に寄りかかりながら、篠原と水島のやり取りを遠巻きに眺めていた。

「……最近、姉の様子がおかしかったんです。それでの夜、僕……」

「美奈さんの様子がおかしかったというのは?」

「一週間くらい前から急に……何かひどく悩んでいる様子でした。理由を訊いても答えてくれなくて。それで余計に心配になつて」「何か思い当たることはありますか?」

水島は首を振る。

「僕もその時期は忙しくて姉とあまり会つていなかつたので。……すみません」

「そうですか。では、事件当夜について詳しく訊かせて下さい」

篠原がそう言つと、緊張した面持ちで水島は頷いた。

「あなたは何時頃、佐伯さんの家に行かれたのですか?」

「午後十時五十分頃だと思います。姉の家から歩いて十分ほどの所にあるバイト先から帰る途中、家のリビングの電気がついていたのが気になつて……」

なるほど。だから深夜の訪問なのか。

若林は納得しながら、水島の手許をじっと見ていた。さつきから

ずっと、膝の上に置かれた左手親指のつけ根辺りを右手親指で擦り続いている。落ち着かないからか、それとも癖なのか。

「それでどうしましたか？」

「あ、はい。呼び鈴を鳴らしても応答はありませんでした。不安になつて、僕は家に上がつて」現場の状況を思い出したのか、水島は苦しげに顔を歪めた。「リビングのドアを開けると、姉が……」「すると、玄関のドアには鍵がかかってなかつたんですね？」

「……え、かかつてました。あの、郵便受けの内側に隠してある予備の鍵を使って」

「あなたは佐伯さんの家の鍵を持つていなかつたんですか？」

「はい。姉のいる時にしか行かないの必要ないと断つたんです。それで、予備の鍵を」

水島は苦しげに答えた。

「予備の鍵はいつものよつに郵便受けの中にあつたんですね？」

「はい」

「そうですか。……失礼しました、続けて下さい」

篠原は唇に人差し指を当てながら低く唸つた。

「慌てて、倒れている姉のもとへ……姉は頭から血を流していく……」

僕は「水島は呻いた。「助けもせずに……」

水島は前屈みになり、膝の上に組んだ両手に頭を乗せた。体が微かに震えている。

「大丈夫ですか？」

「は、い。すみません」

水島はその体勢のまま僅かに頷いた。篠原は再び質問を続ける。「リビングに入つた時、石油ストーブがどこに置かれていたか覚えていりますか？」

水島はゆつくりと上体を起こした。そして眉間に深い皺を寄せ、記憶を辿る。

「姉はいつもストーブを窓際に置いていました。カーテンがあるから危ないと注意したら、ピアノが窓際にあるからここに置かないと

寒いのよ、と姉は言つていました。……すみません、動顛していく

……覚えていません。一番に田に入つたのが姉の姿でしたから。……」

水島は申し訳なさそうに答えると、再び親指のつけ根の辺りを擦り出す。

「他に何か気づいたことはありますか?」

水島は力なく首を振る。

「そうですか。……家を飛び出したあなたは、車と接触しそうになつたんですね?」

「……はい。あの、運転手の方は」

「無事ですよ」

水島は安心したように表情を和らげ、「そうですか。……よかつた」と呟いた。

若林は山口の顔を思い出す。もし彼が、飛び出してきたのが男だと知つたらどんな反応をするだろう。それを考えると思わず口許が弛んだ。

若林は篠原たちに視線を移すと、一人は水島の手許をじっと見ていた。もう一人の時点になると彼らも水島の奇妙な手の動きに気づいていた。

「その後、あなたはどうされましたか？」

篠原は水島の手の動きには触れずに質問を続ける。

「気がついたら……家の布団の中で震えていました。どうしていいのか判らなくて、ただ信じたくない、夢であつて欲しい、これは夢なんだ、と必死に思い込もうとして……」

水島は苦しげに顔を歪め、組んだ手を額に押し当てた。

「普通は誰だつて驚くものです。誰もあなたを責めはしません」

篠原の言葉に水島は髪を振り乱しながら首を振る。

「……怖かつたんですね」水島は震える声で呟いた。「倒れている姉が母と重なつて。……母は、くも膜下出血で倒れてそのまま亡くなりました。学校から帰ってきた僕が発見しました。その光景が、また……。今度は姉が。怖かつた。また独りに、なるのが……。あの時、僕は現実から逃げようとしたんです」

彼の悲痛な声が室内に響き渡る。篠原たちは水島に自由に語らせる為か、無言のまま彼の話に耳を傾けていた。水島は声をつまらせながら、亡くなつた美奈に対して何度も謝罪の言葉を繰り返した。

「……本当は何度も警察に連絡をしようとした。でも、受話器を手に取るたびに

「……」口のむる水島に、「どうしました？」と篠原が尋ねた。

「……あの人の、顔が浮かんで」

「の人？」

「……佐伯、馨さんです」

目を伏せたまま水島が答えた。

篠原は少し考えるように顎を摩りながら、「あなたから見て佐伯

馨さんはどんな人ですか？」と尋ねた。

水島は少し戸惑いの色を見せた。そしてしばらく迷った後、決心したように口を開いた。

「怖い、人です。僕は小さい頃からあの人気が怖かった。声を聞いただけで震え上がるほどでした。母にいつも酷いことを言って：「そのたびに母は泣いていました。僕にもあの人人は容赦なかつた。あの人にとっては、僕たちの存在自体が許せなかつたようです。だから僕たちは、あの人と係わらないように隠れるように生きてきました」

「なるほど。佐伯馨さんと係わることをあなたは恐れたんですね」「……最低です。僕は自分のことしか考えていない」悔しげに唇を歪めた水島は、すぐに真顔に戻ると真剣な眼差しで篠原を見据えた。「刑事さん。姉を見殺しにした僕は、どんな罪になりますか？」

次の瞬間、水島の指が左手の皮膚を傷つけ、そこから小さな血の玉が浮き出た。それでも彼は左手を擦り続ける。

若林は血で赤く染まつた水島の左手を見つめる。

彼にとって昨夜は途方もなく長く辛い夜だつただろう。彼の証言が事実ならば。

篠原を見ると、水島の真意を測りかねているようだつた。しばらく黙つて考えていた彼はおもむろに口を開いた。

「佐伯美奈さんは即死でした。あなたが見たのは　彼女の遺体です」

手の動きが止まつた。水島は目を見張り、顔を強張らせる。そして、本当なのか、と笠島の方に顔を向け、彼が肯定するように頷くと「そ、んな」と声を漏らした。

水島の大きな瞳から零れ出了た涙が陶器のような肌を滑り落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7327d/>

COMBINATION

2011年10月10日03時18分発行